601
35

0053498000

0053498-000

601－35

アチックミューゼアム彙報

アチックミューゼアム

第２１

昭１３

AIA

I27F-8
656

601
35

アチック　ミューゼアム彙報　第二一

復刻 奥のしをり

船遊亭扇橋著

アチック　ミューゼアム刊

復刻 奥のしをり

アチック ミューゼアム彙報 第二一

船遊亭扇橋著

アチック ミューゼアム刊

601
35

凡例

スベテ原本ノ儘ニ復刻スルコトヲ以テ原則トシタ。

例ヘバ、

(1) 濁點ノ無キモノモ妄リニ加ヘナカツタコト。

(2) 誤字、脫字モソノマヽトシテ、甚シキハ初出ニ限リ（ ）ヲ以テ註ヲ加ヘタコト。

(3) 判讀シ難キ文字ハ近似ノ字ヲ當テ傍ニ（カ）ノ記號ヲ加ヘタコト。

(4) 誤脫ノ存否ヲ疑ハレルモノハ現文ノマヽトシテ傍ニ（マヽ）ノ記號ヲ加ヘタコト。

(5) 振假名ハ原本ニ加ヘラレタモノノミニ限リ加ヘタコト。

(6) 原本行間ニ散見スル補筆ハ六號ニテソノ箇所ニ示シタコト。

但シ、印刷ノ技術上、竝ビニ通讀ノ便宜ヨリシテ、

(7) 平假名、片假名ノ形似セルモノ「シ・し」「ツ・つ」「リ・り」等ハ便宜ニ従ツタコト。

(8) 「ー(し)」と「ミ(ゐ)」ノ判別シ難キハ「ゐ」ニ従ツタコト。

(9) 欄外上部ニ右ヲ頭トシテ細書セルモノヲ六號割註トシタコト。

(10) 變態假名ノ大部分ヲ平假名又ハ漢字ニ改メタコト。(「ゟ」ヲ「之」又ハ「の」ニ改メタル如キ)

(11) 原本「所」字ハ殆ド「耐」ニ記サレテ居ルモノヲ改メテ「所」ヲ用キタコト。

(12) 同ジク「被」「餘」ハ殆ド「ヒ」「余」デアルノヲ「被」「餘」ニ替ヘタコト。

(13) 又極メテ稀ニ、漢字ヲ假名ニ、假名ヲ漢字ニ替ヘタ箇所ガアル。其場合(カエ)ト符號シタコト。

(14) 全文ニ句點ヲ加ヘタコト。(但シ○ハ原本ニ加ヘラレタマヽ、表シタモノデアル)

(15) 挿畫ハ稍縮寸シテ全部挿入シタコト。

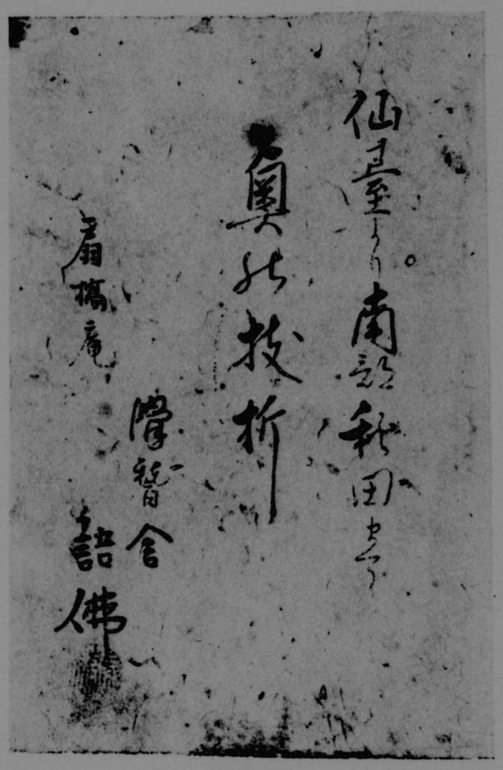
復刻奥のしをり　目次

寫眞 …… 卷頭
凡例 …… 卷頭
奥のしをり
　仙臺より南部秋田まで …… 一
　秋田より津輕まで …… 四五
　津輕より秋田へ歸る …… 七五
附錄
　奥のしをり行程圖 …… 附一
　奥のしをり日程表 …… 附三
　著者に就いて …… 附一五

復刻　奥のしをり

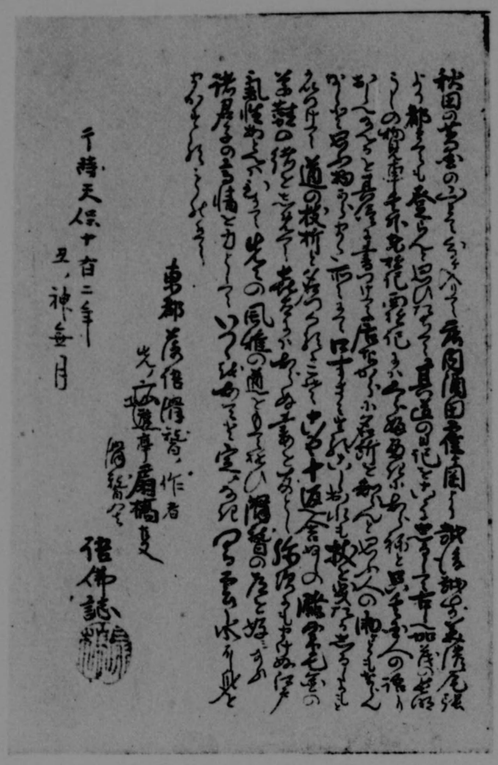
奥のしをり　目次

讀者に敬見せる　二代目船遊亭扇橋三代目並木五瓶に關する傳記的記載……　附一九
參考年表……　附二二
二代船遊亭扇橋と並木五瓶の稱號……鈴木行三氏　附二三
索引……　附三四



奥の枝折（祭魚洞文庫蔵）

巻一表紙



木川半之丞氏作

序文

仙臺より南部秋田まで

奥の枝折

扇橋庵　滑稽舎　語　佛

濱まつの音もしつかに納りて枝もならさぬ時津風、豊なる世に生し榮しさハとるへき弓は楽山子に譲り太刀ハ御堂へ納ツヽ、風雅の道を種として狂歌俳諧川柳も只うしたちの口眞似はかり、滑稽落語の作を業として世を送ると五十餘年、若かりし頃より遊層(マヽ)を好ミしか先師扇橋居士世を早ふ去り玉ひて我其名を請嗣て教し子の爲に足を留ると二十有餘年、其門人の中にも廣キ大江戸の内に壹人二人とかそへられたる麗々亭柳橋都々一坊扇歌なれと譲りて世を支うせんと思ひしかひもなく、四十路に三ツ四ツといふとし我より先に身まかりぬ、かくてやむへきにあらねハ、其次なる入船扇蔵といへるに名をつかせて、我ハ先ノ扇橋庵語佛と改て漸ミ思ひをはたしぬ、かゝるまゝ子ハお係やけにつかうまつりて江戸に居りぬ、壹人ハ水府の身うちにつかへて水戸にありぬ、二人とも武士の数にいりて最早此世に思ひおくと更になけれハ、今たひおもひたちて常陸の國水戸より鹿島立チして同し國なる名所會の關を越て岩城なる湯本にゆあミし、平ラてふ所にしるへして尼橋といへる道人を尋(カ)、相馬の駒の足にまかせ磐の奥の松島を見物し、南部の末のまつ山より津輕のはてなる外ケ濱善知鳥鳥の行末をたつね、出羽の國なる秋田の黄金の山まて分ケ入りて、庄内酒田鶴ケ岡より越後越前美濃尾張より都まても登らんと思ひたちて、其道の日記をこゝにしるして古しへ加茂の長明うしの物見車其外東遊記西遊記にハくらふへきにあらねと、只其國人の語りおしへ玉へるを其儘に書つけて、居なからに名所を知らんと思ふ人の助ケともならんかしと思ふ物から(れ)、また所ゝにて口すさミたるこしおれも枝を曳たるしるしにもとかいつけて道の枝折と名つくるにこそ。(こや

仙臺より南部秋田まで

十返合ねしの膝栗毛金の草鞋の緒をしめて喜太にハあらぬ妻を友とし、彌次にもまけぬ江戸氣性あとへハひかて先々の風雅の道をもて遊び、滑稽の道を好ミ玉ふ諸君子の高情を力として、いつくをあてと定メなき闇雲水に身をまかするものは

于時天保十有二年
丑ノ神無月

東都落語滑稽ノ作者
先ノ疝遊亭扇橋事
滑稽舍
語佛誌

天保十二丑十月廿八日他臺御城下ゟ到着致シ長町と申所迄三笑亭五樂向ひに出、大町五町目御目明シ鈴木忠吉殿方ゟ參りゟ而（嫌）糖藏町峰岸善左衛門様御長屋五樂方へ落付キ申ゟ、廿九日早朝忠吉殿身内にて鈴木屋龜吉殿と申十人組同八百善源六殿と申仁、是ハ龜吉殿弟にて二人被參寄相談取極メ、十一月三日より新傳馬町後藤屋と申宅にて日數廿日之間賣切興行相始メ申ゟ、願主ハ信濃屋善左衛門、尤講談師咄シ家其外中事類ハ三願主と申て小竹屋長兵衛信濃屋善左衛門眞壁屋新藏三人之願ニ御坐ゟ、芝居三太夫と申有之、右太夫之願にて歌舞妓ハ不相成人形操之申立にてゟ間、江戸より役者參りゟてもこしへ人形の面を附ケ舞臺ハ五人より出られ不申、大詰メに相成大せい出ゟ節ハ用の無キ時ハうしろむきに相成居り申ゟ、淨瑠理豐後新内ふし說經等ハ三味セん引有之ゟ間、檢校様門人に相成不申ゟてハ興行出來不申ゟ、我等より先に女淨瑠理津賀多國分町と申所にて興行致シ居申ゟ、并新内ふし吾妻路富士太夫、是ハ肴町にて興行、說經上るり薩摩（マヽ）千賀太夫同伊久太夫、是ハ南町にて興行致シ居ゟ、其外八人藝奥州上るり所々に興行御坐ゟ、五町目後藤屋千代吉殿と申料理茶屋、是ハ昔より知る人にて見舞いたし、南町元御目明シ安太郎殿と申仁の娘おいなと申、是も料理茶屋にてそんし居ゟ間見舞いたし、其外鳴物師雲次殿七兵衛殿木町吉岡と申料理茶屋、いつれも昔より知る人にて見舞致シ申ゟ、三日より五日興行致シゟ所家形様御法事に付鳴物停止にて二晩相休、又々大雪に一ばん相休廿五日千秋樂致シ、それより廿七日より二日町二番町と申所にて十五日之間興行致シ十二月十二日千秋樂、又々石町と申所にて十日之間興行致シ廿二日千秋樂、目出度越年致シ申ゟ、他臺まて扇屋一蝶ト申弟子夫婦馬生門人馬好ト申連レ參り申ゟ所、十二月十四日、和哥名屋扇蝶ト申門人たつね參りゟ、都々一坊門人にて歌山申者ニて尾州名古屋ノ者ゟ、我等門人ニ相成申ゟ、越後より松前へ渡り

他臺より南部秋田まて

南部へ上り奥筋所〻を興行いたし、石の巻にて我仙臺へ下りゐ事きゝたつね参り申ゐ　正月二日八百善源六方にて噺始メ致シ、それより日〻所〻にて御坐敷致シ申ゐ、二月二日より新傳町米屋と申方にて龜吉殿并黒玉圓直吉殿と申仁之せ話にて十五日之間寄坐舗致シ申ゐ、十二日八百善源六殿宅にて景物茶番之催シ有之、國分町伊勢屋半右衛門殿と申書林掌善坊と申仁、是ハ富家にて一朝と申御醫者、本名ハ奥村玄朝殿と申ゐ、其外文叟ト申俳人樵堂治調忠吉殿ハ五調龜吉殿ハ萬龜庵と被申ゐ、源六殿ハ古久升ト申て是も俳諧をよく被致申ゐ、芝居好キにて少〻狂言なそも出來申ゐ而おもしろ人物に御坐ゐ、これより所〻にて景物會催し有之右之連名を我等に附呉ゐ様に被申ゐ間花咲連と名附ケ申ゐ、是よりミな〳〵心安く相成、中にも掌善坊殿殊之外ひいきに相成、右之宅宅庭に藤にて橋をこしらへ有之ゐ故藤橋と名附ケ申ゐ、日〻藤橋殿方へ参り居ゐて連中出會いたし画讃哥と申とを始メ樂しミ申ゐ、後にハ釋迦堂梅惣と申料理屋其外木町吉岡所〻にて會合いたし遊ひ申ゐ、料理茶屋ハ木町の吉岡肴町奥田五丁目後藤新傳馬町八百善吉野屋肴町大黒屋其外所〻數多有之ゐ　一蝶ト申者ハ元林屋一藏門人に武州川越ノ者にて上方へ参り、越前ゟお安ト申女女房ニ致シ連レ参り、會津より同道致シゐ所女房身持にて五樂方に正月出産致、男子にて我等奥州にて生れゐ間奥太郎名附遣シ、川越へ歸り度よし申ゐ間仙臺より出立いたさせ申ゐ　正月二日三日より万歳田植おとりと申者出申ゐ、大田植と申ハ乞食にてハ無之家舗守にてやん十郎と申者之株にて、はねこ田植と申ハ若イ者供いろ〳〵思ひ付きをいたし、虎狩雀おとり唐人龍人なそに相成やん十郎へ仕切り出しゐてなくさミかてらに出申ゐ、三味せんハなり不申、笛太鼓すりかねにてはやしたて町中をはねまわり、大家の内へはねこミ祝義をもらひそれにて酒を呑ミさわき申ゐ、我等居申ゐ峰岸様の長屋内より吉野屋の息子吉兵衛と申者右之方より出申ゐ、歸りにハミな〳〵酒興にて喧咤なといたし日〻大さわきに御坐ゐ、これより日〻肴町南町所〻にて座舗いたし、廿一日鹽竈より松しま金花山見物に参り申ゐ、尤連中ハ掌善坊古久升其外二三人にて参り申ゐ、原ノ町と申所より案内と申所ゆとふふ名物にて、そは切とふふにて至而ほそくきりしたじにてくわせ申ゐ、是より壺の石碑を見物いたし申ゐ、昔シ此所に多賀城と申有之、此碑ハ多賀城の碑にて實の壺の碑と申ハ南部七ノ戸に有りゐ由、壺村石ノ碑と申地名有之由

去　京ヲ　一千五百里
去蝦夷國界ヲ　一百二十里
西　去常陸國界ヲ　四百十二里
去下野國界ヲ　二百七十四里
去靺鞨國界ヲ　三千里

此城ハ神龜元年歳次甲子按察使兼鎭守將軍從四位ノ上勳四等大野朝臣東人之所置也天平寶字六年歳次壬寅參議東海東山節度使從四位上仁部少卿兼按察使鎭守將軍藤原ノ惠美朝臣朝儁修造也

天平寶字六年十二月一日

○都よりはるけきミちのおくふかく多賀建にけん壺の石碑

○石碑やうつす矢立の壺すミれ

原ノ町より二里餘燕澤と申所に碑有之よし、是ハ古しへモウコノ僧の建しと申と也、此所に高尾山善思寺ト申有

仙臺より南部秋田まで

之よし、是ハ高尾か菩提所にてゆよし歸りニ立寄可申存ゆ所是へ出不申、高尾の戒名有之と申と也、うつし不申殘念に御坐ゆ、是より鹽竈へ出申ゆ、町家數二百四五十軒も可有之妓樓數多有之中にも大竹屋田中屋なんと申大家にて其夜は田中屋に一宿致シ申ゆ、魚類殊之外澤山にてはも名物也、貝類澤山にてあわびなまこかきほやほつきしうりなと申貝有之、此しうり貝を似たりと申ゆ、是ハ女の道具によく似たるゆへににたりと申也

鹽竈六所大明神　味耜（アシスキ）高彦根命　社領千四百石

奥州一ノ宮也、神前に石ノ燈籠有之、泉ノ三郎親衡寄進ト有り、町のはづれに鹽竈四ツ有り、此所をさして鹽竈町と申也、此竈の水汐の滿干を知ると申と也、是より入リ海也、此所を千賀の浦と申也

○神垣の霞も今に烟るかと遠目にみつの千賀の鹽竈、廿二日此所より船にて松島を見物致シ申ゆ、松島瑞岩寺境内凡三里と申、尤小道六丁一里也、代々正宗卿ヨリ靈廟也、海中ノ小島有數百曲と申と也、眞事に天下の絶景也、島々に名有リ○地藏○毘沙門○仁王○大黒○惠美酒布袋等ノ像或ハ○大皷○屛風○甲冑等ノ形也、船に乘シて是を見るに凡十四日を不經ハ不見盡と云ウ、富ノ觀音と申有り、此山より松しまを一目に見おろす故松島の景ハ富にありと申也、絶景言んかたなし

○昔より名にふる島の千歳に沖を越へたる松しまの景

是より石の卷へ出、其夜ハ門トの脇にて一宿いたし、廿三日湊和田ノ羽を越シ山島の渡シと申所へ出、此所海上壹里斗の渡シにて鐘をつきゆへハ向ふゟ渡シ舟參り着類を改メ渡る也、古しへ國の守御城御普請に付弁才天へ祈願を欠ケ金花山より金を堀出（掘）しゆ所、御城普請出來上りても又々金を堀出し加升ニ入レ此處へ積置ゆ所、一夜の内に山島と成り御山へもとりし故此所を山島の渡シと申よし

○山島の尾の上はるかに見渡セハ山のすかたも水にうかひて

金花山辨天　陸十三里　海上十七里　海中の島也

聖武帝天平二十年自當山始メて出黄金を國司より京師ニ獻之、金海鼠名物也、山の奥に水晶之大石有リ、高サ五丈六稜三抱と申と也、仙人澤其外見所多シ、山中一面に金色砂也、土ばくというたくひなるへし、海の岸より海中をのそけハ水中一面に金色也

○陸の奥に咲や黄金の花の山いつの頃よりひらきそめけん

此御山より砂にても持歸るとならす歸りにハわらしまてはきかへ申也、其夜石の卷迄歸り一宿いたし、廿三日高木と申所へ泊り、廿四日（五）御城下へ歸り申ゆ、廿六日名殘りの會相催シ、廿七日出立と相極メ申ゆ所大雪にて廿九日仙臺出立致、七木田と申所まて連中其外ミな〳〵送りに預り、餞別之狂哥誹諧もらひゆて此所にて別れ申ゆ

扇蝶國元へ歸り申度由ゆ得共、南部より奥筋案内にゆ間案内いたさせ、扇蝶馬好四人連レにて仙臺御城下出立ツ致シ申ゆ

○幾度か跡もとりする春の旅花咲連にこゝろひかれて

（三）二月朔日吉岡と申所へ參り申ゆ、尤御目明シ忠吉殿ゟ奥筋〆り役衆中へ廻文にて上州屋順吉殿と申方へ一宿致シ橋吉殿留守にて逢不申、二日三本木より古川へ參り〆り役太市殿と申方へ參り、三日太市殿せ話にて十日町若イ

衆立元にて五日之間寄興行いたし、二日ひのへ致シ七日興行致シ申ハ、それより三日町徳兵衛殿と申仁の宅にて二晩座舗いたし申ハ、此所に緒絶之橋と申有之橋守柏庭と申仁之宅に行脚の句帳有之、風流なる人にて日ゝ出会致し哥仙なと催シ申ハ、緒絶ノ橋、奥州志田郡稲葉村大柿村之間にて幅四間長サ六間、往昔より緒絶之橋と名付く、此所の者もいかなる譯ケと云ふとを知らす、橋の本に一樹の柳有り、是を玉の小柳と云ウ、大名方之御哥發句數多有之其一ツ二ツをうつす

もろ人の言葉の露やしら玉の緒絶の橋にかけてあまれる　羽太安藝守様　正養

名にも似す旅もたへぬや橋すゝみ　南部信濃守様　鳳扇

雪中鷹狩に出此所に宿りをもとめし朝

旅人のゆきゝ緒たへの橋の名も雪にあらわすけさの通ひ路　奥州の太守　吉村

鶯生中の十日古川に宿りけるに故羽林吉村公の御詠哥を拝吟して

鳥の跡にむかしの名のミ殘すらんをたへの橋ハよし朽るとも　一ノ關縣　村隆

陸奥の緒絶のはしハたへすしもまた歸りこん旅の衣手　同

天保癸巳ノ晩春古川ノ驛に跡をとゝむる此所に有名の橋有りときゝて

菊の花や橋結こして田甫道

其外句帳の一二句をしるす

松前公　維嶽

軒涼る蔦の緒たへや軒ひとつ

行人のをたへや我を秋のくれ

みしか夜や夢も緒絶の橋の音

雪中庵蓼太

柏庭主ヶ新らしき句帳を取出し我レにはし書セよとこわれけるにいなミかたくてすこし斗のはし書を書つけて

○をたへとハふミ見てしりぬ陸の奥名も古川にはしのありとハ

此柏庭と被申ハ仁ハ實名紺野直之輔と申て庄屋なそつとめられハ仁也

鴈　窓

三月十日古川出立致シ、是より荒谷高清水築館澤邊有壁一ノ關迄參り、伊勢半殿ゟ手紙にて千葉新助殿と申仁、是ハ狂歌師にて掌善坊友明の由たつねハ所留守にて逢不申(カ)、それより山ノ目〳〵り役藤吉殿と申方へ參り申ハ、藤吉殿世話にて三晩さしき致シ、それゟ十四日山ノ目出立前澤より水澤へ參り申ハ、山ノ目ゟ二里斗高館と申所有之、此所古しへ義經公館の跡にて義經大明神の社有之、是を判官館とも申ハ由、はせをの碑有之

夏艸や兵者どもの夢の跡

暮面庵曉堂

○兵ものゝ夢の跡とし來て見れハさて目のさむる山のありさま

それより一里餘櫻川と申所に茶屋二軒有之、是より中尊寺へ登る也、中尊寺寺領五十石、本尊ハ阿彌陀如來藥師堂有之、辨慶之像有之、龜井六郎片岡八郎の笈有之、開基ハ行叡上人、辨天堂に紺地之佛像欠地十三幅有り、光り堂久藏寺ハ清衡基衡秀衡ノ菩提所にて靈廟也、本尊觀音、七寶の卷柱、扉ハ布着セ不殘金塗り也、光り耀くゆ

仙塚より南部秋田まで

へ光り堂と申也、八十年の間雨さらしに相成居りゐよし、今にてハさや堂有之、経堂清衡基衡秀衡三代の寄進、紺紙金泥之経文納有之、一萬巻ツヽ三萬巻、秀衡のハ竹紙也、此かたわらにもはセをの碑あり

五月雨のふりのこしてや光り堂

○世にふりし昔なからの光り堂今にその名もかゝやけハとて

此山の下に衣川有り、奥の院ハ是より二里餘、達谷ヶ岩谷(窟)またイツクシの瀧といふ有り、登丈餘りの大石あり、桂の大樹一木有り、此夕方水澤三本木と申所ゟ役善助殿と申方へ落付キ申ゐ、早速善助殿世話にて五日之寄興行致申ゐ、此所に吉三郎の墓有り、萬日寺(ト)申寺の地内にて金比羅堂の脇に有り、お七か菩提の為諸國を修行なし此所に庵を結ひおわりをとけしと云傳ふ

中興来ノ誉地阿浄蓮和尚　延寳十二未歳三月十有七日有之

○いかはかりかたき契りや水澤へ流れ来てさへ残る石碑

十七日水澤出立致シ岩谷堂と申へ参り申ゐ、ゟり役可平殿と申仁之方へ落付キ申ゐ、早速御館へ被召申ゐ、清兵衛殿と申仁たつね被参ゐ、是ハ先年我等此地へ参りゐ節至て心安く致シゐ人にて其御唐扇與と申物を持参致シゐ所無心いたされゆつり申ゐ、今に我等か片身とて大事に致シ被置ゐ由、最早我等も五十餘に相成ゐ得は此仁も五十餘にて命あれハめくり逢申ゐとて日ゝ遊ひに被参申ゐ、可平殿セ話にて五日之間よせ興行いたし、それより坐舗致シ四五日居申ゐ、此近邊土澤と申所に石蛤と申て蛤の形之石有之、可平との其外二三人にてひろひに参り申ゐ、歸りに大名長根と申所に出申ゐ、此所ハ一里四方平らかなる所にておりしも一面につゝじ咲ミたれ其うつくしきといわんかたなし、此所にて弁當をひらき終日楽しミ申ゐ

○ひろひたる石蛤を看にてつゝじも酒の色に出にけり

四月朔日岩谷堂出立、是より南部鬼柳と申所へ出、關東元吉殿と申ゟり役之方に一宿いたし、是ハ水澤善助殿方にて近付キに相成申ゐ關東之者にて一夜咄シ明シ申ゐ、此所南部入口にて御番所有之、是より黒澤尻と申所迄一里斗有之、此所に宿屋にて鬼孫七と申人有之ゐ、先年此所を通りゐ節世話に相成ゐ間たつねゐ所最早夫婦共故人に相成、娘はかり後家に相成居申ゐ、それより花巻と申所へ出、其夜ハ石鳥谷と申所へ泊り申ゐ

三日石鳥谷ゟ盛岡入口に津子(志)田と申所有之、三十年程以前佐川東幸と申噺家、是ハ南部ゟ出ゐ者にて病気にて腰立チ不申、國へひつ込此所ヲひらきゐて遊女屋致シ、遊女屋二十軒程建申ゐて女房ハ三味セんを弦申ゐ故藝者を仕立テ、南部よし原と名付殊之外賑わしく、遊女三四十人も有之藝者も十人も有之、盛岡より四ツ手駕(マヽ)にて通ひ申ゐ、我等二十四五年跡参りゐ節も未遊女屋五六軒も残り居申ゐ、今ハ御取潰しに相成皆百性屋に相成居申ゐ中に今以テ二階に赤キ格子なそ残り居申ゐ、それゟ川原町と申所に船橋有之、川は丶三十間斗之所兩方へ太キくひをうち鐵のくさりにて舟をつなき其上へ板をしきならべ手すりを付、所ゝへ馬よけを付ケ馬鴈ともに渡り申ゐ、大水之節ハ此くさり切レゐて船渡シ留り申ゐて船ハ仙臺石の巻迄も流れ行ゐよし、晝頃盛岡八幡町ゟ着申ゐ（仙臺ゟ金銀札通用にて壹分札貳朱札有之、壹分を一ト切レと申貳朱を商人もふけゐ者も有之そんをいたしゐ者も有之ゐ由、錢ハ仙臺通貨を潰し南部入口より札遣用無之錢も仙臺ノ淺黄錢と申て通用致シにて、馬方なそにちんせん遣シゐても一文〳〵改メ受取一文にても

まざりおりいへハ、半切レト申い、壹分札ハ六百文貳朱札ハ二百文位に御坐い、時〻相場上り下りにて石ノ巻にて新錢に吹出し申い、至てあしき錢にてづくせんよりもあしく不申百文之内に三四文ツヽはいりおりいてもばね出し受取り不申い、途中取替い様申いてこまり申い　御目明高橋和吉殿へ參り和吉殿源助殿差圖にて左官鐵之助殿と申方へ落付キ申い、先年參りい節ハ及川藤藏殿と申仁之方へ參り、其後ハ甚助殿と申人ノ方へ參りい得共兩人共故人に相成ヒ申い、此鐵之助殿と申ハ江戸之者にて三十年以前此國へヒ參養子に相成、今にて子供（マヽ）等出來、殿様之御用相勤眞事家内共よき人に御坐い、又高橋和吉殿と申い、御目明シにい得共珍ら敷人にて書物至て好キにて書林も及ぬ程書物を積置申い、當時ハ源氏物語りをよミおられ申い、おり〳〵講釋をもきかれいよし、哥なそも中〻よくよまれ申い、眞事に目明（シ）ニ似合ぬ人物に御坐い、息子ハ肴町と申所に五間間口にて道具屋を致シヒ居い、尤古しへハ富家の息子にて道樂にて目明シヒ仰付いよし、津子田御潰しに相成い而八幡町へ御免茶屋と申て遊女屋八九軒出來申い、及川殿之跡も今ハ東屋と申遊女屋に相成居申い、藝者見番有之、鐵之助傳十郎松五郎殿なと見番に御坐いて一ト月替りに勤申い由、藝者ハ江戸より參り申い文字八尾（マヽ）申い師匠にて娘ハ哥文字と申い、右之門人にて文字八登、是ハ源助殿と申仁之娘也、文字八滿傳十郎殿の娘文字とわ其外八九人も有之申い、又盲人にて御殿迄上り申い名所都萬蒲都委（采カ）女都なと申ていつれも豐後長唄の藝人にて御坐い、其外御國上るりと申を語りい盲人數多有之い、八幡町に芝居有之申い、芝居座元ハ鎌倉玉左衛門頭取西國傳十郎若太夫龜之丞と申い、黑澤尻佐太郎と申人太夫元にて市川團之助中村次郎三中村粂次郎嵐橘太郎市川門藏なそ參り居申い、坂の上と申所ニ角力御坐い、是ハ鶴ケ峯殿立元にて行司ハ永瀬越後と申いゑほしひたゝれにて行司相勤申い、土俵ハ四角にて御坐い、八幡宮之御宮地内殊之外廣く、八月十五日御祭禮にて矢武佐馬有之、一ノ矢ハ京都迄參り申いと申とに御坐い、四日鐵之助殿隣中村屋と申御免茶屋へ和吉殿與助殿文七殿源助殿松五郎殿ヒ參、是ハ皆水事師と申いて芝居よせ等の世話人ニ御坐い、相談相極メ願主ハ御駒太夫加藤京助殿と申て是ハ神主に御坐い、噺講釋八人藝なとハミな右之願に御坐い、（豐後）上るりふんと新内なとハ鈴江四郎三郎殿と申、是ハ藝者之頭にて右之願に御坐い、八幡町木戸一ツ越へ生姜町神明地内土弓場にて日數十五日之の間興行に相成申い、此土弓場ハ和吉殿弟にてすし小料理致シふだんハ楊弓場にてよせ場に建置申い所に御坐い、古今大入にて晝ハ芝居角力御坐いてよせハ七ツ過よりと申願にい所晝八ツ半頃ゟ見物ヒ參い而七ツ時分にハ前座一ツすミ申い、日の暮方より切り之咄シにかゝり五ツ頃にハはね申い、文字八尾始メとして藝者中ゟ花札有之、役者中ゟも花有之、八幡町若イ衆中より水引、御免茶屋中よりうしろ幕もらひ申い、大入ニ付日延相願い處少〻差合有之日のへ出來不申、乍殘念十五日切に仕舞申い、それより文字八尾殿世話にて日〻御坐舖致、金山御役人宮兩助様加藤新助様其外船越助五郎様と申御仁昔より御ひゐきにて度〻參りいて永〻盛岡に逗留致シ申い、我等江戸にて弟子（に）いたしい虎橋と申者盛岡之者にて妹たつね參り申い、音羽屋吉と申者芝居道具師にて、是ハ江戸者にて音羽屋の内に居りい者にて、雪中に津輕より七時雨を越申いて足のゆひ不殘落チ申いて與助殿に世話ニ相成居申いて日〻咄シに參り申い、五月八日盛岡出立其夕かた沼久内と申所へ參り申い（馬好事岩谷堂邊より病氣にて國元へ歸り度由申い間盛岡より出立ヒ致申い）廣田屋（と）申宿屋へ泊り、岩谷堂清兵衛殿より手紙にて近江屋駒吉殿と申仁等申い處、是ハ古しへ當所ノ富家にていか今ハ隱居致シヒ居申い、誹諧なとヒ致風流なる人に御坐い、〆り役喜兵衛殿と申いて是もしはらく江戸にヒ居い人にて、右之世

鮎臺より南部秋田まで

話にて三晩御座舗いたしそれより十一日一ノ戸と申所へ泊り申ゟ、此邊ハ七町を小道一里と申四十八丁を大道一里又ハ一ト塚ととなへ申ゟて眞事に遠き道に御坐ゟ、十二日福岡と申所より末の松山を越シ申ゟ、古しへ浪の越しと申跡有り、此邊の松不殘三葉にて御坐ゟ、いかさまにも浪のこへし跡と相見へ申ゟ、是ゟ八ノ戸入口觀音林と申所迄片登りにて眞事に難澁之道に御坐ゟ、末のまつ山より觀音林の間に清水一ツ無之、此邊にてわらびの根をほり根花と申者を製し申ゟ

○波こへし昔しに今はひきかへて清水たになき末のまつ山

沼久内より一ノ戸へ參りゟ間ニ小繋と申番所御坐ゟ

十三日八ノ戸へ着致ゟ　松前より竹田甚太郎と申者ノ子分之者參り居ゟ、是ハ去年中房蝶心安くいたしゟ者にて、尤竹田甚太郎殿ト申ハ江戸小細町ノ者にて南子ト申て講釋師御坐ゟ、松前へ參り竹田甚太郎と申芝居角力其外立元致シ申ゟ方へ養子ニ相成居り申ゟ間講談相やめ、當時ハよき男相成りゟ由我等知る人にゟ問尋參り可申存居ゟ處、右之者咄シにハ松前殊之外不景氣にて其上旅人船上り六ツケ敷由申ゟニ付松前行相やめ申ゟ　馬喰町曲師屋林兵衛殿と申仁之方へ盛岡灯燈屋弁吉殿と申仁、是ハ文字八滿之兄にて御坐ゟ、是より手紙にて參り申ゟ、二ばん林兵衛殿方に泊り十五日より荒町〆り役清兵衛殿と申人の方へ引越シ申ゟ、當所願主ハ松太夫と申者に御坐ゟ、是ハ先年江戸麻布十番仲町万屋と申人の方に被居ゟて心安く致シゟ人にて御坐ゟ、林兵衛殿妹聟にて河内與兵衛殿と申仁殊之外世話好キにて坐敷等取持ヒ暮、(呉)其外市兵衛殿西町屋と申富家へ坐舗に參り番頭惣助殿と申心安く相成、是ハ實ハ伯父樣ニてゟよし、鬼柳樣と申御家舗へ參り申ゟ、御家老中之御家内御出被成ゟ由にて、尤小南部樣御隱居樣の時分度ニ御屋舗へ罷出ゟ間御家中にも御存之御方有之申ゟ、八ノ戸殊之外魚類澤山にて目の下一尺位之

仙臺より南部秋田まで

銅百五十〆位にて鯖いわしなとハ一文に十ヲ位にて御坐ゐ、此節日ゝ夕立ふりつゝき申ゐ。與兵衛殿其外市兵衛殿惣助殿同道にて湊と申所へ參り申ゐ。是ハ城下ゟ一里御坐ゐ、遊女屋數多有之大谷屋と申へ參り泊り申ゐ、與兵衛殿妻宅お熊と申者元ハ遊女にてあら熊(と)申あだ名に御坐ゐ、酒をよく呑ミ三味せん小弦なそひき申ゐておもしろき女に御坐ゐ。此所之遊女屋ミな後家にて御家中又ハ町家の富家の世話に相成り居り申ゐ。夫より佐女と申所へ參り申ゐ。是にも遊女屋十二軒有之申ゐ。湊ハいわしあミをひき油にしぼり申ゐ所にて魚油御役所有之申ゐ、此所ハ藝者と申ハ無之、遊女ミな〳〵三味せんをひき申ゐ、かまとかへしと申唄をうたひ申ゐ、道中ふしのたぐひにて少し違ひ申ゐ、さわきの中へ琴をいれ申ゐ、海邊所ゝを見物いたし申ゐ、眞事風景よろしき所に御坐ゐ、林兵衛殿松太夫殿與兵衛殿其外十五人にて石手洗と(申)所村之川原へかじか(カ)おしに參り名主方にて大さわきいたし、與兵衛殿妻あら熊其外遊女壹兩人參り夜明シ樂しミ申ゐ。其歸りに又ゝ湊へ參り佐女へ參りゐて、川口屋と申へ參り會と申方へ泊り申ゐ、此邊ハ東廻り船にて度ゝ江戸へ參り申ゐ間、たはこ茶なと江戸より持參り、我等か弟子都ゝ一坊扇歌か作りたるどゝいつとつちりとんなとの本有之、盛岡よりもかへつて江戸近く御坐ゐ

○臺所唐人までもうかれなんわかひのもとのかまとかへしに

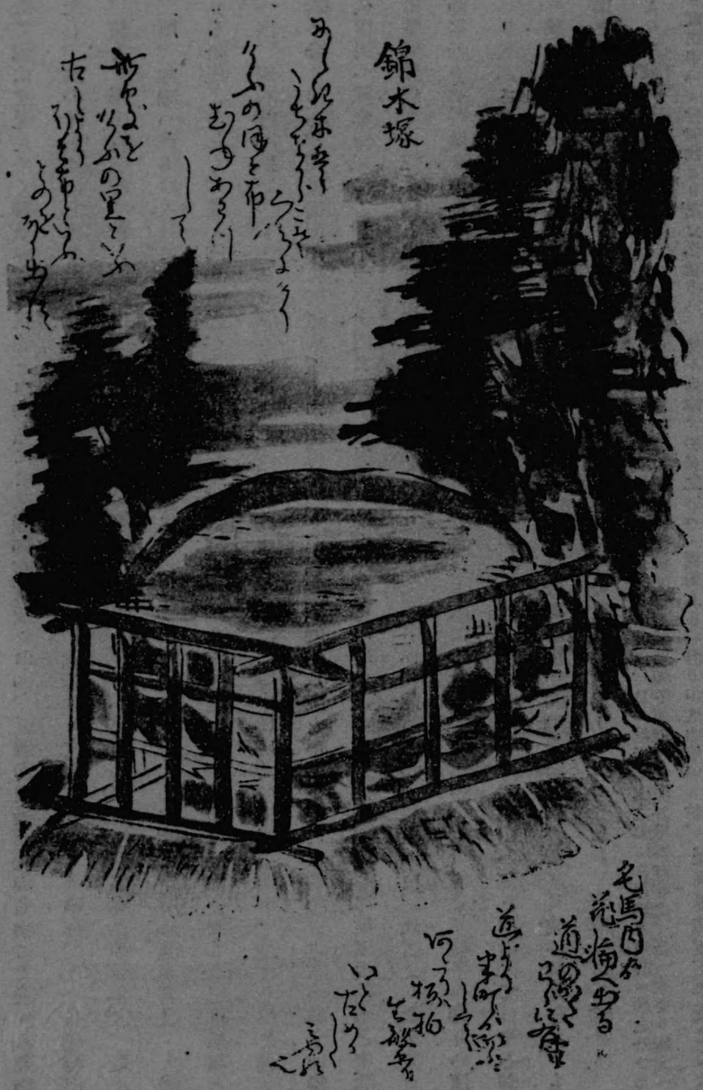
○とり組てさておもしろし金時も酒の相手にまけぬあら熊

廿七日八ノ戸出立、梯引村ゟ苫森村劍吉村より三ノ戸へ出申ゐ、瀏東屋利八殿と申宿屋へ泊り申ゐ、是ハ近江の者にて當所へ參り酒造をいたし今にてハ宿屋を致シ居申ゐ、御代官役人にて佐藤佐仲殿と申御方、是ハ盛岡船越

鵜臺より南部秋田まて

助五郎様縁家にて我等事を知り被申ゝ間、二三日留られ三晩御さしきいたし、大雨ニて出立成兼六月朔日三ノ戸出立いたし、田子と申村ゟ關と申村へ泊り、二日夏坂と申所御番所有之、是より雷峠と申へかゝり申ゝ、此峠極難所にて六里の峠登り三里山中と申所に一軒家有之、是より半道程登り坂にて是より下り坂に相成申ゝ、山中虻多く夏ハ尤中ハ往來留り申ゝ由、我等通行之節ハ雨天にて虻もすくなく乍去難澁之峠に御坐ゝ、峠ゟ鹿角毛馬内と申所を一ト目に見おろし申ゝ、此邊至而陽氣寒く六月わた入レを着し居申ゝ、田なそも此節一番艸をとり申ゝ、八ノ戸より此邊軒下廣く壹間余も有之申ゝ、是ハ雪中之節往來出來不申ミな〳〵軒下斗を歩行申ゝ、雨ふりにも傘ハ入り不申傘の有ル家ハまれにて御坐ゝ

此邊うるいと申物をつけ物にいたし申ゝ、又ミつと申物、是ハ蛇艸と申ゝて清キ澤に有之ゝ由、是もつけ物にいたし、又ミつとゝろと申て是をたゝきとゝろにいたしくわせ申ゝ、いちご澤山にてうりあるき申ゝ、是より大湯と申所へ出申ゝ、此所に一宿いたし申ゝ、溫泉場にて上ノ湯下の湯川原ノ湯と申て三ケ所有之湯宿も殊之外あれはて申ゝ、三日鹿角毛馬内山本九市郎縁と申御方劍術之師匠にて二百石取り之御侍御坐ゝ、鐵之助方ゟ手紙にて參り申ゝ、曇屋新之亟殿と申仁之世話にて木村屋喜兵衛殿と申宿屋へ落チ付申ゝ、御坐舗等致シ七日花輪と申所へ參り申ゝ、毛馬内より一里余根勢大明神之御宮有之、此所けふの里と申所のよし十ふのすがこもほそ布之名物也、是より半道余參り錦木塚有之　錦木塚ノ由來は末にくわしく書出し申ゝ是ハ只通行の道筋故書しるし置申ゝ　往來のかたわらにて樹木生茂りたる中に大サ二タかゝへ程有之生石にて駒よせ有之、是より花輪東屋新助殿と申仁之方へ參り申ゝ、是ハ盛岡宮雨助様御手



紙にて銅山支配人にて御坐ゐ、専正寺と申御寺にて三晩御座敷致シ申ゐ、此所赤根染紫根染名物にて家〻に染物いたし、鹿の子らせんしほり其外無地色〻眞事に見事にて御坐ゐ、此節日〻夕立ふりつゝき申ゐ、十一日花輪出立、是より銅山越へと申致シ、銅山家數七八十軒も可有之、神田と申村へ出申ゐ、此所南部境之番所有之、是〻十二所、此處ハ秋田の入口にて御番所有之、旅人改所にて切ツ手出し申ゐ、それ〻大瀧と申所に溫泉有之、大湯よりも余程よろしく、銘〻内湯有之、表ハ川にて川端に溫泉之瀧九本有之申ゐ、此所に湯治いたし十三日扇田と申へ出、松右衛門殿と申て上るり語りにゐよし、毛馬内より手紙にて尋申ゐ處留守にて逢不申、是より川を越シ大館へ參り申ゐ、問屋場向ふにて越前屋ト申宿屋へ泊り申ゐ、須藤半八殿と申御足輕にて目明シ之方へ尋申ゐ得共久保田へ被參留守にて逢不申、十四日綴子と申所〻坊澤小磐と申所へ出申ゐ、此所問屋場に秋田湊船木と申問屋に番頭致居りゐ佐兵衛と申者帳付ケ致シ居り久しふりにて逢ひ申ゐ、此所へ參り居申ゐ由、此宿より壹里渡シ荷揚場と申所へ參り申ゐ所雨ふり出し此所に泊り申ゐ、其夜大雨にて此近邊水出申ゐ、大館より綴子へ參りゐ道にしりもふさんと申山有り、これは江戸より御巡見樣御下りの砌、所之案内者に向ふ山ハ何と申山にてゐやと御尋ヒ成ゐ所、案内者われハしりもふさんと申上ゐ故、御巡見樣御手帳へ四里毛山と御書留メヒ成ゐ故是をしりもふ山と申ゐよし、それより切石の渡シと申へ參りゐ所昨夜の大雨にて川留りゐ由、やふ〳〵小船を頼ミ越申ゐ、是より飛根(富)村鶴形村それより能代ゟ出申ゐ

扇蝶事兼而國元へ歸り申度由、且ハ越後新潟之脇にて和納と申所ニ殊之外ひゐきに相成申ゐ御割元伊藤新助樣中原俊次郎樣と申御方有之、是へ立寄り國元へ歸り度由申ゐニ付能代より出立爲致申ゐ、然ル處湊ゟ船有之ゐハヽ便船もらい參り申度由申ゐニ付、湊久四郎殿安五郎殿圖次殿へ手紙爲持遣シ申ゐ所、我等參りゐ迄ト引留られ久四郎殿方におり申ゐ

盛岡源助殿〻手紙にて大

鉤臺より南部秋田まで

和屋仕平殿と申〳〵り役之者方へ落チ付キ申ゟ、此所に柳町と申而遊女屋八軒程有之丸万八郎兵衛殿と申て三階作り之遊女屋有之、是ハ久保田御城下にて丸万庄兵衛殿と申仁之弟にて、我等先年参りゟ節江戸堺町へ被参料理積古致被参ゟ而、未タ國へ歸りかけにて兄弟之様に致シゟ者に御坐ゟ。其外羽右衛門清右衛門八郎兵衛殿なそ重頭差引役と申而江戸にてハ御加役之與力同前にて、此役方之御手先キにてミな〳〵目明シにて遊女屋に御坐ゟ。料理屋小林嘉兵衛殿と申て是ハ料理斗ヒ致申ゟ、十五日ハ御祭禮にておとり家體なそ出申ゟて近郷在方より見物多く参り賑わしく、夜一夜家體を引歩行キ寐つかれぬ程之さわき二御坐ゟ、玉屋柳勢の弟子にて玉屋いろはと申参り居り、是ハ三味せんをひき申ゟ故右おとりの家體へ頼まれゟよし、十六日に見舞ニ参り申ゟ、秋田正金錢不通用にて錢札百貫文より貳拾五文迄御坐ゟ、百貫と申ハ八拾貫文にて十〆八百〆壹〆八拾文にて二十五文ハ二文位之通用に御坐ゟ。家形様御膳手持にて久ミ知屋と申方〻出し申ゟ、錢札ハ御町所并に町家之富家より出し申ゟ、是をへらと申ゟ、正金銀通用ハ兩に九貫二百文位之相場に御坐ゟ、春慶塗り物名物にて膳椀硯ふた盃盃其外印籠櫛笄なと有之、山打三九郎と申一軒にて外に似せ多く有之ゟ得共早く色さめ申ゟ、お竹と申藝者有之、大淵彦兵衛殿と申仁之世話ニ相成居申ゟ、彦兵衛殿至而せ話好キにて木山方御役人其外町役人衆なと坐舗を取被持申ゟ。仕平殿せ話にて柳町善助殿と申宅にて寄與行いたし申ゟ。此近邊山瀬と申鳳吹き申ゟ、江戸にてハ東風にて御坐ゟ、此邊にてハ是をきらい申ゟ、船ハ元より作物にも當り申ゟ由、七日ツ、吹き申ゟと申とに御坐ゟ、眞事に寒き風にて人の身にも當り申ゟと申とに御坐ゟ。此節大風日ミふき申ゟゆへ

○作物にあたる山瀬ハ大江戸の東風（こち）の身に迄しミ渡る也

七月朔日より七夕祭りと申て大獵方作と名附〻、燈籠をこしらへ五日までは町ミを子供持歩行、六日之夜毎年年番町有之、五ツつゝ高サ五丈八尺位有之、大サ三間四方、神功皇后三韓退治加藤清正朝鮮征伐其外さま〴〵の形をこしらへろうそく一トばんに五六百丁も入り申ゟ由、かね太鼓螺の貝なそ吹キ立、太鼓の大サ丸サ五六尺曲り長サ六七尺の大たいこをたゝき立テ町ミを曳歩行夜明ケ迄おとりさわき申ゟ、眞事めつらしき事に御坐ゟて津輕弘前黒石〻寄盛邊にも有之よしに御坐ゟ、年番に無之町内よりも加勢と申燈籠をこしらへ右之燈籠を送り申ゟ、十五六日以前より若イ衆寄り合右之燈籠細工いたし、是を下より段ミ組ミ上ケ地車にのせて曳出し申ゟ、是をねむたなかしと申ゟ

○ミな人のねむたなかしと申セとも初て見てハ目かさむるなり

七月八日湊より久四郎殿と申〻り役、是も差引役の目明シにて先年我等湊下酒田町と申所にしばらく住居シ居り申ゟ節兄弟同前に致シ申ゟ者にて、少ゝ用事有之且ハ我等向ひかてら参り申ゟに付、十日能代出立いたし豊岡と申所〻鹿渡と申所へ出一ト市ト申所へ泊り申ゟ、此近邊八郎か潟と申て竪七里横八里の潟にて（ママ）山を見渡シ眞事絶景なる所にて、此潟より壹尺二三寸鮒（の）とれ申ゟ、ごりと申魚有之、是を八里の潟にごりの魚とうたひ申ゟ、それより湊へ参り申ゟ、新柳町と申所町方目明圓次と申人の息子にて富次郎殿と申方へ落付キ申ゟ、此圓次殿と申ハ市川圓次と申役者にて妹ハ小佐川常世の女房に相成津輕に居申ゟ、大内屋圓次と申而遊女（屋）にて〻り役に御坐ゟ。

此柳町ハ先年當所に居ゐ節ハ遊女屋上酒田町下酒田神(マヽ)の表町と申所にてミな〳〵地借りにて有之ゐ間、万屋周助殿我等と相談いたし御上へ願濱手へ替地を願ひ出し申ゐ、然ル所濱手にハ稲荷町と申て船手之者遊ひ女有之ゐに付右之所へ替地被仰付ゐ、其節我等江戸表母之病氣申參りゐに付急に江戸へ歸り申ゐて、此新地へ弟子梅橋と申者を殘し置藝者見番を致ゐ樣に周助殿賴置ゐ所無程梅橋も江戸へ歸り申ゐ、當時ハ殊之外繁昌にて丸喜安五郎幾都と申盲人大玉小羽辰亭萬屋上ノ筆屋下ノ筆屋瀬衣久四郎大内屋雷助なと遊女屋にて、其外料理屋安田揚屋ハ梅子と申女役者千右衛門なと申て數多有之申ゐ、染吉と申女藝者伊達より參りゐ源藏と申我等弟分の女房にて、源藏十七ケ年以前病死いたし後家にて揚屋致シ居ゐ所、當年源藏之十七年忌に相成法事致シ申ゐ所無程染吉も相果テ申ゐ、御町方と差引役之御手先にて目明シ澤山にて久四郎安五郎山嘉梁川屋なとハ差引役之目明シにて、御町方ハ團次大坂辰菓子安なと申者目明シに御坐ゐ、古しへの表町にも後家と申てかくし者澤山有之ゐ得共當時ハ殊之外嚴しく一向相成不申ゐ由今にてハ表町に料半と申斗殘り居申ゐ、船問屋ハ舛木船木川口なと頭にて其外附ケ船小宿と申て澤山に御坐ゐ、上ノ筆屋と申遊女屋の息子嘉吉ト申者先年足袋もゝ引仕立稽古いたし度よしにて我等方へたつね參り芝田町玉屋と申足袋屋へ賴置申ゐ所只今ハ歸國いたし罷在ゐ、早速見舞に參り申ゐ、筆屋且那ハ後藤彦市殿と申て大番組の隱居にて殊之外しんせつにセ話いたし被呉申ゐ、昔より名染之所にゐ間日〻坐舖出來いたし八月頃迄遊ひ居り申ゐ、其外問屋船木舛木根布屋なそへ坐舖に參り申ゐ、酒田町表町の角にて見性寺(と)申御寺、我等母に致シ申ゐ近藤源八と申者之妹にておミんと申者之菩提町(寺)にて、盆に寺參り致シ法事相勤メ申ゐ、山屋舖と申所に石佛之祖師有之、古しへハ御堂も何も無之原中にたゝせられゐ所近來一眼申(と)同心者是を取り立テ御堂を建立いたし、此節釣鐘なとをふき申ゐ、殊之外利生有之ゐと申とにて病人なそ此御堂一七日又ハ二七日こもりに參り申ゐ、山屋舖と申所ハ問屋衆又ハ商人富家之別莊有之ゐ所にて遊山場所にゐ間猶〻繁昌いたし申ゐ、眞事ニ難有祖師に御坐ゐ 扇蝶事いよ〳〵國元へ參り度由申ゐに付、七月廿日本庄と申迄便船有之、喜安五郎殿番頭半次殿より庄内酒田へ手紙を貰ひ出立爲致申ゐ、然ル處酒田より手紙遣シ申ゐ馬生門人にて馬久二と申者參り居ゐ由、是ハ酒田今町龜屋四郎右衛門ト申者之娘を女房にいたし江戸迄連參り申此度女之國元え歸り居ゐ由、庄内御國替之さわきより殊之外六ツケ敷相成、公儀御役人入込居申ゐてそれゆへ旅人ハ一夜泊りより相成不申、扇蝶義ハゆふう〳〵と二三日逗留いたし越後出立致シ申ゐ由 手紙にて申參り申ゐ

○尊とさよ石よりおもき大願をきかせ玉わる祖師の御姿

八月五日久保田御城下へ參り申ゐ、寺内と申所古四王大明神と申御社有之、此御宮に馬の額有之、此馬古しへ毎夜ぬけ出て遊ひゐよし御社之ゑんのいたに蹄の跡有之申ゐ、此所八ツ目うなき名物也、それより五百らかんの御寺有り、地内廣く殿樣御出之座舖有之春秋ミなとより遊山場所にて風景よろしく、それより橋を渡り矢はせと申所有之、是ハ久保田よりの遊山場所にて料理屋かし坐舖數多有之ゐ得共今ハ相成不申ゐ由、櫻藤なと有之申ゐ、山王の宮有之 東照大權現之御宮有之、是より田甫三町斗越シゐ得は下モ町にて、此所芝居定舞臺有之、芝居ハ穢多願にてゐ間役者ハ下モ丁に泊りゐ分にて矢はせに居り申ゐ、雪駄大鼓三味せんはりかへ等なと致シ申ゐ、是ゟ鐵砲町と申て御足輕町にて城下入口に御坐ゐ、是より南ハ米町寺町東ハ通り町大町三丁目伊勢屋九郎衛門殿と申ゐ古手屋、是ハ昔より名染にて江戸表へも度〻買出しに登られゐ節たつね參られ申ゐ仁にて、右之方へ落付キ

申ゆ、是より日ゝ御坐舗いたし居申ゆ、蛇野と申所に若木惣藏殿と申仁有之、是ハ御足輕小頭にて是も度ゝ江戸登りの節被參ゆ人にて是へもたつね參り申ゆ、仲吉ト申女藝者元ハおどり子にて今ハ藝者をやめゆて息子商人ニなり居申ゆ、米町と申所に淺井新吾と申かるわさ師、悴ハ妻五郎と申て我等弟分に御坐ゆ、新吾ハ金毘羅へ參りゆとて我等方へ參り病死いたし申ゆ、妻五郎も病死いたし弟の小三と申もなくなり申ゆよし、母と娘壹人おとめと申ゆ、是ハ先年湊に住居致居ゆ節わらの上よりもらひゆて娘にいたしゆ、江戸表よりも度ゝ便り致シ申ゆ、今ハ藝者に相成居申ゆ、法花寺と申御寺御上人、是も昔より知る人にて右お寺の御題目講世話人藤井大助殿申仁心(と)安く相成申ゆ、龜ノ町丸万庄兵衛殿同町高橋清吉殿と申仁、是ハ昔ハ寄場世話人ニ有之ゆ得共今ハ町方役人に相成居申ゆ、段ゝ寄セ欠合致シ申ゆ、尤寄之儀ハ雪中坐頭御すくひ(の)爲四分六の寄御免にて坐頭之願に御坐ゆ、學都と申座頭座元にて配當屋ト申て寄セ場有之申ゆ、古しへハ十月朔日より被仰付ゆ、近來ハ九月ゟ出來申ゆと申とにてゆ、當時ハ世話人皆かわり丸万庄兵衛殿田中勇助殿二人ハ昔より名染にてゆゆへ九月よりの欠合をいたし申ゆ、是より大町貳丁目三丁目若イ衆九郎右衛門殿息子ハ義助と申てよき若イ者ニ御坐ゆ、いセや隣家仲長いセやの別家にて三丁目いセや十右衛門殿貳丁目山崎屋万藏殿と申仁噺シ好にて殊之外ひゐきに相成申ゆ、いセ幸と申ゆて貳丁目に古手や致被居ゆ、今にてハ田中と申所へ參り酒造致いセ屋(岩間)文六殿と申仁、是も名染にて度ゝよばれ參り申ゆ、片岡慶助樣と申御方銅山御役人能代方吟味役にて、是も昔之御名染にて若旦那ハ郡藏樣と申て大小性(マヽ)にて御ひゐき相成度ゝ御出會申上ゆ、鈴木仁兵衛樣申御方是ハ大番組にて、是にも度ゝ御出合ゆ、それより一先湊へ歸り申ゆ而九月迄宿之富次郎筆屋嘉七其外仙臺より參り居ゆ勘右衛門と申道樂者日ゝ船をかり弁當なといたし、江戸にてハはセと申魚當所にてもぐつと申ゆミこいふぐなと釣りに參り樂しミ居り申ゆ、無程九月に相成申ゆに付久保田へ參り、龜ノ町大工喜兵衛と申者之坐舗ヲかり引越申ゆ、下龜ノ町配當屋場所ハ古しへ此所に正法院ト申山伏有之、至て心立惡敷者にて人ににくまれゆ所、或時町内と出入り致シゆてまけに相成此所を追立られゆ、是を殘念に思ひ手前之屋舗の井戸へ身をなけ相果申ゆ、其井戸を埋て其上へ家を建ゆ所此家に住居ゆ者壹ト月と居不申、かの山伏のこんぱく出ゆてそれゆへ住居なり不申、此事を御上へ申上處座頭ハ目の見へぬ者故いかなるもの出申ゆても見へ不申、是ハ座頭へ遣スへしとて座頭へ下し置れゆ故此所へ配當屋を建寄場にいたし、初メの程ハ四ツ過迄寄興行いたし四ツ過に相成ゆ得は〳〵切ゆて住居いたし不申ゆ、後ゝにハなんのたゝりも無之故今にてハ座頭住居致シ居申ゆと申と也、依之怪談噺又ハ化物噺シと申と相成不申、只昔し噺シうきよ噺なそと唱へ申ゆ、先年頼燒之節世話人少しもかまい不申道具敷物迄座頭となれハ出しゆ事相成不申燒申ゆニ付座頭立腹いたし、外町へ引越可申と申ゆて願ひゆ得共右之譯から被仰ゆて外へ越ゆ事ハ相成不申ゆ由被仰付ゆと申とにて御坐ゆ　世話人田中勇助丸万庄兵衛大工長四郎桶屋利八右世話にて九月二日より寄興行、同町目明シ栗田屋嘉兵衛、是ハ江戸表にて親父ハ野澤富八と申上るりの三味セん引にて、當所へ參り遊女屋いたし居り申ゆ、其外四十軒堀龜吉米町惣太殿なと申目明シへ見舞いたし申ゆ、同町永榮と申者、是ハ田中玄仙老と申醫者の跡(本庄屋敷)にて仙臺迄噺家にて歩行ゆよし、右玄仙と申仁ハ茅の屋の雁根と申而狂哥師にて茶番狂言なと致シおもしろき人に御坐ゆ、是も我等兄弟同前にいたし申ゆ、今ハ故人に相成申ゆて右永榮を道具なと手傳セ申ゆ、米町に唐吉と申者有之、是も古しへハかるわさ手妻なそいたし太鼓笛なと致シ申ゆて、上野と申所ニ居りゆて上野慶四郎樣と申富家の世話に相成申ゆ、是も昔しより名染にゆ間鳴物等手傳わせ申ゆ、寄大入にて卅五日興行仕それより又ゝ湊へ寄相談いたし番頭半次殿と申宅へ參り申ゆ、是ハ最上山形之弁慶殿と申道樂者之番頭致シ歩行ゆ間番頭半次殿と申ゆ、團次殿大坂辰殿菓子安五郎殿富次郎世話人にて廿日之間寄興行致申ゆ、尤我等寄相談相極

申ゐ所十月三日に出火御座ゐて柳町木戸迄焼ケ申ゐて町數三町斗家數三百軒程焼ケ申ゐ、興行も延引可致所御上より御免許相濟居ゐ間押而興行致ゐ、然ル所へ五業之弟子にて鵜業蔵錄門人にて英蝶と申者たつね參り、是ハ一夜留メゐて久保田へ遣シ申ゐ、久保田にて祭文興行致シ居ゐ得共一向入り無之、早速興行に相成申ゐ、又ゝ五業夫婦南部(雀或ハ鵜カ)ゟ我等跡を追ッ欠ケたつね參り申ゐ、依之二三日助させ申ゐ而、右五業妻ハ富本山雀と申て豊後語りにゐ間皆ゝ相頼坐舗致させ筆屋藝者おとミおりわ久四郎殿藝者おさくなと精古いたし度申ゐ間、其外四五人門人出來ゐ而精古相始メ申ゐ、我等ハ寄セ相仕舞十一月十日に久保田いセ屋へ參り申ゐ、五業夫婦ハ湊久四郎殿方へ頼置申ゐ、是より久保田にて御町奉行加藤五左衛門樣始メ御内町へ所ゝ年わすれ御坐舗に參り申ゐ、いセや悴義助江戸へ買出しに登り申ゐニ付、留守中九郎右衛門殿と酒呑樂しミ目出度越年致シ申ゐ、法花寺へも九郎右衛門殿同道にて度ゝ參り申ゐ正月二日九郎右衛門殿方にて噺始メいたし、それより日ゝ坐舗いたし居申ゐ、義助殿ゟ江戸表堺町成田屋市右衛門方并門人都ゝ一坊扇歌入船扇蔵方へ手紙頼ミ遣シ申ゐて二月歸國之節返事參り江戸の便り承り安心致シ申ゐ、着町料理屋お屋部(カ)豊嶋町竹半なと申方へ度ゝ坐舗に參り申ゐ、茶町扇ノ町と申所に利助と申ゐ者、是ハ先年我等弟子に致シゐ者にて度ゝ酒着なと送り申ゐ、おとめ仲吉殿なとよりも着度ゝもらひ申ゐ、九郎右衛門殿も冥葉の義丸と申て狂哥師ゆへ日ゝ狂哥なといたし遊ひ居申ゐ、二月朔日にて男子生れゐへハ十五才迄鎌倉祭り被致、雪にて門前へ城をこしらへこれへ家ゝの紋付たるのぼりを立テ、わらをたはね是へ火をつけ兩方よりふり合章のまねをいたし申ゐ、是ハ鎌倉の權五郎を祭りゐと申とに御坐ゐ、十六日壹夜久保田の藝者坐頭まて二三軒ツゝ頼まれ申ゐ、我等も吉田藤五郎樣梅津樣其外二三軒頼まれ申ゐ、五業も湊よりよひよせ二三軒遣シ申ゐ、中山政吉樣と申御方御物頭にて是も昔し御名染にて度ゝ參り申ゐ、二月朔日より又ゝ配當屋にて五業をいれ申ゐて興行相始メ又ゝ二十五日之間興行致シ申ゐ、それより又ゝ能代八郎兵衛方(マヽ)ゟ寄欠合參り申ゐ間久保田出立いたし湊より五十ノ目(五城目)と申所へ參り申ゐ、是ハ六丁目川端松五郎殿と申仁五十ノ目の者にて、何卒五十目へ同道致度よし被申ゐニ付、右松五郎殿五業夫婦同道にて五十目(一ト市)ゟ半道程脇にて御坐ゐ、松五郎殿兄かじや喜兵衛殿と申方へ參り右宅にて五日興行いたし、それより能代丸万八郎兵衛殿方へ參り仕平殿其外目明シ衆ゟ話にて柳町善助殿宅にて又ゝ十五日之間寄興行いたし申ゐ、當所に去暮より芝居とやいたしおり申ゐ、だんぼう宗五郎ト申ゟ話人にて、役者ハ中村舎柳市川白十郎女方小佐川美よし中村駒次郎其外二十人斗おり申ゐ、津輕より坂東福介と申役者、是ハ上方ちんこ役者にて越後より松前へ渡りゐて津輕より參り申ゐ、然ル所免許ハ相濟ゐ得共旅役者相成不申ゐ而地芝居ならてハ出來不申ゐ由久保田御役人ゟ申參り申ゐと申とにて大さわきニ御坐ゐ、いかゝ相成候や、我等ハ寄仕舞ゐ處病氣にて永ゝ八郎兵衛殿ゟ話ニ相成、五業夫婦ハ湊へ三わく千万に御坐ゐ、實事ニ氣之毒なるとにて役者ハ元より所之者も去年より三月迄ゟ話いたし置とゆへめいゐ而大淵彦兵衛樣方へ津輕片谷と申方之番頭三國屋錄吉殿と申月廿日に爲立遣シ申ゐてやふ〳〵全快致シゐ間、兼而人被參近付キに相成坐舗なそいたし、津輕へ參りゐ樣に被申ゐ間、四月六日能代出立いたし同所加護山より大舘へ參り申ゐ、大館ハ佐竹大炊之助樣と申上、御高ハ九千八百八十三石一万三千石之格式也、御廻り座と申而小助

申也、是より渡シ一ツ越シ扇田、それより壹里半十二所、是ハ南部秋田境の御番所にて茂木筑後様と申て五千石にて御太夫之御家也、大舘御目明須藤半八殿同役原田三四郎殿尋可申存ゐ得共津輕を急ゐ故尋不申、井江戸兩國操人形山本浪次と申者酒田與平次殿世話にて松前へ參り當春渡海致シ半八殿三四郎殿世話ニ相成居りゐ由、右浪次と申者男熊と申て至而心安く久しふりにて逢申度存ゐ得共、先ハ津輕歸りに逢可申與存今度ハいつれへも尋不申、大町越前屋吉郎右衛門方に一宿いたし津輕へ參り申ゐ

十月の末つかた鰤（はた）〳〵と申魚とれ申ゐ、是ハ佐竹樣に附キ申ゐ魚と申ことにて佐竹樣水戸にてとれ申ゐよし、今にても水戸にてまれに一二ひきとれ申ゐとも有之なり、湊男鹿能代にてとれ申ゐ也、津輕にても少ゝとれ申ゐよし、此魚とれ申ゐ節ハはた〳〵雷と申ゐてかミなりいたし申ゐ、沖の方にて雷なりゐ得は是におそれてきしへより申ゐ、男鹿邊にて多くとれゐへとも淺の水戸口にてとれゐをそうかんいたし申ゐ、形はケ樣成さまにて鱗なし、ひか〳〵と光りて見事なる魚也、大キなるハ六七寸も有之、多くハ五六寸也、頭ハいさゝかなるけんあり、家形樣御在國の砌ハ後ロの方向キ、また江戸に御出之節ハ前の方へ向キ申ゐ、（初はた〳〵と申て初て參りしを賞美致シ申ゐ）十月廿日、我等着町と申所の洗湯へはいり居りゐ所、初はた〳〵か參り申ゐて大さわぎゆへはだかのまゝにて欠ケ出しゐ所、一ひき預（攫カ）りにて八百文錢にて六十四文と申と也、七百文に直を付ケやふ〳〵七百五十〆にて十ひき買ゐてもち歸りゐ所、じきに又ミ跡より參りゐて五百文に相成申ゐ、七ツ頃にハ三百文に相成幕方にハ百〆に相成申ゐ、とれ盛りゐ得は着町いつれの間屋にても表へ山の樣につミおき申ゐ、眞事ニおひたゝしきとに御坐ゐ也、味ひ至て美にして風味かろき魚也、しかしなからひへの魚にして多くたべゐへハたんおこり申ゐ、おすにハ白子めすにハぶり子と申てかつの子の少し大つふなるぬら〳〵と申子あり、是を賞美いたしゐ得共しら子の方味ひよろし、湯あけと申てよくゆでゐて尾をちぎりかしらをとらへはしにて身をはさミ骨をぬきゐへは中の骨ぬけ申ゐ也、ひれを取りゐ得ハ外に小骨一ツもなし是に大根おろし醬油をかけ、又ハ魚てんしら燒にいたしたへ申ゐ、中ゝ少シくらひ喰ツてはいられ不申、好キなる者五六十ツ、喰イ申ゐ、我等さへ十五六廿位ハ喰われ申ゐ、又うしほにて吸物にいたし、酒の肴にいたすなり

○首とつていさ高名を先陣よ初はた〳〵の聲の下タより

○川柳ひへるはづ名も魚へんに神無月

此魚をすし（鮓カ）糖鹽なそにつけてたくわひ置キ正月より三四月の頃までたべ申ゐ、此ふり子をぬきたるを四角にのへおしきふり子と名附ケ、又玉にいたしじゆつのとくにわらにてつなき玉ぶり子と申てほしおき、暮より正月なますの中又ハすのもの其外貝燒にいたしたへ申ゐ、ほり〳〵いたしよき風味なれとも齒かよわくてハ喰へ不申ゐ、

仙臺より南部秋田まて

白魚殊之外澤山にゐ得共至てこまかく、江戸のしらす干の類にて大きくなりゐて壹寸くらひも可有之哉、親わんに一ツばい預り貳百メくらひ也、安き時ハ百メくらゐに相成申ゐ、又春先しろ魚と申者とれ申ゐ、是ハ形目高のときものにて、いろハねつミ色にてとふふなとへ入レ煎ゐへハ眞白に相成申ゐ、是をしろ魚と申ゐ、鯛ひらめあま鯛かれいそいあいなめ肴ハ澤山にて海潟にてとれ申ゐ間肴ハ安く御坐ゐ、あなご、是ハ江戸のあなごと違ひぬら〳〵いたし、かわをむき不申ゐへは喰へ不申ゐ、海どせうと申物にて御座ゐよし、ハツ目澤山にて秋より冬春ともにとれ申ゐ、うなぎハ仙臺又ハ南部より參りゐ間至て高直に御坐ゐ、貝類少くあわひしゝミはまくりなそ御坐ゐ得とも、あわひハちいさく蛤ハ貝あつく味ひなし、鳥ハ澤山にて鴈鴨白鳥雉子山鳥等有之、鵜を賞美いたし申ゐ、五丁ノ目より先大舘扇田十二所邊ひないとりとて名物也、身やわらかく油澤山に風味よろしく、春夏秋冬ともにせうかんいたし申ゐ、こんふ澤山有之、平らこぶのりこぶしらかこぶいろ〳〵有之、料理の出しにかつほふしよりこぶを多く遣ひ申ゐ、猪鹿ハ少く猪ハ少しも無之、鹿ハ男鹿山にてとれゐ得共御上ゟ仰付られ壹ケ年に何疋と申とにて其上ハとられ不申ゐ、湊口にてはセ多くとれ申ゐ、是をぐづと申ゐ、澤山に取れ申ゐ、いかも澤山に御坐ゐ、まいかにてハ無之するめいかにて、身うすく味ひよろし、たこハ水たこにて是ハ大キなるハ四五尺も有之ゐ、かれい色ミ名有之申ゐ、あさばたかの羽、口ぼそまかれいさま〳〵有之申ゐ、せくろと申魚澤山有之ゐ、骨多くてよろしからす

雪中往來馬駕とも立チ不申、雪車と申物有之氷の上を引歩行申ゐ、人をのせゐを箱雪車と名附ケ荷を積ゐを荷雪

車と申ハ、雪多くふりハ節ハ一丈くらいもつもり申ハ、又家根へ雪つもりて內の戸障子唐紙明ケたてかたく相成申ハゆへ是をおろし申ハゆへ、家の間表へたまりハて家よりも高くなりハ、往來ハふりかたまりかゝミのやふにひか〳〵と光り其上を雪車を引歩行ハ間すへりて少しもあるき不申、所の者ハ是を下駄にてすへりながら歩行ハ得共旅人ハ中〻歩行かれ不申、下駄又ハひきすりの下へ釘をうちすへらぬやふにいたしはき申ハ、雪ぐつと申てわらにてこしらへ申ハ物有之ハ、正月御內町の大身方御登城之節も馬駕ハ出來不申ハ故、箱雪車をりつばにこしらへ木綿のより綱を附ケ、雪おゝひにハ上へゆたんを家根に致シ、是を六尺にひかせ登城被致申ハ、又道中ハ大雪の節ハ道ふかうつミて往還知れ不申ハ故、道ふミと申者を頼ミ是をふミわけさせ申ハ、此道ふミハ往來になれたる者にて鐮（かんしゃ）と申物をはき、かいしきと申物をもち雪をかきわけふミならし道しるへいたす也、鋤雪車鐮　是ハ字引にもなき字也、此國に斗通用致し候文字と相見へ申ハ　此鐮に色〻有之申ハ、わらにてたわらのとくにいたし中へ鼻緒（緒）附ケはき申ハ、是ハ雪のふかき中をはくなり、又ほそき竹を輪にして中へ板をゆひ附ケはき申ハ、是も右同樣也、又かねにてこしらへ三本つめをこしらへはきハ、是ハ氷の上をすへらぬやふにはき申ハ也、わらくづ（ママ）つまかけすへてわらにてこしらへ申ハ、是をかけハ得はひへ不申ハ、南部盛岡八幡町に居り申ハ晉羽屋吉と申芝居道具師、雪中を此つまがけをはかづに七時（晝）と申所を通り、雪中に津輕より盛岡參りハ（〻）とて足のゆひ不殘しもけおちハてゆび一本も無之いたし申ハ、道中にて六ふきにあひハても雪合羽に屠花ぼうしと云ウ物をかふり、がまはゞきにわらくつをはきにきり飯に梅干と唐からしを持參いたし、雪の中にうつまり（ママ）おりハてもからたをうごかせすにしつといたし居りハ得は死ぬ氣遣イ無之、雪の上よりけむりあがりハ間雪ほりと申者是を見附ケてほり出し、つれ行てわらびにてそろ〳〵あたゝめハ得はもとのとくに相成ハと申と也、道のしれぬ所をうるたへまわるゆへに（ママ）谷へ落チ水へはまり命をうしのふ也、又春先キなでと申て峯より雪のくづれ落るにうたれ命をうしのふ者有之よし、おそろしきと也、

我等十二月湊へ參り申ハとて寺內の下り坂をそりにて下るとて

○白氷をふんでかちとる下り坂雪の車のいともあやうし（ママ）

湊より能代へ出ハ間に八郎ケ潟と申有之竪七里横八里之潟にて向ふに男鹿山を見渡し眞事によきけしき也、男鹿ハ村數も澤山有之、田地も多く有之廣き場所にてハよし、鳥廻りを致シ候得はよき景色之所有之よしにハ得共次手あしく我等參り不申ハ、男鹿山と申ハ潟と海の間にして獵場也、此所に湯治場有之ハよし、尤ひへの湯にして下かん瘡毒の名湯なるよし、此八郎ケ潟と申ハ古しへハ男鹿山より海へ流れ出ハ小川にて有之ハ所、此近邊の柚にて八郎と申者有之、此男鹿山の麓に小屋を欠ケ三人にて木を切り居ハ所、此川にやまへといふ魚をとりハを見附ケ、三人にて是を取り、小屋へもちかへりいろりにたき火して是をあぶり、二人の柚ハ酒を買に行八郎壹人是をあぶり居ハ所、眞事にうまきにおひにてこたへかね先一ツくひハ處其味シいわんかたなし、思はす二人酒買のかへらぬ內ミなこれをくひハ所しきりにのとかわきいたし、手桶にくミ置水をミな呑しまい手桶をさけて右之小川へ水をくミに行きしか、中〻くミハ間もこたへられす川へはいり口をつけて水をくミに行きしやと跡よりたつねきたりハ、八郎ハはだかになり川へ首きりはいりて水を呑居りハ間いかゝ致シ

ゆやと聲をかけられ八郎ハ此事を語り、われは此川の主シに見いれられ最早貴樣たちへたいめんもこれかぎりなり、又兩三日の内に此川あれ出て大なる潟となるへし、早〻小屋を引取りゆ樣にと申て川の中へくゝり其後行末知れす、二人の杣ハおとろき早〻小屋をかたつけわきへ引越シ申ゆに、はたして此所竪七里横八里の潟と相成申ゆと申と也、其見いれし主シと申ハたつ子とて八郎と夫婦ニ相成居りゆ所、年〻子供多く出來ゆゆへ仙北より南部へ越ゆ大保内峠と申所に潟有之、是をたつ子の潟ととなへ申ゆ、是へたつこハ引取りゆ、春のひかんより秋のひかんまてハ八郎か潟におり、秋のひかんにたつこの潟へ又かへり申ゆ、ひかんのいりにハ大あれにて右之主シの通ひゆとてミな〳〵おもてへ出るにも用心をいたし申ゆ、其通行の宿をいたシゆ内ハ茶町の角にて吉川と申内に泊りゆと申と也、其日に相成ゆ得は亭主ハ精進潔齋にて二階へ膳部をそなへ申ゆと申と也、それゆへ紋所ハ三ツ鱗にて家名を形屋と呼ひゆと申と也、珍ら敷とならすや、此潟にていなほら鮒名物也、大キなるハ壹尺位も可有之、尤まれ也、多くハ五六寸八寸位まてハ常に有ル也、骨やわらかにして味わひよろしくちかといふ魚澤山にとれる也、是ハ土浦邊にてとれゆわかさき申魚の類也、又ごりと申魚とれ申ゆ、海よりも獵澤山有之、寒中にも氷の上より所〻へたき火いたし穴を明ケ其所よりあミをいれゆて獵をいたしゆと申と也、又大久保村一ト市村より東の方に當りて太平良（ツイダイラ）村と云有之、此所の山を太平山と申ゆ、是に山鬼神大明神と云有之、是ハ古しへ久保田の御城下に茶町と申所にて少〻の見世商ひなそ致シゆ者有之しか、亭主におくれ後家に相成壹人の娘を持ち居りしか、右之後家ハ太平良村の者にて或時娘を連レ太平良なる古郷へ參りし所、三四月之頃にて逗留の内娘ハ近所之者の娘供と此太平山の麓へわらびをおりに行しか、外の娘供ハ日暮ニ歸りゆ得共右之娘斗歸り不申、外の娘に尋ゆ所山深くわらひをおりに行かれしか見うしなひて一向知れ不申、いろ〳〵さかしゆ得共しれ申さぬゆへ日暮にも相成ゆゆへミな〳〵歸りゆと申と故、是より人を頼いろ〳〵尋ゆ得共かいくれしれ不申、又〻明日に相成ゆて大せい人頼ミさかしゆ得共しれ不申ゆゆへ、いかゝのとにやと母ハ案事居りゆ所三日めに至りおのれと歸り來りしゆへ且よろこひ且おとろき三日いつくに居りゆやと尋ゆ處、山深く入りて道をうしなひ所〻方〻と歩行やふ〳〵歸りしと申とゆへ、定てひもじく可有之と申ゆ得共一向にひもじくも無ゆよし、只何事も無キふぜいなり、是より早〻母は娘を連レて久保田へ歸りし所、是より身持に相成ゆ、娘も最早十六才にもなりゆ得共定而かくし男にても有之ゆやといろ〳〵尋ゆ得共一向左樣の者も無之よし、是より母もいろ〳〵氣を附ケゆ得共男も有之樣子も見へ不申、いかなるとにやと申居ゆ内段〻月重り十五ケ月にて安産致シゆ所男子にて、生れながら齒を生し二三才の童子にもおとらぬ大きさにて骨太くたくましき男子也、然レとも一向何者の子と云と知れ不申、其内段〻生長なし此男子五才之時母ハ身（ま）かり申ゆ、一七日たちゆ得は娘ハ近所を廻り母の病中幷野邊送りの禮を述、さてわれハ先達而太平良村へ母とともに參り太平山へ近所の娘ともと供にわらひをおりに參りゆ所、山深くはいりゆて道をうしなひいかゝハセんと思ひし所へ一人の美男子參り、是にともなわれかりの契りをむすひし所、三日之間一ツにおりゆ所かの男子申ゆハ、我レハ此太平山の山の神也、其方われと契りをこめ最早身こもりたり、此儘に留おくへきなれともわれにハ壹人の母有りそれゆへ一ツたん先歸す也、腹なる子ハ男子也、是を生ミ落シ

母を身おくりいてその男子を連レて此山へ來ルへし。もし我かと葉を用ひす外に夫トにても持いへは其方命を取り申い、けして(マヽ)此事母にも語るへからす早ゝ歸りて又ゝ來るへしと申されしゆへ、われも又決而外の男ハ持チ申まじ、腹なる子を産落シ大切にそだて母を見送りいハヽ早ゝ參るへしとかたく約速(マヽ)致シ參り申い、最早母も見送り一七日もたちいゝ得は我レハ此男子を連て太平山へおもむき申い、跡の家のとハ何分御近所にてよろしき樣御取斗可被下、御いとまこひの爲に參りいと近所を步行いゆゆへ町内にてハきもをつぶし、此趣を庄屋殿方へ屆ケそれよりして御上へ申上いゝ所それハ只事にあらづとて、町内組合之者供を番に附ケ置れし所いつの間にやら男子を連レて忍ひ出末行(マヽ)不知れに相成申い、定而太平山へ參りいや半と思われいゝ得共山中をさかすとも出來不申、其儘に致シ　れい、是より女ハ男子を連レて太平山へ參り山姥山男と相成いよし、其男子之名を三吉と呼ひ申い、是秋田の三吉と申是也、秋田の國へ參り武道にても角力取りにても其外諸藝人日本一と名のりいゝ得は此三吉いろ〳〵に姿を替て出て相手に相成いと申と也、仙臺より出いゝ谷風梶之助ハ日の下開山にて秋田へ下りいゝ所、ある夜座頭に相成りあんま取りにて谷風か方へ參り申い、梶之助かたをもませ、其方ハよき力也、われ今迄其方くらいなる力の按摩に出合す、よほと指先に力がある也と申けれハかの座頭われとしつへいうちを致シ見られへしと申けるゆへ、谷風然らハ先我よりさきへうつへしとて座頭のにきりこふしへ谷風力をこめてしつへいをうちし所、すこしもきゝ申さすと笑ひながらさて是より我かしつへいをうけて見らるへしと申けるゆへ、谷風もさるものゆへさてハ三吉ならんと心づき、そはなる碁盤之上へにきりこふしをのせさアうつへしと申けれハ座頭ハ顏色かわり、すてにしつへいをうたんとする時谷風こふしを引けれハしつへいハ碁盤にうちあてゝいに碁はんの角トを三角にうち落シ、座頭は眼を開キにつこと笑ふて立去りしと申と也、其明ク日又ゝ結ひの角力にてかたや谷風と名のりを上ケし所へ十五六の若衆にて飛入りに出しゆへ、行司も三吉ならんと心付キ取らせ不申いと申と也、又おり〳〵姿をかへて酒屋なとへ參り酒をのませくれいゝ樣に申い、三吉ならんと心付心よく酒をのませいゝ得は、其夜のうちに大キなる木をほき〳〵とおつへしよりたゝ(マヽ)きにこしらへ、酒のあたへよりはいまし(倍增)に表なそへ積置い、もし又酒をのませすに歸しいゝ得はさま〳〵のあたをいたしいゝと申と也、其時分此太平山へたき木なと取りニ參りいゝ者山深く入りいゝ得は三吉出て、是より先へ行へからす我か母ハ鬼人に相成喰物無きゆへ人を見れハ取り喰ふなり、早ゝ是よりかへるへしとおしへいゝ、是より村の者供赤の飯又ゝ(マヽ)こわいゝなそ致シ持參り、何卒是を喰(食)といたされ人を取り喰ふ(マヽ)とハ御免被下へしと頼申いゝと申いゝ得は、きどくなる者共也母にも此をあたへけして人ハ取らせ申まじと申い由、御上にも此事をきかせられ此山へ社を建山鬼神大明神と祭られいゝと申と也、眞事にこれらハ珍ら敷物語りにて御座い

湊より御城下へ參りいゝ道に寺內と申所に古四王大明神と申社有之　寺內より御城下の道筋ハ前に書出しいゝ得共、城下へいゝ出し申い、跡先に相成いゝ樣ニいゝ得共追加に出し申い　そき參り申い故くわしく書印シ不申、それゆへこゝに

御山內より湊の濱を見渡し、南に上野荒谷より仙北へ通ひいゝ通船川筋を見おろし、よき風景也、此御神ハ古キ龜を祭りいゝと申と也、それゆへ古四王樣と申いゝ由、俗にこせうさま〳〵と唱へ申い、正五九月八日に殊之外參詣御坐い、中にも正月八日御家中其外町方にても衆參りと申て雪中御家中ハかたひら麻上下、

其外町人ハひとへものしゆばん又ハ赤はだかにてすあしなとにて参詣いたし申ハ、御鳥居前に茶屋三四軒有之、正五九月ハ賑わしく御坐ハ、此所に伽羅橋と申わつかなる橋有り、此わきにこうろぎと申而非人にもあらすまた只の町人にもあらす、御城下又ゝ村ゝ在ゝを袋を持チ門に立チこうろぎと申て歩行ハ得ハ米銭なそ遣シ申ハ、是ハいかなる者と尋ハに古しへ秋田城之助殿の家中にて此所に落チとゝまりし者六人有之、元トハ侍にて有之ハ故農業山かぎ(せ)ハ出来不申、持つたへたる伽羅の木有之ハをこまかにきりて是を持て門ゝへ立チこうろの木をめさぬかこうろぎの用ハなきやと持歩行けるか、後にハミな伽羅をうりつくしせひなく物貰ひと相成申ハよし、それゆへ今に門ゝへ立チてこうろぎ〳〵と申てあるきハよし、それゆへ香六崎とも申ハと申と也、是等ハ左も有へし、其先キに五百羅かんの御寺あり、是ハいつれよりか来りし同心者たんせいにて此五百らかんの建立致しハと申と也、今にてハ一寺一山と相成家形様御立寄りの坐舗迄出来申ハ、是ゟ五六丁先御仕置場有之、それより又三四丁橋を渡り矢はせ村、家数百四五十も可有之哉、御城下御家中又ハ町家の春先遊山場所にて料理茶屋其外あめ屋餅屋菓子屋澤山有之、山王の社有之神主ハ土崎大隅殿と申て大隅殿之弟に紋次殿と申有之、是ハ先年我等湊に住居致シ節兄弟同前に致シ、右紋次殿も揚屋を致シ被居申ハ、今ハ古人に相成其女房今に新地に刕と申て遊女屋致シ居り申ハ　東照宮ノ御社有之、別當ハ壽量院様と申て宮家にて上野東ゑい山よりなをられハと申となり　此矢はせにて貝鏡風呂と申物をこしらへ申ハ、尤外にても出来ハ得共此所にてこしらへ申ハハ火きへ不申ハ、是か名物と申こと也

追　加

南部毛馬内ゟ花輪へ出る間に錦木塚有り、此所を毛布の里と云ウ、古しへ此里へ京都より落来り玉ひし姫のおわセしに、日毎に細布といふ物を織て有しに草木村といふ所の男此姫戀したひて、此頃ハ戀する女の門トへ錦木と云ウて木をけずりて是をうつぐしく染て立おけハ其女心あれハ是を取り入る也、則戀のかのふしるし也とぞ、かの男日毎に錦木を持来りて立るい(と)へとも取入レられす戀やミて死シたり、其後姫もミまかり玉ひしを此所へ埋是を姫塚と名付く、今に毎年七月になりハ得は此塚の元へ草木村よりかの男の魂の通ふ道の跡付キハよし、此塚のかたわらに大木の杉有り、此杉に大なる蛇すミて春の頃此所へ遊参なそに参り弁當酒肴なと取出しハ得は此杉の枝より蛇ふらさかり、飯肴なとあたへハ得は是を喰ひて立去りハよし、是ハ姫の機の棒の蛇と化したるなりと云傳ふ、此姫をかくまいし家ハ古川村黒澤角兵衛と申人にて今に其跡有之、代々ゝ布を織て是を渡世とするよし、古歌にへ錦木ハたちなからこそくちにけりけふの細布むねあわつして、とあれとも細布ハ幅の細きにあらつ、糸のほそきゆへ細布といふよし、此細布今に毎年一反ツゝ京都へ上りハて内子の御座の腹帯に相成申ハと申と也、京都へ上ハ細布を織りハにハ主シハ七日精進潔斎にて、布織り上ハ迄ハ一間を〆切り人にも逢不申ハ由、黒澤氏別家ハ大館へ來り秋田城之助殿の家中に相成り大館に住居なし黒澤安右衛門と被申ハよし、今に其跡も大館に有之ハよし○毛馬内櫻庭肥後様と申ハ、南部様三ノ戸より盛岡へ御引移りの折柄國中御巡見被遊ハ、御先祖ハ櫻庭兵助様と申ハ、御泊り被遊ハ、田舎のと故御淋しく此所に美面よき女

仙臺より南部秋田まて　四一

有之ゐハ、約取り差出可申と被仰出ゐ所、庄屋山崎善右衛門と申者之娘至而美人にて、御約に差出しゐ處殊之外御意に叶ひ、此娘に御手を附ケさせられ三十日程御逗留被遊御歸り被成ゐ處、此女身持に相成、此事を申上ケゐ所盛岡へ御引取被遊、御城内に御殿をしつらへかくし被置ゐに男子出生いたし申ゐ、乍去奥様始御家中へも内々にて差被置ゐ所、右之男子五才之時殿様急病にて御病死被遊、奥様にも御部屋にも男子無之故御養子被遊ゐとに相成ゐを櫻庭兵助殿御部屋の寝間へ忍ひ入り、五才ニ成玉ふ御男子を抱取り家來和井内佐角と申者に脊負(背)セ江戸表へ先へ爲立、御自分ハ跡より駕にて急御用之趣にて江戸へ登り、江戸詰御家老中と相談致シ此趣を　公儀へ申上御世嗣に致シゐ、其砌十六人之者を供に連られきなこ餅をこしらへ是を弁當にいたし晝夜をわかたす江戸へ登り申ゐ、和井内佐角ハ五才之御男子を背負ひ連(マヽ)連一ノ木戸境の明神まて來りし所、母をしたひてなき出しいろ〳〵すかしても鳴やミ玉わす、此時茶屋の姥きなこ餅を差上ゐてだましゐ所是にてなきやミ玉ひし故此君御世に出玉ひて始メて御入府の折柄此茶屋へ御立寄り被遊、右之姥に御ほうび下り玉ひし故今に此餅を南部餅とも又南部姥とも申ゐよし、是境の明神の南部餅のいわれ也、此時より櫻庭肥後殿と改名被遊、代々五千石御家老格也、家中之者供にもそれ〳〵御ほうび被下置、和井内佐角殿ハ又家中にゐ得共御城下へ被出ゐ節ハ騎馬格、其外十六人の者供も御城下へ出ゐ節ハ御給人格の御取あつかい也、此吉例にて今にても江戸御登りの節ハ右之御部屋之被住ゐ御殿ゐ御出被遊右之忍ひ出し御門より御立被遊、御供之者ともにきなこ餅を被下御前も召上られて御出立被遊ゐと申ことにて御座ゐ、右花輪村善右衛門ハ津輕(カ)名九十九里と申川筋一圓被下置ゐよし、毎年善右衛門方よりさけの魚百本ツヽ、差上申ゐと申ことも

秋田より津輕まて

おくの志をり

扇橋庵

語

佛

津輕ハ物の賣買銀目にて、壹匁ト申ハ六拾文、壹分と申ハ六文也、錢相場ハ金壹分に貳拾八匁、貳朱に十四匁也、米ハ當時四斗俵一俵十八匁位也、酒ハ一升壹匁五分位にて極上酒也、すへて物の賣買下直にて至而住安き國也

言葉ハねーというとをよく申也、しかもというともよくつかい申ゟ、魚ハ青盛より參り申ゟ、城下黑谷（マヽ）とも下直にて大鯛と申者有之、ひらめかれいそいあふらめあわひハちいさく、たこハ水たこ也、にしんしほひきの類多し、川ます澤山也、すじこハ松前より參り申ゟ、かせハ平內名物也、鹽からに致うにと申ゟ

石佛川と申川より碼碯石出申ゟ、青盛の由藏殿より碼碯の玉をもらひ申ゟ、淺瀨石川の上にていわなと申魚名物也、やまべと申魚、是ハますの子也ト云ウ、風味よろし、又われと申とを申ゟ、是ハ江戶にてわたくしと申と也

天保十餘り四ツの癸卯とし卯月初の六日、秋田なる能代丸万八郎兵衛方出立いたし、鶴形と申驛路より飛根村より切石と申渡シを越へ、荷揚場村と申所より半道斗加護山ト申所へ參り申ゟ、此所ハ阿二八ケ山の銅鉛（鑛カ）を積送り金銀に吹分ケゟ場所にて、金銀ハ御上へ上納いたし銅ハ能代湊ゟ長崎へ積送り、八ケ山の元山にて御役家之外家數五六十軒程も可有之、御詰合ハ船山官平樣と申御方にて支配人田口市十郎殿と申仁之方へ久保田片岡郡藏樣より御紙面にて參り申ゟ、然ル處七日小澤と申所より大久保正太樣と申方御出にて、是ハ久保田より御知る人にて殊に大町貳丁目山崎屋万藏殿方ゟ御手紙持參いたし早速御目に懸り申ゟ、八日御出立之處雨天にて御逗留に相成一日御役家にて御物語りいたし申ゟ、九日天氣にて御出立御見廻り申ゟ、九日夜又ゝ御役家へ參り申ゟ、日ゝ御山內所ゝ見物いたし、七日八日ハ小繋と申所半道斗有之ゟ所、天神之御祭禮有之殊之外賑ひ申ゟ由にゟ得共雨天にて參詣も無之、船山樣大久保樣御同道にて參り可申之處延引ニ相成申ゟ（龍齋門人にて才蝶と申者、院內より手紙にて阿二へ參り、此節加護山へ參り申由御坐ゟ、尤我等ハ未逢不申者にて、同道いたしゟ蝶太郎とか申者、是ハ水戶のかしやの悴にて存居申ゟ、才蝶妻三人にて參り申ゟよし、我等加護山へ參り申ゟ砌ハ太良の方へ參り申ゟよし、荷物なと預ケ參りゟよし、我等出立迄歸り不申候ニ付逢不申ゟ）

○時平にはあらて雨天に天神もつふされ玉ふとのかなしさ

扇田と申所よりお竹と申女藝者母二人にて參り居ゟ、是ハ半助と申者之娘にて當山御名染にて度ゝ參りゟよし

○ふきわくる千ゝの黃金のかす〳〵ハたから入來る山の賑ひ

十日能代より大淵彥兵衛樣竹內庄右衛門樣四人連にて御出被成、兼而津輕へ御同道可致御約速にて御山內見物なから御立寄り被下ゟ、然ル所我等今一日逗留致ゟ樣に役人中ゟ被申ゟニ付一日延引ニ相成、十一日加護山出立、

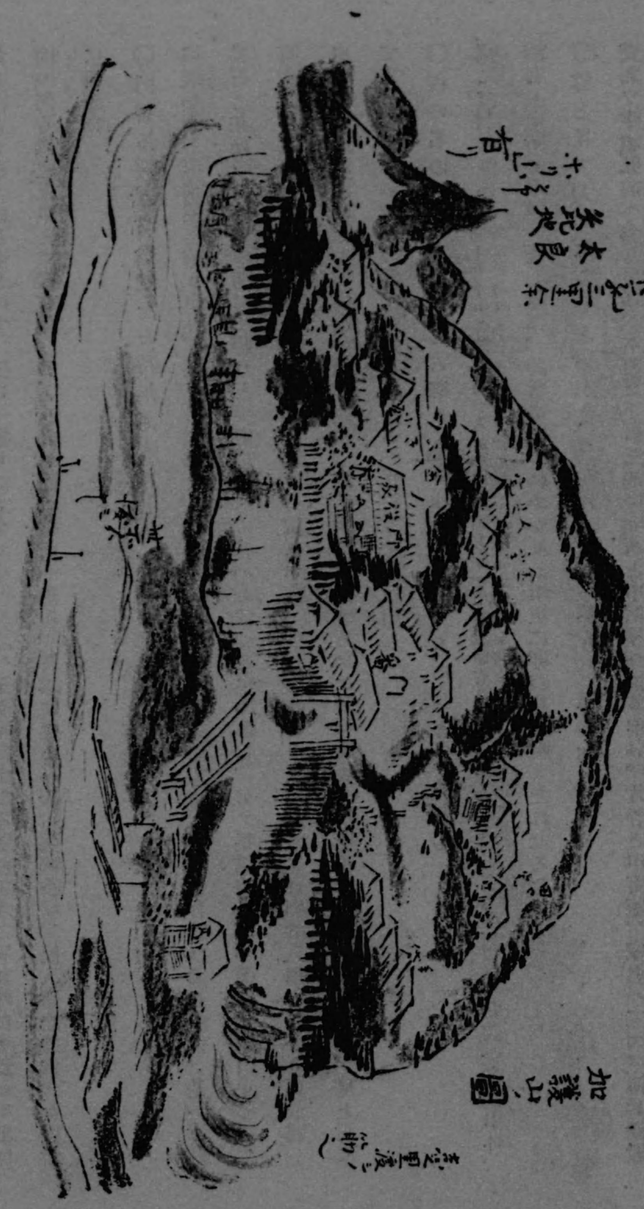
船にて壹里半小繋まて參り申ハ所、少ニわすれ物いたしハて小繋間屋場より取に遣シ申ハに付おそく相成、其夜今泉と申所迄參り七ツ頃に相成ハ故間屋場之隣家茂三郎と申者之方へ泊り申ハ所、主シ鳳流之者にて誹諧なといたしハ由、いろ〳〵咄シいたし短冊をのそまれハ間

〇中ニにめつらしきまて遅さくら都に知らぬ春の山里

十二日大館越前屋と申宿屋へ泊り申ハ、須藤半八殿と申仁御(カ)尊可申と存ハ得共津輕をいそきハ故十三日驛迦內と申所より長走りと申秋田之御番所を越シ、陣場と申所に旅人出入り改所有之、是より出羽と奥州之堺之峠にさしかゝり申ハ、峠の禁に小流れ有之、同し川を十二三ケ所歩行渡りいたし、それより峠へかゝり申ハ、峠の上に津輕様御休ミの場所有之、殊ニ此節御通行にて其跡有之申ハ、是より壹町程參り秋田津輕之堺に一本之杉の大木有之、是ヲ矢立峠と申也

〇出羽越へ〳〵しるしをこゝにミちのおくふとしくたちし杉の一本ト

是より下り坂にて、壹里程參り旅人改番所有之、又ニ半道斗參り中の番所と申有之、此所より南部へ越シハ道有之、尤南部津輕ハ出入り無之國故本道にてハ無之、川筋をたつね參りハ得は兩方谷合にて川の中を通行致シハと申ニ御坐ハ、南部堺まて參りハ得は又ニ水ハ向ふへ流れ申ハ、其水をたつね參りハ得は南部毛馬內と申所へ出申ハ、それより七時雨と申所ゟ盛岡へ出申ハ、此所一日に七度時雨に逢ハ間かく名つけしと申ニて、極難所にて冬ハ一向通行出來不申、又此所壹里斗西へ入り矢立の湯と申溫泉有之ハよし、是ハ殊之外名湯にてしつひぜん



秋田より津輕まて

かさによくきゝいと申とにて、三日一廻りにて少々小屋有之、至而不自由なる所にて米ミそ其外持参致シ不参いに御坐いま

而ハ何も無之と申とに御座いま、是より碇ケ關御番所へ出申、眞事に奥にハ珍ら敷御番所、出入殊之外六ツケ敷所

○引留る碇は關の碇そと行かふ人にしめす關守

岸儀兵衛と申宿屋へ泊り申いま、然ルに大館より廿四五に相成いま女壹人にて少々荷物を脊負ひ参り申いま、是ハ津輕

黒石之在尾の上へ（マヽ）と申所にて藤八と申者之妹にて名ハおはつと申いよし、七ケ年以前秋田へ参り久保田手形六工（マヽ）

町八代要太様と申御方に奉公いたし此度國元へ歸り申いま、能代邊迄送り人同道致シいま得共入用もかゝりいま故歸し

申いま由、ふびんにぞんし同道いたしいま所、御番所にて御改六ツケ敷手前妻之召遣イに致シ召連レ申いま、尾上村に

ておはつと申いま故かの錦山古郷ノ錦といへる狂言を思ひ出して

○村の名の尾ノ上の里を古郷とみかへるおはつもにしきなるらん

關にて別れ申いま　關より十町斗参り右へ入ル小繪山國上寺と申不動尊有り、世ノ中あしき時にハ身うちよりあせを出し玉ふ、別當より是を御上へ申上ると申と也　十四日關より弘前へ参り申いま、

錆石と申所て中飯いたし申いま、此所にたおれかゝりし垣根に卯の花の咲ミたれたるを見て

○雪と見て人のはらハゝいかにせんたわむはかりの垣の卯の花

壹九ツ半頃弘前へ参り申いま、本町五丁目三浦屋兵八と申宿屋へ泊り申いま、片谷と申富家、家名ハ三國屋傳兵衛殿

と申方之隠居所に能代大淵彦兵衛様竹内庄右衛門様御逗留之由、十五日三國屋の通ひ番頭にて三國屋錬吉と申仁

秋田より津輕まで

是ハ能代より知る人にてたつね参り地走に相成、同道にて三國屋隠居所へ参り申ハ、能代八郎兵衛より木村勝左衛門様と申方へ手紙持参いたしハ得共、是ハ御町目附にて御役柄故手紙斗御届申上ハ、和徳町と申所木村勇次郎様へも手紙持参致申ハ、是ハ元ハ御家中にて有之ハ得共當時ハ町人に相成、いろは組の頭にて男立テに御坐ハよし、十六日大漏様竹内様同道にて三錬殿先立チにて町中見物いたし申ハ、笹盛町と申所に　東照大權現の御宮有之、藥王院と申て天台宗の御寺にて御先祖ノ御木像有之、并御家老北村監物様御木像有之、其御社之入口の額に

壬の水流れけり久かたの天津ひつきのあらんかきりわ　トありけれは

○久かたの天津神世はいさしらす尊き國の守の御社

それより住吉明神參詣いたし

○住よしをこゝにうつせし神垣はまつも一しほ翁さひけり

今日此所に五穀を守り玉ふ神の祭禮にて、人こ多く參りて賑しけれハ

○佛とも神とも人のいのらましたねつミのりを守り玉へは

夫より親方町と申所三榮堂句佛と申誹人のもとへたつね參り申ハ、本名ハ竹谷慶輔と申て印板師に御座ハ、狂名ハ外ケ濱風と申ハて淺艸庵門人にて至而風雅なる人にて、江戸にも久しく居られハよし、近頃ハ足病にて一向歩行出來不申、一町内へも獨にて歩行キハ由、親父ハ七十七才にて當人ハ五十二才、息子ハ二十八才にて、三夫婦揃ひ居ハ故三榮堂と申ハよし、國の守にも是を愛させ玉ひて御目見へ仰被付ハよし、誹諧狂哥の門人數多有之月

秋田より津輕まで

並之會有之、行脚の句帳に三夫婦ヲ松竹梅に祝(カ)し、又ハ梅松櫻にたとへし發句狂哥あまた有之ゆ、短冊を出され
ゆ間

○しきしまのミちのおくまでたつねはや其名もひろき外ケ濱風

句帳へ

○盃の三ツ重ねなる妹と背は實に末廣き榮へなるらん

それより心安く相成、日ニ參り遊ひ申ゆ、狂哥誹諧之連中うちより書讀なそいたし樂しミ申ゆ、當年はセを翁百
五十年忌に付碑を建られゆよし、赤人の讀をいたされゆうたに

はま風

時も時所も所浦も浦詞も詞人もまた人

日ニ御城下見物いたし申ゆ、御城下家數御家中町家共豊(マヽ)万軒も有之、商家殊之外盤昌(マヽ)いたし、町並ハ碁磐刻(マヽ)にて
松盛町と申所土手と申所に擬法珠の附キゆ橘有之、本町通り十町斗り茂盛町と申所に芝居定舞臺有之、座元ハ廣
居茂三郎と申ゆ、元ハ廣居喜太夫と申ゆ由、太夫に御差合有之茂三郎と改名致シゆ由、役者ハ小佐川常世病死い
たし女房女にて舞臺を動メ申ゆよし、其外坂東又太郎なそ頭といたしゆて六七人も有之ゆよし、十七日又ニ三錄
殿同道にて高岡と申所(ヘ)參り申ゆ、弘前より岩城川を越シ三里斗、御先代爲信公を始メとして代々の御靈家にて殊
之外風景よろしく、それより一里餘百澤と申所へ參り申ゆ、此所岩城山麓にて八月朔日御山へ登山の泊り場所に
て、岩城山百澤寺と申御寺有之、是ハ岩城山の御別當にて寺領ハ四百石之御米印、本尊ハ阿彌陀如來、岩城ノ判

秋田より津輕まで

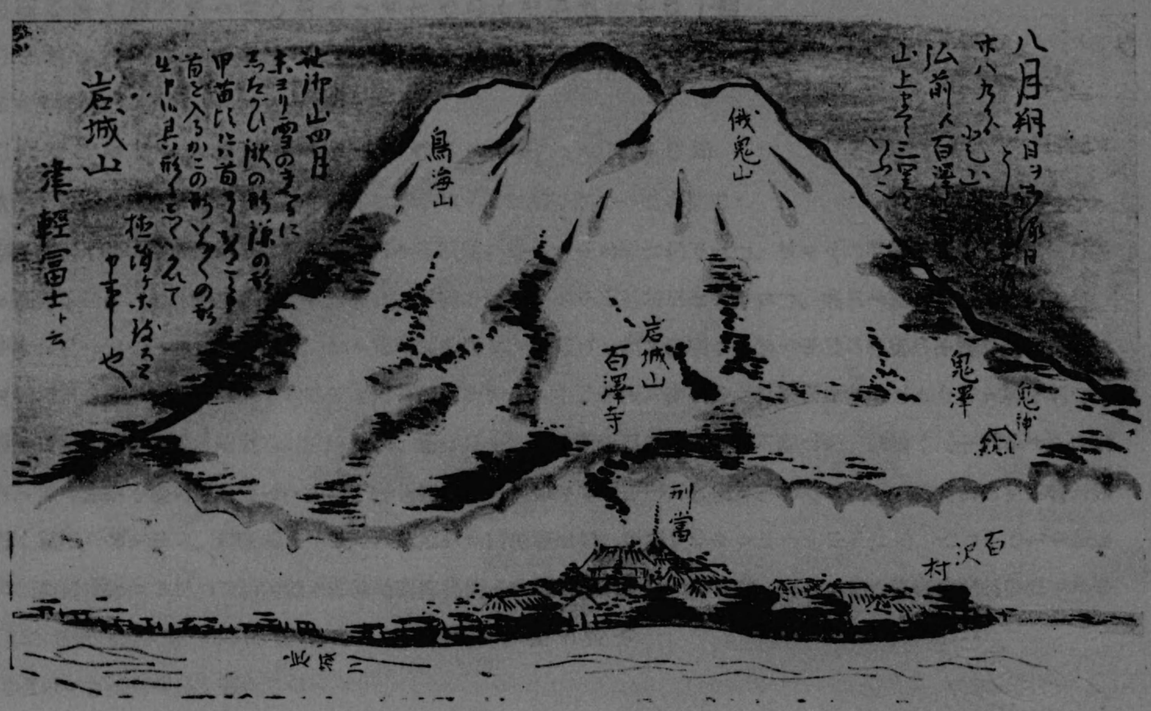
官の息女安壽姫を祭りい御山と申しにて、寶物安壽姫之玉手箱弁慶の珠數なそ有之、此山の雪七月迄消不申い由

○香久山もかくや岩城のいたゝきに衣ほすかとみねのしら雪

七月の初ツかたにきへいゆへ八月朔日を御祿日といたし、十日頃迄御領分の村々より諸人くんしゆいたし、八月十日斗に三十軒斗の村に泊り三四万人有之いよし、壹年中の物なりを壹ト月に取りいよし、又七月至りても雪のきへぬ年ハ不作にていよし、此雪の消やふ春より時々に色々の形に相成鍬鋤鎌さま〳〵の形になり申い、早苗植付ケの時分にハ苗とりおつこと申て苗を入レいざるの形になりい、いそきうへいと申しに御坐い、九月末より雪ふりつもり申い、山の巓三ツにわかれてミへけれは

○旅人も伏而見つまた仰きミつむつに名高き山のいたゝき（巓）

十八日弘前出立、大淵樣竹内樣にも能代ゟ御歸宅にて、是ハ深浦ゟ大間越シと申番所ゟかゝり御歸國御坐い、我等ハ三榮堂先生ゟ紙面にて黒石上町松井半六殿と申方へ參り申い、是ハ家業ハ宿屋にて三界庵如萊ト申誹人に御坐い、はせを堂門人にて諸國行脚被致、上方にしはらく被居はせを堂之仕筆をいたし、江戸にもしばらく被居い由、門人連中數多有之月並等有之おもしろき人に御坐い、黒石ハ弘前御分地にて津輕出雲守樣ト申上ケ壹万石之御城下にて、家數ハ御家中町家千五六百も有之い得共家作り殊之外大きくい故家數廣く相見へ申い、御目明シ松木松右衛門殿才藤善左衛門殿御二人御セ話にて山形町と申所に愛宕山有之、御別當地藏院と申方て持寄りいたし申い



弘前より如菜先生方へ參りゐとて

○君か名やわれも三界無庵にて如菜もとや宿と頼ん

廿二日迄持寄りいたしゐ所弘前ゟ御家老樣御病死に付鳴物停止申來りゐに付、夫より黒石御領分之内板留メと申所へ湯治に參り申ゐ、此所溫湯と申ゐて黒石より二里餘有之、壹里半斗參りぬる湯申所有之、古しへハよき溫泉にてゐしが今ハ殊之外湯ぬるく相成、乍去病にハよくきゝゐと申とに御坐ゐ、それより山を越板留村才川勘二郎殿と申方へ參り申ゐ、湯壺は三ケ所有之、兩方ひへ、中ハ熱湯にゐよし、中に瀧有之、家數ハ二十軒斗も可有之家之前に川有、其川岸よりわき出申ゐ湯にて土手を下り川の中段に有之申ゐ、宿之主シしんせつにセ話いたし呉申ゐておもしろく逗留致シ申ゐ、日ニ所ニ見物致シ、川向ふハ袋村半道斗中野と申處に作佛の不動尊有之、是より南部堺山合にて。澤邊。貳沙內。金目。沖浦。天下平と申所に鉛山有之ゐよし、是にも諸ニに溫泉有之ゐ由、惣而御國ハ溫泉數多有之、岩城山の麓にも湯段嶽ノ湯なと申名湯有之ゐよし、おりふし此邊山家ゆへ四月末に相成青物の盛りにて、うどわらびしほ手竹の子なんと自慢いたしくわせけれハ

○青物のさかりを客にまかのふてわれもゆてくう板留の邑

山ニの若葉を見て

○いたつらに見てもおかれし若葉山やまた山にいさしをりせん

○湯の峯ハ雲にかくれつほとゝきすあひセかけたる今の一聲

廿五日杉松殿被參酒肴なそ土産に預り申ゆ、最早節句前ニ相成ゆ故杉松殿ト相談にて一廻りも湯治可致、御連中へも右之趣御賴申上、是よりゆる〳〵湯治いたし申ゆ、うしろなる山へ登り見物いたしゆ所、前の川上ハ只一筋にて末ハ諸方へひろかり幾筋にもなり、村ゝへ落田へかゝりゆ風景いわんかたなし、此川を淺瀨石川と申、あせし川ととなへゆよし、折ふし五月雨ふりつゝきて水ハにこりしかど水かさまさりて一しほおもしろく、此流れ藤崎と申村を越シ白川といふ川と落合、末は岩城川迄流れ出ゆよし、此川にて諸村田を作りゆと申とゆへ

○一筋に民をめくミの川なれハ下ハ千筋にうるほひにけり

日ゝ湯治人被參四方山のはなしなそ雅俗とも興を催しゆ、

五月五日黑石より向ひ參りゆニ付、板留出立いたしゆとて

○かへるへきこゝろハさらになつ過て殘るあつさにあきのくるまて

同日黑石へ歸り申ゆ、然ル處今日山形町ゟ溫泉へ參りゆ道にて福民村と申所に並木松原有之、此所にて馬乘りと申て近鄕より小荷駄馬の丈夫なるを乘來り、右之馬にさま〳〵の美しき將束(マヽ)いたし、半天又ハひとへ物緒(マヽ)の赤きしゆばん木綿花染其外色々の着類にて地道又ハかけくらいたし、見物おひたゝしく茶屋もの賣なと出申ゆ、是ハ黑石より壹里斗浪岡と申所有之、古しへ高畑大納言樣と申御方御住居被成ゆ所とて今に浪岡御所と申ゆよし、是に加茂明神の御社有之、毎年五月五日加茂の競馬をなそらへていたしゆよし、近年黑石にてもいたしゆよし、黑石ハ御城下故見物も多く有之ゆ故浪岡にて少シ斗馬乘致シ黑石へミな〳〵乘來りゆよし、如萊先生連中同道にて見物に參り申、眞事におもしろき事に御坐ゆ

○豐なる御代や肥たるくらへ馬さても賑ふ福民の野へ

六日如萊先生連中同道(マヽ)て長崎と申川原へかしかと魚取(マヽ)りに參り申ゆ、歸りに福民野邊に如萊殿畑の内はセを翁百五十年忌被建ゆ碑を見物に參り申ゆ、碑表ハヘ花咲て七日鶴見る梺かな　裏に、　三界庵如萊

東ハ淺瀨石を見渡シ西ハ岩城山を望(カ)、眞事風景よろしく、此淺瀨石と申ハ古しへ千德大和守と申人の城跡にて、山形町と申ハ家老山形周防(カ)と申人の被住ゆ所のよし、又黑石ゟ壹里斗田舍舘と申所、是も大和守一門にて千德嘉門と申人の館跡にゆよし、是より弘前入口を和德と申ゆ、是も和德隱岐守ト申人の被居ゆ所のよし、此處に石の坊といへる古塚有り、年號ハ寛文四年と有之、表之文字よめ不申、下に日の字一字見へ申ゆ故日蓮宗の僧の墓なるや、只石の坊とのミとなへ申ゆ、畑の眞中ゆへ取のけゆへハ又ゝ元へかへり居ゆと申とに御坐ゆ、はセを翁の碑を見て

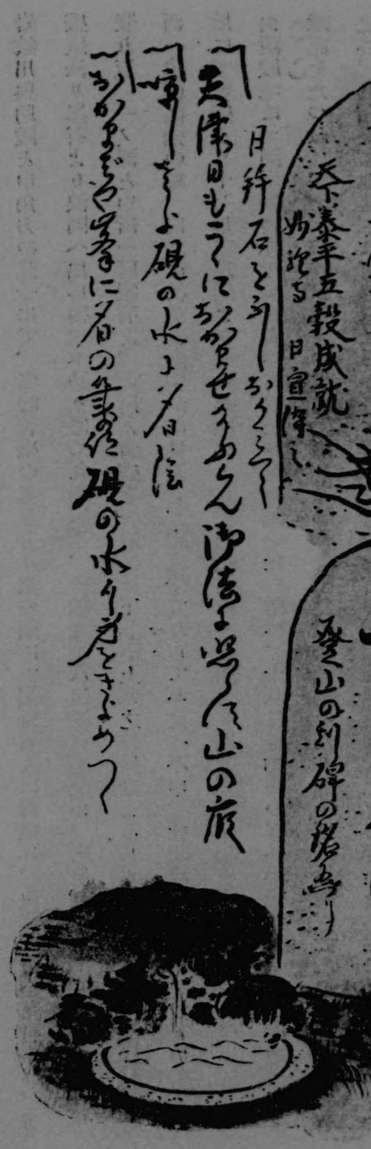
○月雪も此内にあり花のもと

まさ〳〵と其傳や花會しき　如萊

空はれ渡る鶴の一聲　扇橋

八日黑石より二里半餘、南部堺にて法峠と申所へ如萊先生夫婦同道にて參詣いたし申ゆ、此所ハ高館山中法嶺寺と申て日持上人之舊跡也、日持上人ハ日蓮上人の御弟子に六老僧(マヽ)也、此御山に跡をたれ玉ふ、黑石より壹里斗平

地にて夫より登り坂半道斗參り聖人清水と申有之、京都本満寺日龍上人登山之刻聖人清水と名附ケ玉ふよし、夫より半道斗少ゝ下りにて高館と申所へ出申ゐ、それより又ゝ半道餘登り御山の禁に聖人の御堂有之、幷清正公の御像有之、當山靈寶之鈴有之、大サ五寸廻り程も可有之、表には奉納、裏に楠正成と有之ゐ、是ハ元ハ黒石御家中に有之ゐを納玉ふと申とにてゐ、正成いつれへ納玉ふ鈴にやしれ不申、又傳行大師(マヽ)之御作にて摩利支天の尊像是ハ別に御堂有之ゐ、是より山上迄半道餘り、三四丁登り聖人の題目を書セ玉ふ硯水とて冷水有之、夫より又四五丁登り番神石と申有之、又ゝ三四丁登り經石申有之、大サ二間四方、それより又二三丁登りゐ得は山の嶺也、此所に日拜石申有之、是ハ日持上人題目を書玉ふ石にて、其墨之跡眞事にあさやかにおがまれしを近頃是へたかねをいれほり申ゐ、眞事おしき事ならすや、此峰より見渡セハ東ハ南部境燒山峠、又ハ笠松峠とも申ゐ由、古しへ此所に鬼人おまつと申女盜賊居りゐ所と申とにて、南ハ秋田西ハ弘前岩城山を越シ深浦迄見へ申ゐ、北ハ青盛海上より松前を見渡し絶景云んかたなし、眞事に奇絶之靈山也、此日拜石へ青盛の海より龍燈上りゐよし難有御山にて御座ゐ、此所古しへは南部へ越往還にて、上人此所越シ玉ふおりからしばらく此御上にこもり玉ふとおほへたり、十日愛宕(カ)様地藏院へ御家老唐午儀右衛門様御出、一雅様同道にて參り申ゐ、此一雅と申仁ハ本名鳴海久作殿ト申而富家にて御坐ゐ、唐午様三浦様度ゝ江戸御詰合にて江戸之咄シ致シ終日遊ひ申ゐ、十一日より又ゝ紫雲山來光寺と申御寺にて三四日持寄りいたし申ゐ　弘前に此節芝居有之由にて如案殿一雅なと見物被參、我等もさそわれゐ得共青盛へ參り申ゐに付參り不申ゐ　十七日黒石出立いたし青盛へ參り申、尤如來先生ゟ手紙にて安方町鳴海由藏殿と申人の方へ參り申ゐ、是ハ家業ハ獵師なれとも



岩城川與助殿と申角力の息子にて、當時青盛の男立若イ衆の頭にて頼母敷人に御坐ゐ、由藏殿方へ落付申ゐ、青盛道法り黒石より浪岡へ出ゐ得は本通りにて九里二丁、山越近道八里程有之申ゐ、三里斗平地にて夫より三里斗登り坂、一ノ澤と申所一軒家有之、此所ゟ青盛を一目に見下し海上殊之外風景よろしく、東の方ハ南部尻矢ケ崎西ハ津輕龍飛の崎、向ふに松前をかすかに見渡シ、尤極晴てならて(マヽ)ハ見へ不申、此間龍飛白紙中ノ汐と申て極難所にて青盛より十七里三馬屋より七里御座ゐよし、白紙之汐ハ松前より出て眞事ニおそろしき所に御坐ゐ、早速由藏殿宅にて問屋衆其外皆ゝ被參ゐて二三日御座舗いたし申ゐ、十八日善知鳥の宮へ參詣致シ、神主殿方へ參り緣記(マヽ)をたつねゐ、神主柄崎伊豫と申仁之物語りにハ御先祖爲信公此國を切り開キ玉ふ折柄、此所に南部之代官有之ゐ、爲信公に追落され南部八ノ戸へ逃ケ行ゐ、其節此宮の神主御神體幷緣記を持參いたし共に逃ケ行ゐ、今に八戸御家中に神主の跡有之ゐと申と也　御先祖爲信公と申ハ久下岩松殿と申て南部ノ旗下にて有之ゐ所、南部ノ代官其外津輕ノ館持を追落シ津輕一國を押領して津輕ノ國主と成玉ふと申と也　其後一國納りて國の守御巡見之節、獵師に此宮ハ何之宮にてゐやと御尋被成ゐ、老人申上ゐハ古しへ此所に文次と申獵師有之、妻ハ安と申ゐ、文次多年殺生の罪にや氣違ひに相成、出て行方不知、妻安ハこれをかなしミ此潟へ身をしづめ申ゐ、依之此潟を安か潟と申ゐ、間もなく文次立歸り此事をきゝて、これも此潟へ身をしつめ相はて申ゐ、然ルに此潟に見なれぬ鳥二羽來りて遊ひ居ゐ、是ハ定て文次安か鳥と化したるならんとて男を悪知鳥と名付ケ女を善知鳥と名付く、獵師文次安か魂を祭りて善知鳥の宮と呼申ゐと申上ゐ、今ハ明キ宮にて神体も緣記(も)無之ゐゆへ悪戸御前と申上ゐ、是は悪戸村と申所より被出美人故國の守の奥方に被成ゐ御方之守本尊の寿天を崇、

秋田より津輕まて

此宮へ納玉ひて、其時分ハ此宮の廻り潟にて有りし故悪知鳥潟島の辨天と名付ケ、神明の神主柿崎伊勢と申者へ御預ケ被成ゆを後に弟伊豫へ譲りゆと申傳へゆよし、それゆへ安方町が青盛の町の始メにて、善知鳥文次安方町獵師八百軒と書上ゆよし、善知鳥ハ其形鴨に似て如方目ノ嘴の上に肉角有り、水をくゝり魚を取りて角に魚をさす、多く見るとなし、花鳥とも云ウ、青盛より南部松前の間に住ム獵師海上にてきりふかく闇夜の如くなりし時、おゝい〳〵と呼人のうたふに似たるゆへうとふ鳥というとかや、是古しへの悪知鳥善知鳥なりと云と也、

又或説にうとふト云鳥別になし、鴈を云ウ、鴈ハ砂の中に子を産われさへも知れぬ程にかくす、空へ登りて其子を呼聲人間に同し、是をうとふと云ウ、又安方とハ獵師の目にかゝらぬ安き方に子を置故安方と云、人其子を見付ケて是を取れハ恨て泪を落す、其色紅也、又鷸とも青也、又よな鳥と云ウ、其子をひな鳥と云、万葉集に

ますらをのゑんひなとりをうらむれて泪も赤く落すよな鳥

思ふによな鳥とハかのはな鳥のとなるへし、よとはをたかへたるなるへし

鴈にハ有ルへからす、此善知鳥鳥のとなるやいかにも不詳、此所津輕台方外ケ濱と云、又卒都ケ濱、索覩ケ濱、義經記に百度の濱、又十三濱とも書也、合方とハ東ハ南部南ハ秋田北ハ松前夷ケ嶋西ハ庄内酒田よりして越後越前京大坂迄も行衛故合方と申よし

○安方とともに文次もきへうせてよめともわかぬ鳥の跡かも

秋田より津輕まで

○朝な夕なすなとる舟に身をまかせ世を安方におくる浦人

青盛町家數三千軒と申と也、大町通り米町通り濱松町と申所片かわ町にて、かた〳〵ハ海にて船問屋十一軒。瀧屋。澤屋。竹野屋。藤林。岩城屋なと頭にて其外附ケ舟小宿數多有之、此町にかくし者有之、是をこもと云、又きりうりとも云、六匁也、三百六十也、青盛前句附川柳はやり申ゐ故

○海邊のこもはきりうり六匁

又赤鬼と云名酒有、瓢云題にて前句附ノ點取有之

○瓢から鐘旃赤鬼出して呑ミ

遊女屋ハ大町通りの下鹽町と申所也、古しへハ是も十二三軒有之ゐよし、今ハ五軒有之、酒田屋澤屋松葉屋松坂屋新茶屋と申て越後より近年參りゐよし、本間と申ゐ、十九日間屋藤林へ參り申ゐ、丸屋佐助と申仁、是ハ江戸の人にて六七年此方に住われゐよし、村林ト申仁、是ハ當地の富家の跡にてゐよし、廿日町中見物いたし、大町通りゟ鹽町つゞミの橋と申を渡り野内と申所迄參り申ゐ、此所ハ南部境の御番所にて殊之外出入り六ツケ敷、是より麻虫と申所よき溫泉有之、風景もよろしき所と承ゐ得共青盛ゟ出切手無之ゐてハ通行相成不申、尤夕方に相成ゐへはかくれ道も有之よしにゐ得共、何かと六ツケ敷故此所より歸り申ゐ、其夕見立殿と申御醫者、是ハ黒石如萊殿隣家松野殿と申御醫者の弟にて青盛文龍殿と申方へ養子に被參ゐよし、右之仁同道にて大町の長野屋と申へ參り申ゐ、廿一日二日由藏殿宅にて持寄りいたし、廿三日より米町岡間屋と申ハ宿屋のとにて米屋吉藏殿と申

秋田より津輕まて

方へ引越シ申ハ、是より大町黒田與之吉殿と申仁の宅にて廿五日迄持寄り致シ、廿六日鹽町酒田屋へ參り申、廿七日又ミ黒田にて持寄りいたし、廿八日間屋岩城屋へ參り申ハ、廿九日黒田にていとまこひ、其夜岩城川にていとまこひ致シ晦日出立と相極メ申ハ、麻虫より先平内と申所小湊と申に錦塚有之ハよし、古しへハ大樹の槻の木有り、今ハ其株斗殘り居ハよし、大株ハ三間四方も可有之、中ハ二間四方、小ハ壹間四方有之ハよし、晦日青盛出立いたし、一ノ澤と申所より半道斗入内と申所有之、此所ハ中將實方朝臣の舊跡にて入内山泉福寺と申有之、本尊ハ千手觀音、地内に實方朝臣の塚有之、實方朝臣ハ陸奥の哥枕見て參れと仰を受られ此所迄下り玉ふに、此所に道祖神の宮有之ハ間下馬し玉へと馬方申ハを、われ中將なりなんそ道祖神に下馬致スへきやと其まゝに通られしにたちまち落馬してむなしくなり玉ふ、其魂雀となりて都をしたひ大内へ飛行し故是を入内雀と云イ、又此所を入内と申ハ由、此泉福寺に實方朝臣のゑぼしかりきぬさま〴〵の寶物有之ハ、是より黒石如萊殿方へ參り又ミ二三日逗留致シ申ハ、此入内近邊に鹽燒藤太と申者住イハ古跡有之ハよし、此鹽燒藤太と申人いつれの人なるや實說不詳、いつれにも落人と相見へ申ハ、又藤崎と申所に唐糸の池と申有之ハ由、是ハ古しへ最明寺時賴入道之恩ひ考唐糸御前と申者、時賴の跡をしたひ此所迄參り此池に身をしづめしと申とにて、此邊唐糸野と呼申ハよし、弘前に唐糸山藤先寺と申有之、是唐糸御前のなきからをおさめし所にて寶物數多有之ハよし、天保十二丑年開帳有之ハよし、弘前長勝寺と申に鈎鐵有之、是も唐糸御前の菩提の爲に鑄られしと申とに御座ハ、實說なるや不知　秋田より津輕へ參る道大館ゟ一里釋迦内と申所、是に釋迦堂有り、是ハ唐糸の一七日に建玉ふと云ウと也、又秋田仙北に二七日迄建られし釋迦堂有之と申と也　又黒石より三里斗猿賀山と申御山

秋田より津輕まで

有之、田村將軍の建立と申と也、猿賀山深砂宮と申ハ由、何之御神にやわかり不申、參詣多く有之ハよし、或人云、猿賀山田村將軍退治し玉ふ鬼なりと云、むしろ七枚につゝみて此所へうつめたり、爪ノ長サ五寸程有り、今におり〳〵掘出す者有りといふと也　又黒石御屋舗内に稻荷の宮有之、是も田村將軍の建立と申とにて大きなる木の面數多有之、是ハ田村丸夷を討玉ふ時是を軍兵にかぶせ夷をおどし玉ふと申と也、至て古物にて是等ハ左も有ルへきや、最明寺のとハ餘り實說とも思われず、時賴を讃し讃に〳〵古しへの鎧に今ハ引かへて衣一重をとふす矢もなし　よミ人しれす

○雲の上のとがめハ遠き哥まくら實にしきしまのミちのくのはて

○唐糸のいとももつれし物語りいつの時賴いゝふらしけん

○其頃も夕日に赤き猿賀山しんしや宮とハよく名つけたり

是より五所川原木造り深浦。鰺ケ澤。邊迄參りハ〳〵定而さま〳〵なる名所舊跡も可有之ハ得共、秋田をいそきハ間六月五日黒石出立致シ、藏館大鰐と申溫泉場有之ハ、大鰐川原子の湯と申にしはらく湯治いたし申ハ、田中重次郎と申方に泊り申ハ、此湯をからこの湯と申也、川原子をつめたるなるへし、三日一廻りにて眞事につよき湯也、瘡なそにハ希代なり

○ひり〳〵とからたにしミてあつけれハからこの湯とや人の云らん

男女之風俗、農業山かせき等出るハ下にハさきおりさしとなそを着し、上にハこんの麻布の半天、寒き國ゆへ猫鹿狐狸のかわなそを上へ着し、笠ハアラダイといふ鉢にてあミたるくゝり留メへ青麻にてふさなそを下ケ、女ハ同しこんの麻布半天へ同し麻をいろ〳〵うつくしく染かた入レをしてきる也、かむりものハ風呂敷を二ツにおりつきんのやふにかむりうしろにてむすぶ也、植附ケハ三月上旬に苗代をかき、十四五日頃種をおろし、山ミより若葉をかり來り是をこやしにする也、早きハ五月初メ、おそきハ廿日頃迄にハ不殘植しまふ也、殘暑つよけれは上作なりとそ

秋田より津輕まて

津輕より秋田へ歸る

をくのしおりのつゝき

語

佛

六月十三日津輕錠ケ關より釋迦内村、此處に最明寺の思ひ者唐糸御前の一七日に建られし釋迦堂有之、それ故釋迦内と申ゝ由、仙北角館に二七日建し釋迦堂有之ゝよし、今日大館迄參り大町越前屋吉郎右衛門と申宿屋へ泊り申ゝ、御目明シ須藤半八殿方へ尋申ゝ所久保田へ被參留守にて逢不申、同役原田三四郎と申仁之方へ尋申ゝ所持寄り坐舗にても致シ可申間四五日も逗留可致樣に被申ゝ間留り申ゝ、十四日黒石如來殿方ゟ手紙にて肝煎石田宗右衛門殿俳名ハ鵬口驛場役所才藤市郎右衛門殿俳名雪守岩澤作兵衛俳名月好と申仁之方へ尋申ゝ、御内町にて大澤蘆次郎樣と申御方、俳名恭齋と申御仁之方へ尋申ゝ所是も久保田へ御出にて御目ニ懸り不申ゝ、十四日より三四郎殿幷嘉吉殿と申仁右二人世話にて一心院樣と申御寺にて五日之間持寄り御坐舗致シ申ゝ、宿屋吉郎右衛門隱居ハ庭好キにて殊ニ濁酒を業しミ、少ゞ風流も有之ミつから濁酒庵と申ゝ故○盃を友と業しむ濁酒庵おのれ一升樽ことをしる

十三日吉郎右衛門方へ能代之女津輕より歸りゝとて留り居ゝ間丸高八郎兵衛方へ手紙差出シ申ゝ、十七日市川男女藏津輕より病氣にて參り大瀧へ湯治參り(に)居ゝ所、能代御目明新助殿より向ひ參りゝて越前屋へ參り申ゝて能代へ參りゝニ付、又ゞ八郎兵衛方へ手紙遣シ申ゝ、我等も廿一日大館出立、九阿二入口米内澤と申所に市有之大館商人衆荷物船にて送り申ゝに付是へ便舟致シ、鷹の巢と申村迄六里之間參り申ゝ所船中にて商人衆に噺を被望、一ツ二ツ致シゝ所鷹ノ巢迄參り地(礒)走に相成申ゝ、其夜ハ三四郎殿手紙にて兵四郎殿と申仁之方へ參り村内にて坐舗いたし、廿二日鷹の巢ゟ脇神村七日市村米内澤村迄參り、驛場役人にて才助と申仁之方へ泊り申ゝ、坐舗殊之

外風景よろしく今日此處市にて誠ニ賑ひ申ゝ、此村ゟ阿二にて御坐ゝよし、廿三日浦田村前田村、此所より山道にて馬立チ不申、才助殿方にて坐舗より見渡シゝ得は前ハ阿二川にて向ふハ一面に田甫遠、山ゝを見渡しはるかに小繋七倉天神の山を望ゝてよき景色なれは

○こゝらまて黄金の水や流れ来て小田もうるほふ米内澤かも

此所に伊口内と申小村有之、是より久保田へ近道有之、小阿二へ出山越シにて五丁ノ目へ出申ゝ由、至而難所にて有之ゝよし、此所にかけ橋有り、中半まて一まい板を渡シ半分ハ船を渡シ、是より岩坂と申て岩を切開き坂に致シ申ゝ、此上にはセを塚有之、表に大字にて芭蕉翁と有之、(裏)表に　雲雀鳴中の拍子や雉子の聲　はセを右も左も花の金山　東野　と有之、此東野と申仁者眞木澤の御手代長谷川文助殿と申て當時二ノ又に被居ゝ支配人長谷川名右衛門殿の親父にて有之ゝよし

○言の葉の石に花咲金の山

是より長野町二丁程有之、水無町半町斗行横町と申處より眞木澤御臺所へ參り申ゝ、御詰合大久保正太様御等申上、尤加護山より手紙にて支配人橋木(ママ)永助殿御取次にて其夜は御臺所に落付申ゝ、大久保様に御目ニ懸り御咄シ申上ゝ、廿四日大久保様舗御見分にて三枚へ御出被成ゝニ付、六ケ山不残廻りゝ様ニとの事にて、大久保様御同道に三枚ゟ參り申ゝ、大久保様には所ミ舗御見分被遊ゝ間天狗平と申所より御先へ參り、三枚御臺所支配人菊地利助殿と申御仁之方へ參り申ゝ而御臺所に落付申ゝ、二夜御座數數シ申ゝ、御手代治左衛門殿と申仁俳人にて如

津輕より秋田へ歸る

松殿と申ゟ、哥仙仕立ゟ趣にて

　音のして出口のしれぬ清水哉　　松塢

　むけに折るゝ藪の白百合　　如松

我等に第三を致シゟ様に被申ゟ間

　馬柄杓て蚊柱叩く小侍　　扇橋

　家のまかりのさてもうるさし　　如松

　錦木の昔し語りや門の杉　　扇橋

然ル所舗主宿屋より坐敷申參りゟニ付參り申ゟ

廿六日一ノ股支配人木村半左衛門殿方へ參り御臺所へ落付キ申ゟ、三枚より一ノ又ゟ參り申ゟ道殊之外風景よろしく、谷川の流おもしろく兩岸ハ岩をたゝミ所々に瀧有之舗主小屋舗等有之ゟ、一ノ又にて二夜御坐舗いたし廿八日ニ、二ノ又長谷川名右衛門殿と申支配人の方へ參り申ゟ、此所ハ小澤の下山にて家數なとも殊之外少く、支配人御臺所に被住申ゟ（二ノ又御臺所坐敷よりして森吉山を見渡し申ゟ、山上ノ石燈籠まて見へ申ゟ）一夜御座敷致し廿九日萱草へ參り申ゟ、此所もやはり小澤の下山にて御臺所住居にて高橋清四郎殿方へ參り申ゟ、一夜御坐舗致今一夜と被申ゟ所、小澤へ大久保樣御出ニ付七月朔日小澤御臺所へ參り申ゟ、此所ハ阿二壹番の御山にて分内殊の外廣く、御手代方舗主其外諸職人多く、家數も餘程有之、支配人も二人有之山口正左衛門殿小林嘉兵衛殿、御勝手方軍藏殿三治殿、其夜御臺所へ

津輕より秋田へ歸る

（コノトコロ落丁カ）

眞木澤より三枚へ壹里餘、三枚より一ノ股へ半道餘、一ノ又より二ノ又へ半道餘、二ノ又より萱艸へ壹里半餘、
萱艸より小澤へ壹里餘、小澤よりはた町へ半道餘、銀山町より眞木へ半道餘、はた町銀山町水無町長野町合テ二
十町斗程も可有ゐや

○枝も葉も猶奥深く繁るらん黄金の花の眞木澤の山
○朝夕の詠はつきぬ金の山これそ月雪花の三枚
○金の蔓山からやまへまたかりて一ノ又よりこゆる二のまた
○萱艸の中に黄金の花咲て實のる小澤の枝も大澤
○昔しよりかゝる矢比地に金わきて天下太良に山そ賑ふ
○卦の數にかのふや阿二の八ケ山これそ拂ひの八森の山
○三種より只一ト艸の金のつる實納る院内の山
○ふきわくる千ごの黄金のかつ〳〵もたからも入來る山の賑ひ
○寶藏へ納る金や奥の上これを家形の御納戸の山
○金や山やまや黄金の蔦かつら
○五十歩も百歩もつゝく金の蔓

○四季に咲花や黄金の阿二の山

眞木澤御詰合　大久保正太様　水戸部新助様　支配人　橋本永助殿（マヽ）
小澤同　上松平右衛門様　支配人　山口正左衛門殿　小林嘉兵衛殿
三枚御詰合無之　支配人　菊地利助殿
一ノ股同　同　木村半左衛門殿
二ノ股同　同　長谷川名（右）衛門殿
萱艸同　同　高橋平四郎殿
加護山御詰合　船山官平様　支配人　田口市重郎殿
太良同　長峯政兵衛様　同　木澤理左衛門殿
矢比地同　大井（筆カ）集人様　同　成田新一郎殿
八森　同　加賀谷五左衛門殿
院内　同　村木六郎兵衛殿
奥ノ上

八森太良ハ至而古キ山にて平城天皇ノ大同二年に開ケゐ山にて有之ゐ、それゆへ書附ケにも八森古銀山と有之ゐよし、奥ノ上ハ南部ノ境にて銀山也

津輕より秋田へ歸る

森吉山
一ノ股
三又
小沢
本構

三枝
眞木沢
木山役所
木部

阿二八六ケ山とも銅山にて院内は金銀山也、太良ハ鉛山にて八盛ハ銀山也

此所去年四月類焼いたし家ゝ新らしく出来申ゐ、殊之外御臺所綺麗にて、殊に此節　公儀より金山御巡見御下り被遊ゐ由、達道半田銀山より南部津輕御見分にて七月中頃に御出被遊ゐと申ことにて御座ゐ、御巡見ハ御勘定方本山幾次郎様御普請方土屋彌市様金座役人原良蔵様御三人にて有之ゐよし、右ニ付普請等出來申ゐ間りつばに相成、一万石位の御大名之御臺所程有之申ゐ、二夜御坐舗致シゐ處今一夜致シ度様ニ被申ゐ得共、大久保様眞木へ御歸り被成ゐニ付御同道にて眞木へ歸り申ゐ、又ゝ御臺所に落付キ二夜御坐舗いたし、小澤より眞木へ參りゐ節銀山町御目明シ巳ノ松殿と申仁、大館三四郎殿より手紙にて等申ゐ所留守にて遂不申、六日木山方御役所へ大久保様同道にて參り申ゐ、御詰合は山形致之丞様加藤錂之助様にて其夜御座敷いたし七日木山方御役所より船にて米内澤迄送られ申ゐ、朝ハ少ゝ雨天にてゐ所四ツ頃より晴天に相成、又ゝ壹頃ゟ夕方に相成夕立にてやふ〳〵米内澤迄參り申ゐ

○陸よりも近き船路や弓とつる矢をいるとくくたる阿二川

○夕立に追れて阿二の下り船

其夜は米内澤驛場才助方へ泊り申ゐ所七ツ時より大雨に相成、雷なと鳴申ゐて久しふりにて雨ふり申ゐ故、稻ハ元より畑物迄うるほひゐよしにて、ミな〳〵よろこひ申ゐ

○夕立や田つらもふとる米内澤

八日米内澤より小繋へ參りゐ、道ゝ繼場澤山にて半道か十五六町にて繼申ゐ間殊之外手間どれ、やふ〳〵七ツ頃小繋へ參り申ゐ、驛場の向ふ肝煎殿方へ泊り申ゐ、九日加護山へ立寄り能代へ歸り可申存ゐ所、餘り殘暑嚴しく中ゝしのきかたき暑ゆへ、扇田より大瀧へ參り湯治可致と存、今泉茂三郎殿方へ立寄り綴子迄參り申ゐ處、驛場向ふ本陣高橋八郎兵衛殿と申仁之方へ參り中飯いたし居りゐ處、驛場隣高橋善十郎殿と申仁、是ハ大館にて近付キに相成申ゐ狂哥なと被致戯作の眞似なといたしおもしろき仁にて、本陣之別家にて右之仁參り被居、餘り暑さ嚴しくゐ間一夜泊りゐて明朝早朝に參りゐ樣にと申とにて、八郎兵衛殿善十郎殿二人に留られ申ゐて本陣に一宿いたし申ゐ

○立よらは大木のもとよ夏の旅

其夜御坐舗いたし申ゐて明朝早ゝ出立可致存居ゐ處今一夜と留られ、十日壹郷藏會所にて御坐舗いたし、十一日又ゝ大夕立にて出立致シ兼善十郎殿方へ泊り申ゐ、十二日綴子出立致シ申ゐ、善十郎殿狂名ハ夢巢と申ゐよし、いろ〳〵戯作の本なと見せられけれは

○綴にハあらてと葉の裁にしき巻かへしたる文そ目出度キ

是より五里八丁繼場なく米代川を渡り、尤きのふの夕立にて大水にてやふ〳〵渡り申ゐ、壹過に扇田半兵衛殿方へ參り申ゐ、是ハ加護山にて近付キに相成ゐお竹と申藝者之親父にて、殊之外世話好成仁にて昔しハ料理茶屋なと被致藝人多く參り申ゐ内にて御座ゐ、鳥渡立寄りゐて大瀧迄參り可申存ゐ處一夜留られ地走に相成、其夜松右

衛門殿と申仁被参、是ハ去年南部より参り申ハ節毛馬内より手紙持参いたし参り申ハ所能代へ被参留守にて逢不申此度逢申ハ、十三日松右衛門殿方へ見廻申ハ而それより色ゝ買物なといたし大瀧へ参り申ハ、宿善左衛門殿と申方へ落付キ申ハ、此所家數三十軒有之可申家ゝに内湯有之、熱湯ひへ色ゝ有之川端に瀧有之瀧九本有之申ハ、是より半道餘十二所、此所ハ南部境にて御番所有之、領主ハ茂木筑後様と申て御高五千石にて佐竹様御太夫之御家也、大瀧より十二所の向ふに三哲山と申山有り、是ハ古しへ南部より來ル醫者に三哲と申人有り、武藝學文ニ達し領主幷家中町方まて皆教しへを受て領主始メミな〳〵禮物無キをいかり、領主年貢米御藏へ納るを途中追落シ、依之領主より取手を向ケられし所中ゝ手に合すゝをつきしに大せいを取ツてなけ付ケミな〳〵逃去ッたり、其後大瀧へ湯治に行きしおりから湯壺にて殺んと鑓にても我を向ふの山へ連レ行へしと被申ハ故手を引てやふ〳〵つれ行しに、途中にて是を見て笑ひし者の子孫今にかたわの者とも出來申ハよし、さてそれより山へ登り穴をほらせ其中に入て切腹して相果し其まゝにそこへ埋し所其年一人の老人來りて藥を賣何病氣にも奇妙也、ミな〳〵此藥を求手箱押入レなとへ入レ置しに其所より火出て御屋舗町中不殘燒拂ひ、又明年やふ〳〵普請出來上りしに又ゝ出火にて不殘燒(マヽ)つたり、其よく年此度ハ右之山より火玉出て御屋舗へ飛、是より又ゝ町家中不殘燒拂ひしに三度とも右三哲をいたわりし六人之者の家ハ火の中に飛ゝ殘り申ハ、領主にも是まつたく三哲のたゝりならんと神に崇メ三哲山大明神と祭り玉ふ、是よりして何の事も無シ、毎年六月十八日御祭りにて參詣多く有之ハ由、百七八十年以前の事也とかや　三哲と申人ハ南部九ノ戸左近監殿ノ御内にて千葉上總之助

津輕より秋田へ歸る

と申いて九ノ戸一組ノ落人にて、十二所へ被参三哲と申て醫道を被致居いよし　又十二所より半道斗三哲山より南ノ方に別所村と申有之、殊之外山家にして家數五六十軒も有之い、此村ノ者九ノ戸の落人にして一村言葉も別にして農業山かせきに出い節弁當を入レい袋を武者袋と申い、其外色ニ別なるとば有之いよし、是まつたく九ノ戸の落人の印にて何事も別なるゆへに別所村と唱へいよし、是より日ニ入湯致シ居り申い、此節ハ一向湯治人も無之、阿二ノ荒瀬川村より夫婦に子供壹人三人にて隣座敷に居り申いて心安く致シ申い、五十ノ目より七人連にて表座舗に居り申い、乍去いつれも咄シ相手にも相成不申、十二所より御内町ノ乗日歸りに御出被成いて是ハミな〳〵御尋被成いて色ニ御物語りなそいたし申い、然ル所十七日大館原田三四郎殿御同道にて　御出役黒澤慶助様と申御方御小人衆二人御出被成、奥坐舗に御逗留被成、早速御見廻に罷出申い所日ニ參り申いて御地走に相成、御咄シいたし居り申い、三四郎殿義ハ大館八朔頃より興行に相成申いニ付、五六日逗留ニて廿八日大館へ歸られ申い、其夕かた扇田半兵衛殿方ゟ約取り子供三人參り申いて奥坐舗にて呑明シ申い、廿九日黒澤様并御小人衆三人共扇田へ御出被成申い、途中迄御見送り致し、半兵衛殿方子供もミな〳〵歸り申い

○てんぼうもなおるはかりそ正宗の身をうたせたる瀧のゆかげん

○こゝらから秋やたつらん瀧のもと
夜中川端へ出てすゝミしに所ニに火を焚て人の居ル様子なれハ、何やらんと行て見れハともしにさこのよるをまちて釣するなりけれは

○妻こわぬなれもともしによるの魚しかとも見へてひく釣の絲

八月四日大瀧出立ツ致シ扇田半兵衛殿方へ參り申いか所早速其夜御目明シ清水儀右衛門殿世話にて壽仙寺と申御寺へ肝煎山脇平右衛門殿其外七八人楊弓有之、其座にて口見いたし五日之間儀右衛門殿弟勘助殿宅にてよせ興行、尤儀右衛門殿ハ芝居免許願に五日早朝出立致シ久保田へ被參いニ付、世話人佐助殿平助殿半兵衛殿息子にて又五郎殿ニ三人にてセ話致シ、大入ニ付一はん日延致シ申い、今二三夜も興行可致被申い得共最早朝晩ハ少ニ秋風も立チ申い間加護山より太良へ參り可申、半兵衛娘お竹母同道にて是も加護山へ被參いよしにいか間一所に可參、尤未晝中ハ殘暑厳しくいか間船を相待チ申い、八日半兵衛殿家内大館へ芝居見物に被參いに付我等も參りい様に被申いか得共未寄興行中にいか間妻斗遣シ申い、役者ハ津輕より參り申いト申とに御坐いか、此節日ニ夕立ふりつゝき申いて三日頃より興行之所雨天にてやふ〳〵翁渡シ斗いたし、七日より初日に相成申い、當年ハ殊之外作合もよろしくいか二付所ニにて免許相願芝居興行致シいか由に御座いか、關東ハいかゝにいや、秋田津輕なとハ世の中よろしく藝人なとも大きに繁昌致シ申い、南部ハ八月十五日八幡町八幡宮御祭禮にて殊之外賑わしく、よ世なとも繁昌いたしいか得共、此節公儀より八ノ戸へ唐船かための御陣屋被仰付いて町方在ニ村ニとも度ニの御用金被仰付さわかしく、其上旅人逗留六ツケ敷芝居なとも出來不申いか由、評判よろしく無之いか間盛岡迄扇田より三十二三里有之、三日路にいへとも參り可申存所見合セ申い、九日、今日二百十日にいか得共殊之外天氣よろしく、半兵衛殿同道にて隣家へ鶏の御地(走)にようれ申て終日地走に相成いか所、日暮に相成主シハいつかたへ被參いや知れ不申、から徳利は

かり残り申ゝ間

○あるしなき庵のぬしやから徳利　と申ゝ得は半兵衛殿

二百十日のあれにおそれて　此跡の第三を致シ可申被申ゝ間

○御けん見に米もぬかずく豊の秋　といたし申ゝ

(俤)

十三日扇田出立いたし、尤半兵衛殿娘お竹内蕊并小糸加護山に御祭禮有之ゝて参りゝに付同道致シ、源兵衛殿と申仁是も親類有之悴を連レ被参ゝ、今壹人是は加護山之者にて扇田へ娘をかたつけゝ所病氣にて参り居ゝ、都合八人にて板澤と申ゝ處に能代迄下りゝ船も有之ゝ得共板澤迄二里餘も有之、其上小繋へ上り申ゝて又ゝ加護山迄壹リも有之ゝ間小舟相頼参り申ゝ、今日殊之外朝霧深く川端までミな〳〵送りに参りゝときこひをいたすとて

○別れ路の跡うちかくす今朝の霧

それより船路壹里餘も参りゝ所また五ツ過と思ひしに早四ツ頃にもなりゝへゝ

○たちこめし霧の間に〳〵見渡セハ登る朝日にくたる川舟

○まねかるゝこゝちせられてふりかへる跡なつかしき扇田の里

船中にて弁當なとひらき酒くミかわし、業しミなから下り申ゝ、加護山まて船路九里餘有之、板澤大館の舟場より壹リ鹿の巣、所ゝ風景よろしく、七倉天神の御島居を右に見て小繋迄参り、此所にて帳面付ケさセ八ツ半頃加護山へ附キ申ゝて御香所小島東之丞殿方へ落付キ申ゝ、早速御臺所ゟ御見廻申上ゝ所船山様御詰合にて支配人田口市十郎殿本香重役　與五郎殿御土産に扇子を持参いたしゝとて

○残る暑やまた捨られぬ扇橋　上書いたし呈上致シ申ゝ

十四日十五日山神御祭禮にて若ゝ衆地芝居いたしゝとて、能代清右衛門殿方之富吉と申者ふり附ケに被頼参り居申ゝ而、御祭禮中ハさわかしく断も出來不申ゝ故船山様より御差圖にて田口殿より手紙持参致シ、太良山へ参り申ゝ

○御祭りの振わひときく地芝居ハ神のこゝろにかのふ加護山

太良迄山道六里餘有之、壹里半餘大澤と申所へ出、それより半道斗り藤琴村へ舟渡一ツ越シ出申ゝ、御目明シ宇右衛門殿と申仁尋申ゝ所、村岡佐吉殿と申仁我等二十年以前久保田にて知ル人にて留られ申ゝ、二三日も逗留致シゝ様に被申ゝ得共太良をいそきゝ間一夜御坐舗いたし、十五日太良へ参り申ゝ、是より道殊之外難澁にて一ツ川を七八ケ所越へ申ゝ、藤琴より川筋二ツに別れ、一ト筋ハ太良より流れ出一ト筋ハ粕毛川と申ゝて粕毛村の方より流れ出申ゝ、此節鮎の魚澤山にとれ申ゝ、尤太良ゟ流れ出ゝ川ハ黒石川と申ゝ由、此川ハ金の氣流れ出申ゝ間魚一向住不申ゝと申とにて、藤琴より下粕毛川にてとれ申ゝ

古哥に

鮎の魚うら山しくそ見へにけり一年有りて二年なければ

鮎の魚ハ壹年切りの魚にて、子をすらんと瀬に登りてとられ、後ハさひ鮎と成て死スと申となれは

○二年なきものとしきける鮎の魚只一トと瀬に身をはたす也

道ゝ殊之外風景よろしく一ノ渡りと申村へ出、それより金澤と申村有之、此所まて太良より加護山へ金を積送り
ゐ通船藤琴村ゟ日毎に參りゐ得共、此先ハ石高く船通ひ不申ゐ、此所に太良よりなまりを脊負ひ又ハ牛馬に附ケ
て參り入置申ゐ藏有之、それより寒澤と申所へ出申ゐ、其手前に橋有之、此橋へかゝれハ半道程之まハりにて其
川下を歩行わたりいたし申ゐ、それより一里斗登り坂にて太良へ出申ゐ、御臺所へ參り支配人木澤理左衛門殿差
圖にて文吉と申方へ落附キ申ゐ、加藤名右衛門殿と申御手代久保田の仁にて古しへより知る人にて殊之外世話致
被呉申ゐ、其夜十五夜月見にて宿文吉殿向ひの山の端ゟ月の出たるを見て

○また一ツ重る秋や月今宵遠き雲井を越かたの空

御臺所にて御坐敷致シゐ所、かの鮎毛川よりとれゐ鮎を藤琴より送られゐとて御地走に相成けれは

○望月にむかへる駒の鮎毛川水にひかれてはねる若鮎

○若鮎のうつりに送る月の哥

十六日十七日三晩御坐舗いたし、十八日太良出立致シ申ゐ、太良より半道奥に矢櫃と申御山有之、支配人成田新
一郎殿と申ゐ由、矢櫃へも參りゐ様ニ被申ゐ得共藤琴より加護山を急キゐ間參り不申、此成田新（特）一郎殿と申ハ惣
山の支配人頭にて、先祖ハ成田儀兵衛殿と申て銅山にハ勤功有之ゐ家柄にて家形様より十人扶被下置ゐよし、太
良より山道にて弘前迄九里程有之ゐよし、三里程參りゐ得は津輕と秋田の境へ出申ゐと申ゝ也、金澤まて二里參

津輕より秋田へ歸る

り申ゝ所、支配人木澤理左衛門殿加護山へ御用にて被参ゝ而藤琴より船にて歸られ申ゝ、其船にて藤琴迄参り申ゝ、道ゝ風景よろしく

○矢櫃よりはやき太良の下り舟弓手も女手も白金の山

其夕かた藤琴へ着船致シ、村岡佐吉殿方へ参り申ゝ

○まつ風のしらへやこゝに落し來ていとひく川の藤琴の里

佐吉殿方にて一晩御座敷いたし、乗而歸りにハ鮎を地走せんと約速いたしゝ所、十六日大雨にて川水殊之外出、鮎をとりゝとめと申を流しゝて一向に鮎とれ不申ゝゆへ、大澤と申所ゟ鶏をとりよせ地走に相成ゝ得は

○やくそくの鮎ハ出水に流されて鳥かわりたる今日の御地走

藤琴に角力有之、尤此近邊の者供あつまり角力にてしんけんのつかミくらにておもしろく、佐吉殿同道にて見物いたし

○川柳村角力土俵てすくにセき請普

廿一日、藤琴より加護山へなまりを積送りゝ船に便舟相頼ひる頃参り申ゝ、鮎を御土産に持参可致いろ〳〵せんさく致シゝ得共一向無、やふ〳〵四ツ斗さかし出し呉られゝ間是を船山様へ差上るとて

○二ツ三ツ四手にかゝる鮎の魚いさゝかなれと君へ呈上

其夜御臺所にて御坐敷いたし、廿二日廿三日御座舗、廿四日加護山出立、未扇田お竹親子逗留致シ居申ゝ、半兵

津輕より秋田へ歸る

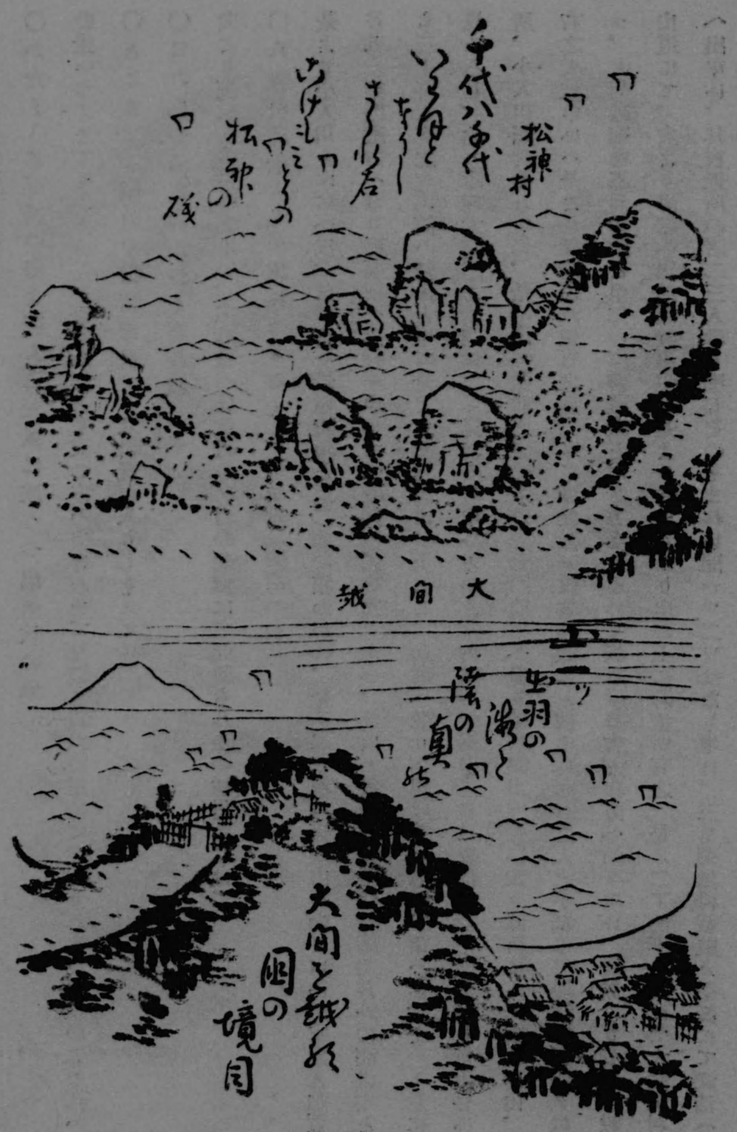
衛殿へ禮状差遣シいとまこひいたし別レ申ゐ、尤御山ゟ能代へ銅を積送りゐ船に便舟相頼、荷揚場より切石ノ渡シを越、飛根鶴形此所に船改番所有之、しはらく船を附銅并便舟荷物等相改八ツ半頃能代木山方御役所の下タへ着船いたし申ゐ、此所にも御番所有之、柳町八郎兵衛殿方へ參り申ゐ所八郎兵衛殿母病死致され五十ケ日に付、法事を兼要用有之ゐて久保田へ被參留守にて、與七殿夫婦留守致シ居申ゐ、然ル所酒田ゟ馬琴門人馬吟宗山門人にて新笑二人參り居り申ゐ、其夜酒盛いたし、廿七日迄逗留いたし大淵彦兵衛様方へ御見廻申ゐ、廿八日八森へ參り可申存ゐ所、今日天社日にて庄屋竹内庄右衛門様大淵彦兵衛様其外町役人衆七八人料理屋嘉兵衛殿へ被參御坐舗致シ申ゐ、尤社日にハ高き家に登り西へ向ひ酒盛いたしゐ得は仕合よろしく相成ゐと申とにて、ミな〳〵今日料嘉二階ハ西向キにゐ間是へ被參ゐ與申と故

○ありかたき御製をこゝに天社日賑ふ民ものぼる高き家

廿九日出立ツ、能代ゟ渡シを越向ひ能代、夫ゟ駒田村ゟ八森村目明シ佐左衛門殿方へ參り申ゐ、其夜近所衆六七人被參坐舗いたし、晦日銀山へ參り可申存ゐ所丸喜と申仁、是ハ松前にて富家之息子にゐ所道樂にて五六年以前より此所へ參り被居ゐ、雜魚とりにさそわれ參り申ゐて逗留いたし、朔日出立ツ、椿村と申所へ出申ゐ所海邊にて殊之外風景よろしく、此間濱田と申村有之夫ゟ椿村

○時ならて椿の磯による波の岩にくたけて花とちりける

是より藻浦と申所へ出申ゐ、かた〳〵ハ海にてかた〳〵ハ一面田甫にてゐ間



津輕より秋田へ歸る

○かた〳〵は藻浦の海よ岡もまた風に波うつ出來秋の米

此邊いつくまてもかた〳〵ハ海邊なれとも東の方ハ山きわまて見渡されぬ(ママ)田甫にて、おりしも出來秋のとなれハ

○とこまても稻の中行秋田哉　米の實の入りしをミて

○日の恩や米もぬかつく豐の秋

夫より瀨沼と申村へ出申ゐ、尤八森ハ此近村八ケ村の親鄕にて此所も八森の枝村なれは

○八森の澤邊〳〵を流れ來てこゝに落チ合瀨沼の村

是より小入川と申村へ出、此所より岩館銀山と道二筋に相わかれ、是ゟ二丁程八盛銀山へ參り申ゐ、支配人加賀谷五左衞門殿方へ參り御臺所へ落付キ申ゐて二夜御座舖いたし申ゐ、此所へ登りゐ得は前ハ海にて南ハ能代を一ト目に(商)も三十軒も有之、尤舖ハ燒山と申て是より三里餘山の上にて、此所へ賣ひ致シ此所に入夫致シゐ由、見おろし、北ハ津輕大間越より深浦まて見おろし申ゐと申とニ御座ゐ、九月三日八森佐左衞門殿方歸り可申存ゐ所、小入川間兵衞と申仁、是ハ津輕弘前之者にて佐左衞門殿方へ參り被居銀山へ參り被申ゐ樣にと被申ゐ間右之人之手紙にて岩館御番所ヲ越右之人被申ゐハ是より深浦迄八里有之ゐ、序に見物致シ(ヘ)シ、大間越菊地嘉兵衞殿と申仁の悴柳藏殿と申者方參り申ゐて坂本屋重吉と申方へ泊り申ゐ、岩館より壹里半程山道にて、夫より海端へ出砂道壹里半、是より峠にかゝり山の上に御番所有之、是ゟ二丁餘下り坂にて大間越村へ出申ゐ、其夜近所の者二三人參り咄しをのそまれゐ間一ツ二ツはなし申ゐ、三日菊地柳藏殿ゟ手紙にて深浦へ

津輕より秋田へ歸る

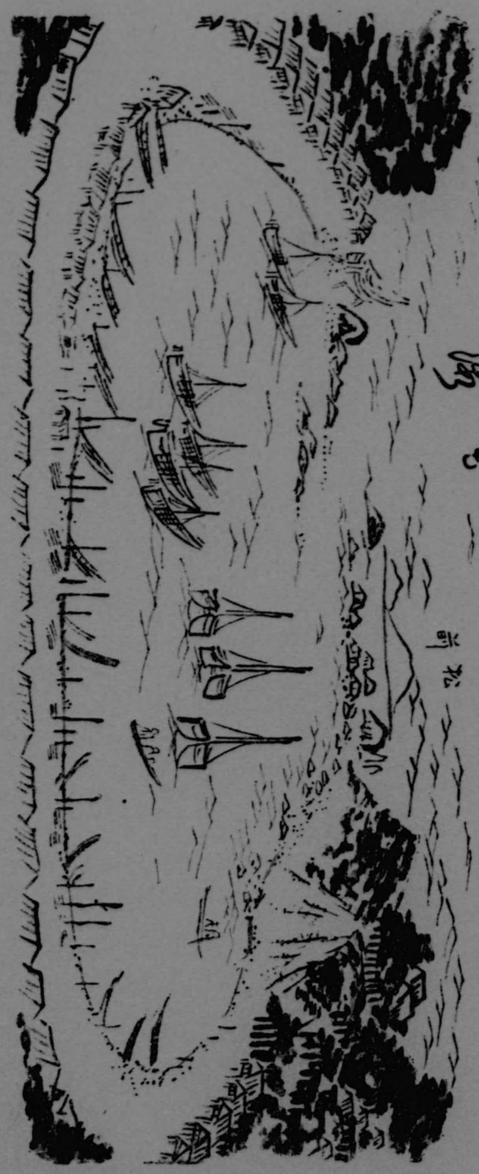
参り申ゝ、黒崎村より松神森山と申峠を越シ久田濱中岩崎と申村、家數百四五十有之、是より又〻山道にて一向人家も無之、岩崎迄大間越ゟ三里、岩崎ゟ二里深浦仙臺屋伊右衛門殿と申方へ参りゝ所少〻取込有之、伊右衛門差圖にて加賀屋と申宿屋へ泊り申ゝ、四日大あれにて二階ハ西向キにて一向戸も明ケられ不申、ひる頃より少〻雨やミ申ゝ、然ル處宿の主被申ゝハ、定而よせにても坐舗にても被致ゝつもりにて御出に可有之ゝ得共、當所一向藝人ハ逗留も出來不申、先達而月元と申祭文よミ参りゝ所隣家にて二夜坐敷いたしゝ所三日目に早〻出立ゝ樣被仰付、坐敷代もあつめかねゝしきにて、出立致させゝつもりにて一夜かくし置、やふ〳〵に出立致させゝ、其元樣にハ兼而承り及ゝ御仁ゆへ是非〳〵二夜ゟ申度、旦那衆にも聞かせ申度いろ〳〵昨夜ゟ役人衆へ願ひ申ゝ所かなひ不申、雨天にても今日中出立爲致可申と申附られゝ、殘念なから御出立願ひ申ゝと申と故眞事にあきれて腹もたゝれす、間兵衛にすゝめられうか〳〵はまりし深浦の今更くやんてかへらぬと、さりなから雨天にてハ出立出來兼やふ〳〵と一夜をあかし、すこ〳〵歸るもわれなからおかしさに

○たまされてはまる深浦大間越われハふかくの大間ぬけ也

と人の笑わんとも口おしくて

○山〳〵のあけびにさへも笑われんロもひらかて歸る秋田路

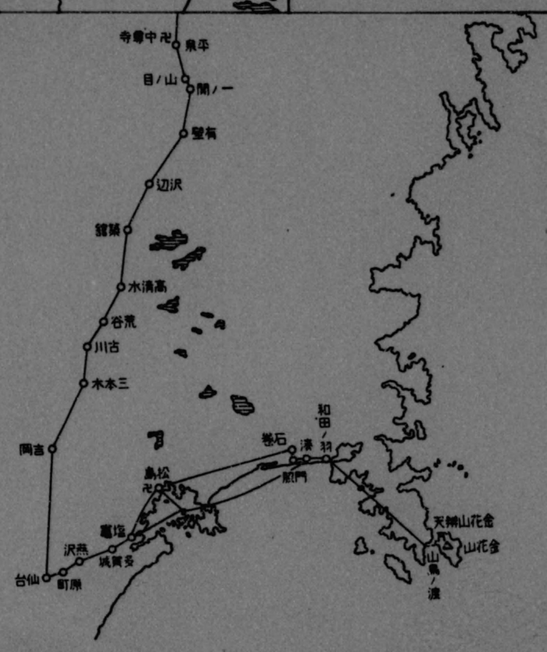
其夜の內に馬を申附ケ、早〻深浦を立出申ゝ



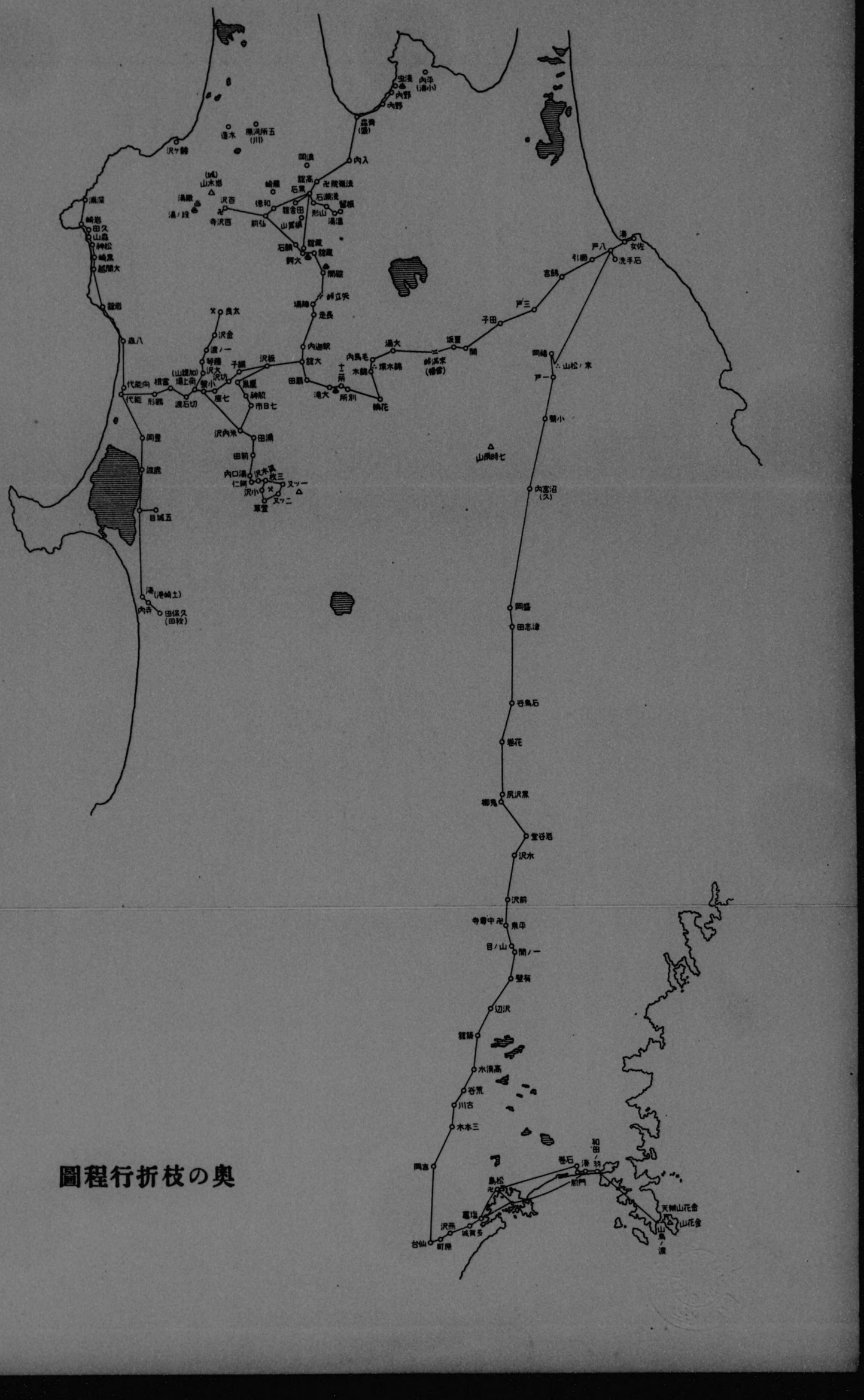
津輕より秋田へ歸る

附錄

奥の枝折行程圖



寺尊中卍
泉平
目ノ山
開ノ一
壁有
辺沢
舘葉
水清高
谷荒
川古
木本三
岡吉
台仙
町原
沢燕
城賀多
竈塩
島松
卍
巻石
湊
和田ノ羽
熊門
天神山花金
山花金
山鳥ノ渡


沢ケ鼻
遠木
原河所五(川)
(城)山木岩
湯殿
湯ノ段
沢百
寺沢百
嶺和
前沢
嶺舎田
山貫
石鎚
石黒
石鎚滝
形山
留板
湯瀧
内入
岡浪
龍高
花院福法
内野
内平(湯小)
盛岡(盛)
湯深
崎岩
田久
山森
神松
嶺黒
越閣大
鎧岩
森八
良太
沢金
渡ノー
琴龍
沢太
沢切
(山堤加)
場上南
樂小
代能向
代能
形鶴
根宮
渡石切
沢板
子鍋
龍大
内遊駅
場崎
走長
峠立矢
龍蔵
龍蔵
開久
田原
滝大
所別
十二所
内鳥毛
木鍋
塚木鍋
峠滝来(橋雷)
湯大
坂堂
間
子田
戸三
吉飼
戸八
引前
洗手石
湯
女佐
岡綿
戸ー
山松ノ来
磐小
七山頭時
内宮沼(久)
岡盛
田志津
谷鳥石
巻花
尻沢黒
郷鬼
堂谷沼
沢水
沢前
寺身中
鬼平
目ノ山
閣ノー
整有
辺沢
龍神
水清高
谷荒
川古
木本三
岡吉
巻石
湯時
和田ノ
島松
新門
天神山花舎
山花舎
山鳥ノ渡
臺塩
沢燕
城貫多
台仙
町岸
田沢
(田秋)
内舘
(湯崎土)
滝
目城五
旗鹿
豊岡
代能
形鶴
根宮
渡石切
樂小
場上南
(山堤加)
沢切
沢太
琴龍
渡ノー
沢金
良太
森八
鎧岩
越閣大
嶺黒
神松
山森
田久
湯深
湯ノ段
湯殿
沢百
寺沢百
嶺和
前沢
嶺舎田
山貫
石鎚
龍蔵
龍蔵
開久
峠立矢
場崎
走長
内遊駅
沢板
子鍋
龍大

奥のしをり日程表

（天保十二年）

十月二十八日　仙臺（御城下）に到著。
大町五町目（丁）御目明シ鈴木忠吉殿方へ參向。糠藏町峰岸善左衛門樣御長屋、五樂方へ落付く。

十月二十九日　十人組、鈴木屋龜吉殿八百善源六殿ト寄興行ニツキ相談。

十一月三日　新傳馬町後藤屋。廿日間、賣切興行。願主、倡濃屋善左衛門。小竹屋長兵衛。眞壁屋新藏。三日より興行。五日目に家形樣御法事にて鳴物停止となり、二晩休ミ。又大雪にて一晩休ミ

十一月廿五日　千秋樂。

十一月廿七日　二日町二番町（丁）、十五日之間興行。

十二月十二日　千秋樂。

十二月十二日　石町。十日之間興行。

十二月廿二日　千秋樂。
越年。

（天保十三年）

正月二日　八百善源六方ニて噺始。

二月二日　それより日々所々にて御坐敷致ス。
新傳（馬）町米屋方。龜吉殿、黑玉圓直吉殿世話にて、十五日之間坐鋪。

二月十二日　八百善源六殿宅、景物茶番之儘。
國分町伊勢屋半右衛門（書林掌善坊）。一朝、奥村玄朝（醫者）。文叟（俳人）。樵堂。治調。忠吉殿（五調）。龜吉殿（萬龜庵）。源六殿（古久升）。＝俳諧をよくす。右之連名、花咲連。と命名。藤橋＝源六殿宅。木町吉岡にて俳諧連中出會。

二月二十一日　肴町。南町。所々にて座舖。
鹽竈より松しま、金花山見物。連中、掌善坊。古久升。其外二三人。

二月二十二日　船にて松島見物。
石の卷に上りその夜、門の脇に一宿。

二月二十三日　湊、和田ノ羽。山鳥の渡へ出、金花山に渡る

二月二十三日（四）　其夜石の卷へ歸り一宿。

二月二十三日　高木へ泊る。

二月二十四日(五)　御城下へ歸る。
二月二十六日　名殘りの會。
二月二十七日　出立ト極メ大雪にて延引。
二月二十九日　仙臺出立。七木田まで連中見送り、餞別之狂哥、俳諧をもらひて別る。
扇蝶。馬好。四人連にてなり。
二月朔日(三)　吉岡著。御目明、忠吉殿より奥筋〆リ役中衆へ廻文ニテ、上州屋順吉殿方へ一泊。橋吉殿留守にて逢ズ。
三月二日　三本木より古川。〆リ役太市殿方へ。
三月三日　太市殿世話にて、十日町若イ衆立元。五日之間寄興行。二日ひのべ致し七日間興行す。三日町鑓兵衛殿宅、二晩座舗。
三月十日　古川出立。
荒谷。高清水。築館。澤邊。有壁を經て一ノ關へ。
伊勢半殿手紙にて千葉新助殿（狂歌師、掌善坊友明）を尋ぬ留守にて逢ず。
山ノ目。〆リ役藤吉殿方を尋ね。藤吉殿の世話にて三晩ざしき。
三月十四日　山ノ目出立。前澤。水澤を經て夕方水澤の三本木著。〆リ役善助殿方へ落付。善助殿世話にて五日之寄興行。
三月十七日　水澤出立。岩谷堂へ。〆リ役可平殿方へ落付。御館へ召さる。清兵衛殿と會ふ。
可平殿世話にて五日之間よせ興行。それより坐舗四五日。
四月朔日　岩谷堂、出立。鬼柳へ。〆リ役關東元吉殿方へ一宿。
四月二日　黒澤尻より花卷を經て石鳥谷に赴き。石鳥谷に一泊。
四月三日　石鳥谷出立。
晝頃、盛岡八幡町へ著。御目明、高橋和吉殿へ參る。和吉殿、源助殿差圖にて、左官鐵之助殿方へ落付。
四月四日　生姜町、神明地内土弓場にて十五日之間興行。
藝者中より花札。役者中より花札。八幡町若イ衆中より水引。御免茶屋中よりうしろ幕等を貰ふ。大入に付日延願するも差合ありて出來ず、十五日切にて仕舞ふ。
文字八尾殿世話にて日々坐舗をして逗留。江戸にて弟子たりし虎橋(宮)の妹たづね來る。
五月八日　盛岡出立。夕方、沼久内著。廣田屋（宿屋）へ泊る。岩谷堂清兵衛殿の手紙にて、近江屋駒吉殿をたづぬ。
〆リ役喜兵衛殿。世話にて三晩、御座舗。
五月十一日　一ノ戸。泊る。
五月十二日　福岡より。末の松山を越え。八ノ戸へ向ふ。
五月十三日　八ノ戸著。
馬喰町曲師屋林兵衛殿方へ、盛岡灯燈屋弁吉殿の手紙にて參る。
二晩、林兵衛殿方へ泊る。
五月十五日　八ノ戸。荒町〆リ役清兵衛殿方へ引越。
林兵衛殿妹聟、河内與兵衛殿の世話、坐舗。
市兵衛殿西町屋（富家）、坐舗。
日附不詳　逗留中湊へ赴く。與兵衛殿、市兵衛殿、惣助殿同道にて大谷屋（遊女屋）に泊る。
〃　佐女へ赴く。
〃　石手洗へ赴く。林兵衛殿、松太夫殿、與兵衛殿、其外十五人。川原へかじかおしに參り、名主方にて大さわぎ致す。
〃　湊――佐女へ。川口屋と申へ參り、今方へ泊る。
五月二十七日　八ノ戸。出立。櫛引村。苫森村。鈿吉村より三ノ戸へ。湖東屋利八殿（宿屋）へ泊る。
御代官役人、佐藤佐仲殿方にて三晩ざしき。
大雨にて出立成兼。
六月朔日　三ノ戸出立。
田子村より。關村へ。
關村に泊る。
六月二日　夏坂より、雷幡峠(來滿峠)を越え、大湯著。一宿。
六月三日　毛馬内。山本九市郎樣方へ。鐵之助方より手紙にて參る。
疊屋新之亟殿世話にて、木村屋喜兵衛殿（宿屋）へ落付、御坐舗。
六月七日　花輪。盛岡宮兩助樣御手紙にて、東屋新助殿方へ赴く。專正寺にて三晩御座敷。
この節日々夕立降りつづく。
六月十一日　花輪出立。銅山越えをして神田村に出で更に十二所を經て大瀧へ著。
此處にて湯治す。
六月十三日　扇田へ向ひ、松右衛門殿方へ。毛馬内より手紙にて行く。留守。川を越し、大館に到る。
大館。問屋場向ふ、越前屋（宿屋）へ泊る。
御足輕、目明し須藤半八殿を尋ヌ。
久保田（秋田）へ行き留守にて不逢。
六月十四日　綴子より坊澤。それより小繋へ出づ。

舊知佐兵衛、久振リニテ逢ふ。
荷上場村へ參り、雨にて泊る。

六月十五日　切石の渡より飛根村(ヤ)、鶴形村を經て能代へ著
盛岡源助殿より手紙にてノリ役大和屋仕平殿
方へ落付。
この日は御祭禮にて見物多く賑し。

六月十六日　玉屋柳勢の弟子、玉屋いろは。三味線ひき。
滯在し居りて見舞に參る。
大淵彦兵衛殿世話にて、木山方役人、町役人
衆など坐舗取待つ。
仕平殿世話にて柳町善助殿宅、寄興行。

七月朔日　七夕祭。燈籠こしらへ、五日まで子供等が持
ち廻る。

七月六日　夜、ねむたなかし。夜明まで踊りさわぐ。

七月八日　湊よりノリ役久四郎殿迎ひに參る。

七月十日　能代、出立。豐岡。鹿渡より一ト(日)市に出で一
泊。

七月十一日　一ト市より湊（現、土崎港）へ。新柳町、町
方目明、富次郎殿方へ落付。
後藤彦市殿世話にて、日々坐舗出來致し八月
迄遊び居。

日付不詳　問屋船木、舛木、根布屋にて坐舗。

八月五日　酒田町表町角、見性寺に、母の菩提を弔ふ。
寺内より久保田（秋田）御城下へ。
大町三丁目、古手屋。伊勢屋九郎衛門殿方へ
落付。是より日々坐舗。

日付不詳　蛇野、若木惣藏殿。（御足輕小頭）を訪ふ。
町方役人。龜ノ町、丸万庄兵衛殿、同町高橋
清吉殿と寄せ欠合致す。
大町貳丁目三丁目の若衆、九郎右衛門殿息義
助。三丁目いせや十右衛門殿、貳丁目山崎屋
万藏殿、噺好きにてひゐきに成。又、二丁目
古手や、いせ幸。名染にて度々よばれる。
銅山御役人、能代吟味役、片岡慶助樣、昔名
染。若旦那郡藏樣、御ひゐきに成、度度御出
會申上。大番組、鈴木仁兵衛樣。度度御出合。
湊へ歸る。九月迄。富次郎方に滯在。
富次郎。筆屋嘉七。勘右衛門。日々船をかり
魚釣など致す。

九月一日　久保田（秋田）、龜ノ町大工喜兵衛の坐舗を借
り引越す。

九月二日　世話人、田中勇助。丸万庄兵衛。大工、長四
郎。桶屋、利八。世話にて寄興行。
同町、目明し、栗田屋嘉兵衛。四十軒堀、龜

吉。米町、惣太殿へ見舞いたす。
寄大入にて卅五日興行。

日付不詳　湊へ行。番頭半次殿宅へ。
岡次殿。大坂辰殿。菓子安五郎殿。富次郎殿
の世話にて廿日間寄興行。

十月三日　出火。柳町木戸迄燒け、町數三町斗、家數三
百軒燒く。興行延引致すべきところ御上より
御免許相濟居押而興行。
英蝶來る。五樂來る。

十一月十日　久保田。いせ屋へ行。

日付不詳　御町奉行、加藤五左衛門樣。その他、御内町
へ、年わすれ御坐舗。いせ屋悴、義助殿江戸
へ買出しに行き、留守中、九郎右衛門殿と酒呑
樂しゝ、目出度越年。

（天保十四年）

正月二日　同家にて噺始。

日付不詳　義助殿、江戸、堺町、成田屋市右衛門方、并
門人都都一坊扇歌入船扇藏方へ手紙頼ミ遣
し、二月歸國之節江戸より返事有。
肴町料理屋お屋部。豐嶋町竹半方にて度々坐
舗。

正月十六日　鎌ヶ祭。

吉田藤五郎樣、梅津樣其外二三軒頼まる。
中山政吉樣。御物頭にて昔より名染なれば、
度々參る。

二月朔日　配當屋にて、五樂を入れ、二十五日之間興行。

日付不詳　能代。八郎兵衛方より寄欠合來り、久保田出
立致す。

二月二十六日　久保田。湊。一ト市を經て五城目に來る。川
端松五郎殿同道。
松五郎殿の兄、かじや喜兵衛殿方にて五日興
行。

三月三日（？）　能代。丸万八郎兵衛殿方へ參る。仕平殿、そ
の外目明シ衆世話にて、柳町善助殿宅にて十
五日之間興行。
寄仕舞ニナリ病氣と成。八郎兵衛殿の世話に
なる。

三月廿日　五樂夫婦を湊へ立たせ遣る。

日付不詳　病氣全快。大淵彦兵衛樣方へ津輕片谷と申方
の番頭、三國屋鎌吉殿と申人被參、近付ニ
成坐舗いたす。津輕へ參る樣申さる。

四月六日　能代、出立。加護山へ。

日付不詳　加護山より大館へ參る。
大町、越前屋吉郎右衛門方に一宿いたし、津

輕へ參る。

（天保十四年）

四月六日　秋田なる能代。丸万八郎兵衛方出立。鵜形。飛根村。切石ノ渡を越。荷揚場。加護山へ參る。

支配人、田口市十郎殿方へ久保田片岡郡藏様より御紙面にて參る。

四月七日　小澤より、大久保正太様御出成る。久保田大町弐丁目山崎屋萬藏殿方より御手紙持參、早速お目にかゝる。

四月八日　大久保様御出立致すところ、雨天にて御逗留。御役家にて一日御物語いたす。

四月九日　天氣。御出立、お見廻。

（七・八日）　夜、又々御役家へ參る。

小繁、天神之御祭禮。雨天にて不參。

扇田よりお竹と云女、藝者、母と二人にて來る。

四月十日　能代より大淵森兵衛様、竹内庄右衛門様四人連にて御出に成る。津輕へ御同道致す約束にて御山内見物ながら御立寄。

吾らは今一日逗留致すべく役人中より被申、一日延引。

四月十一日　加護山、出立。

船にて小繁迄參る。物忘れして小繁問屋場より取りに遣る。

其夜、今泉まで行。問屋場之隣家、茂三郎方へ泊る。

四月十二日　大館。越前屋へ泊る。

四月十三日　大館。出立。釋迦内。長走。陣場。矢立峠を越え碇ヶ關御番所へ出る。岸儀兵衛（宿屋）へ泊る。

津輕黒石ノ在尾の上へと云所の藤八と云者の妹、おはつ。御番所御改六ッヶ敷、手前妻之召遣にして大館より同道。關にて別る。

四月十四日　關より弘前へ。鯖石にて中飯いたす。

壹九ッ半頃、弘前着。

本町五丁目、三浦屋兵八（宿屋）方へ泊る。

四月十五日　三國屋、通ひ番頭、三國屋鎌吉をたづね純走に成。同道にて三國屋隱居所へ參る。

能代、八郎兵衛より木村勝左衛門様へ手紙持參。御町目附。御役柄故手紙計御屆。和徳町、木村男次郎様へも手紙持參いたす。

四月十六日　大淵様、竹内様同道にて、三鏡様先立にて町中見物。

住吉明神に參詣。

親方町、三榮堂句佛を訪ふ。本名竹谷慶輔、印版師。狂名、外ヶ濱風。淺草庵門人。行脚の句帳に記す。

それより日々、御城下見物。

四月十七日　三鏡様同道、高岡に行く。百澤に行く。

四月十八日　弘前。出立。

大淵様、竹内様。能代へ御歸宅。

三榮堂先生、紙面にて黒石。上町、松井半六殿方へ參る。

御目明し、松木松右衛門殿。才藏善左衛門殿、御世話にて、山形町愛宕山御別當地藏院にて持寄いたす。

四月二十二日　この日まで持寄いたす。弘前、御家老様御病死に付、鳴物停止。

板留へ湯治に參る。

才川勘二郎殿方へ參る。日々所々見物。

四月二十五日　杉松殿被參、酒肴の土產に預る。節句前にて、杉松殿と相談、一廻り湯治。

五月五日　黒石より、迎へに參り、板留を出立。

如萊先生連中同道にて途中福民村に競馬の見物いたす。

五月六日　如萊先生連中同道にて、長崎と云川原へかしかと魚取りに行。

歸途、福民野邊、如萊殿畑内に、はせを翁百五十年忌に建た碑見物。

五月八日　黒石より二里半餘。南部堺。法峠、如萊先生夫婦同道法嶺寺に參詣。

五月十日　愛宕様地藏院へ御家老唐午儀右衛門様御出。一雅様同道にて參る。

唐午様、三浦様、江戸御詰合にて江戸の咄しを致す。

五月十一日　紫雲山來光寺にて三四日、持寄いたす。

五月十七日　黒石出立。

青盛へ參る。如萊先生の手紙にて安方町、鳴海由藏殿方へ參る。

由藏殿宅にて、問屋衆、その外皆々被參、二三日御座舖。

五月十八日　善知鳥の宮へ參詣。

五月二十日　大町通りより、驛町つゞみの橋を渡。野内と云ふまで行。

大町中見物。

其夕、藝師、見立殿と同道、大町の長野屋へ參る。

五月廿一二日　雨日、由蔵殿宅にて持寄り。
五月二十三日　米町、岡問屋と云宿屋にて米屋吉蔵殿方へ引越す。
大町、黒田與之吉殿宅にて二十五日迄、持寄り致す。
五月二十六日　鹽町、酒田屋へ參る。
五月二十七日　黒田にて持寄り致す。
五月二十八日　問屋岩城屋へ參る。
五月二十九日　黒田にていとまごひ。
其夜、岩城川にていとまごひ。
五月晦日　青盛、出立。
黒石、如萊殿方へ參る。二三日逗留。
六月五日　黒石、出立。
藏館、大鰐川原子の湯にしばらく湯治。田中重次郎方に泊る。

（天保十四年）
六月十三日　津輕、錠ケ關（渡）より釋迦内村へ。
同日、大館迄參る。
大町、越前屋吉郎右衛門（宿屋）へ泊る。
御目明し須藤半八殿を尋ねし處。留守にて不逢。同役、原田三四郎殿方を訪ふ。持寄り、坐舖許可。四五日逗留。

六月十三日　吉郎右衛門方へ能代の女、津輕歸りに留り居り、丸萬八郎兵衛方へ手紙を托す。
六月十四日　黒石如萊方より手紙にて、肝煎石田宗右衛門殿、才藤市郎右衛門殿、岩澤作兵衛方へ尋ねゆく。
御内町、大澤謹次郎様へも尋ねし處、久保田へ御出、御目にかゝらず。
六月十四日　四郎殿、并、嘉吉殿の二人の世話にて、一心院様と云寺にて五日之間持寄り御坐舖。
六月十七日　市川男女藏、病氣にて津輕より大瀧へ湯治に來居り、能代御目明し新助殿より迎へられ、大館越前屋へ參りし故、能代の八郎兵衛方への手紙を托す。
六月二十一日　大館出立。
大館商人衆の荷物船にて行く、鷹の巣までの船中にて商人衆に望まれて噺を成し、鷹ノ巣にて御馳走に成る。
鷹の巣。兵四郎殿方へ三四郎殿の手紙にて參り、その夜坐舖をいたす。
六月二十二日　鷹の巣より、脇神村、七日市村、米内澤村迄參る。
米内澤。驛場役人、才助殿方に泊る。この日、此處の市暇ふ。
六月二十三日　米内澤村、出立。浦田村、前田村を經、伊口内村に到り、長野町、水無町を過ぎ、横町より眞木澤御臺所へ參る。
御詰合大久保正太様、御尋申上ぐ。
加護山より手紙にて、支配人橋木（本）永助殿御取次にて其夜、御臺所に落付。
大久保様に御目にかゝり御咄し申上ぐ。
六月二十四日　大久保様舖御見分にて三枚へ御出被成。六ケ山のとらず見廻るとのことにて、同道、三枚へ參る。
大久保様は所々舖御見分になるため、天狗平と云より御先に參る。
三枚。御臺所支配人菊地利助殿方へ參り御臺所に落付。二夜御座敷。
六月二十六日　一ノ股。支配人、木村半左衛門殿方へ參り。
御臺所に落付。二夜御座敷。
六月二十八日　二ノ又。支配人、長谷川名右衛門殿方へ參る。一夜御座敷。
六月二十九日　萱草へ參る。御臺所住居にて、高橋清四郎殿方にて一夜御座敷。
七月朔日　小澤。御臺所へ參る。大久保様、小澤へ御出に成る。
（落丁か）
日付不詳　二夜御座敷致す。
日付不詳　大久保様、眞木へ御歸りに成られ同道にて眞木へ歸る。
御臺所にて二夜御座敷。
小澤より眞木へ參りし節、銀山町御目明し巳ノ松殿へ大館三四郎殿の手紙にて尋ね、留守にて逢ず。
七月六日　木山方御役所へ大久保様同道にて參る。
其夜御座敷いたす。
七月七日　木山方御役所より船にて米内澤迄送らる。
其夜、米内澤驛場才助方へ泊る。
七月八日　米内澤より小繋へ參る。驛場の向ふ肝煎殿方へ泊る。
七月九日　小繋より今泉に行き、茂三郎殿方へ立寄り、綴子まで參る。驛場向う、本陣、高橋八郎兵衛殿方に一宿。
其の夜、御坐舖。
七月十日　此朝出立致す所、今一夜留めらる。
盡、郷藏會所にて御坐舖いたす。
七月十一日　大夕立にて出立出來ず、高橋善十郎殿方へ泊

る。

七月十二日　綴子出立。
米代川を渡り、晝過ぎ、扇田半兵衛殿方へ參り、鳥渡立寄り、大瀧迄參るところ、一夜留られ、馳走になる。
其夜、松右衛門殿と云人被參會ふ。

七月十三日　松右衛門殿方へ見廻いたし、それより買物などいたし、大瀧へ參る。
宿、善左衛門殿方へ落付。
十二所より御内町ノ衆、日歸に御出被成、皆皆御尋被成、色々御物語りいたす。

七月十七日　大館、原田三四郎殿、御同道にて、御出役黒澤慶助樣、御小人衆二人御出になり御逗留、早速御見廻に罷出、日々參つて御馳走に成り御咄いたし居り。三四郎殿は八月朔日祭禮にて、五六日逗留にて廿八日大館へ歸らる。

七月二十八日　夕方、扇田、半兵衛殿より杓取り子供三人參り、奥座敷にて呑明す。

七月二十九日　黒澤樣幷御小人衆三人共扇田へ御出に成り、途中迄御見送りいたす。半兵衛殿方子供みなみな歸る。

八月四日　大瀧、出立。扇田、半兵衛殿方へ參る。

御目明し清水儀右衛門殿世話にて、壽仙寺の肝煎、山脇平右衛門殿、其外七八人楊弓有、其座にて口見いたし、五日の間、儀右衛門殿弟、勘助殿宅にてよせ興行。
大入に付一ばん日延致す。

八月八日　半兵衛殿家内大館へ芝居見物に參る、妻を同道さす。

八月九日　二百十日。天氣よろしく、半兵衛殿、同道にて隣家へ鶏の御馳走によばれる。

八月十三日　扇田、出立。半兵衛殿、娘お竹、内儀小糸、加護山御祭禮有に付同道參る。源兵衛殿、この人も悴を連れて參る。今一人、加護山の者、娘を扇田へかたづけ、病氣にて參り居りし人、都合八人にて、小船にて下る。加護山まで船路九里餘。八ッ半頃、加護山へ着き、御番所小島東之丞殿方へ落付。
早速御臺所へ御見舞申す。

八月十四日　御祭禮。御祭禮中はさわがしく、噺も出來ず、船山樣より御差圖にて田口殿より手紙持參いたし、太良へ向ふ。
途中、藤琴御目明し宇右衛門殿を尋ねし所、村岡佐吉殿、二十年前、久保田にて知る人にて留られ、二三日逗留するやう申されしも、一夜、御坐舖して太良へいそぐ。

八月十五日　太良へ參る。
御臺所に參り、支配人、木澤理左衛門殿、差圖にて、文吉方へ落付。
御手代加藤名右衛門殿、古くより知る人にて殊の外世話に成る。十五夜の月を見る。御臺所にて坐舖を致す。

八月十六日　前日から三晩、御坐舖いたす。

八月十七日　太良、出立。

八月十八日　金澤まで二里參り、支配人木澤理左衛門殿の船にて藤琴まで參る。夕方着。
村岡佐吉殿方に參る。佐吉殿方にて一晩御座敷いたす。

八月二十一日　藤琴より加護山へ、船にて參る。晝着。鮎を船山樣へ差上ぐ。
其夜、御臺所にて御坐舖いたす。

八月二十二日　兩日御坐舖。

八月二十三日　加護山、出立。扇田、お竹親子逗留致し居り、半兵衛殿へ禮狀差遣し、いとまごひいたし別る。

八月二十七日　船にて荷上場(揚)より切石の渡を越し、飛根、鶴形に寄り八ッ半頃能代、木山方御役所の下へ着船。柳町八郎兵衛殿方へ參りしところ、留守、與七殿夫婦留守いたし居らる。
酒田より馬琴門人馬吟、宗山門人新笑二人參り居り、其の夜、酒盛りいたし、廿七日まで逗留。

八月二十八日　大淵彦兵衛樣へ御見舞いたす。
天社日。庄屋竹内庄右衛門樣。大淵彦兵衛樣。其外町役人衆七八人、料理屋嘉兵衛殿へ參られ、坐舖いたす。

八月二十九日　能代、出立。
渡しを越し、向ひ能代へ。夫より駒田村、八森村へ。
目明し佐左衛門殿方へ參る。
其夜、近所衆六七人被參、坐舖いたす。

八月三十日　銀山へ行くべきところ逗留。丸喜と云ふ人にさそはれ雜魚とりに參る。

九月朔日　出立。
濱田村より椿村、藻浦、瀧沼村、小入川村、是より八盛銀山へ參る。支配人加賀谷五左衛

門殿方へ參り、御憩所へ落付。二夜御坐舖いたす。

九月三日　八森、佐左衞門殿方へ歸るべきつもりのところ、小入川間兵衞と云人に、深浦行をすゝめられ、この人の手紙にて、岩館御番所を越し、大間越、菊地嘉兵衞殿の悴、柳藏殿方へ參り、坂本屋重吉方へ泊る。其夜近所の者二三人參り咄しをのぞまれ、一つ二つはなす。

九月三日　菊地柳藏殿より手紙にて深浦へ參る。黒崎村より松神、森山の峠を越し、久田、濱中、岩崎といふ村を過り、深浦に着。仙臺屋伊右衞門殿と申す方へ參る。少々取込あり、伊右衞門殿の差圖にて、加賀屋（宿屋）へ泊る。

九月四日　大あれにて、一向戸も明けられず、晝頃より少々雨やむ。當所は藏人逗留出來ぬ由なれ共雨天にて出立出來ず。

九月五日　深浦を草々に立出づ。

著者に就いて

滑稽舍語佛は江戸の落語家で、二代目船遊亭扇橋といつた人物である。音曲咄の元祖と稱せられる初代扇橋の門下で、とつちりとんで有名な都々一坊扇歌とは同門の關係にある。

尤も本文の中には「二代目扇歌を門人の如くに記してゐる箇所がある。師名繼承の後は門人を以て遇したものであらうか、不審である。

弘化五年、卽ち嘉永元年に六十三歲とあるから天明六年の出生で、歿年は不明である。

初代扇橋の弟ともいはれ、麻布藪下の茶積茶屋の息子であるともいはれてゐるが、兩說ともにその出所は關根默庵の著書以上に溯源する事ができない現在では、眞僞何れとも卒かに斷定し難い事である。

但し少くも或時期を麻布に居住したであらう事は語佛自身の記述に明らかであるが、それが藪下の茶屋の息子であつた事と關係があるのか、初代扇橋が麻布に住つてゐたといふ事に關係があるのか、或はその双方に關係があるのか、それとも全くないのか、疑問である。

落語家としては、新橋、扇蝶、扇藏等、順次昇進して遂に二代目扇橋を襲名したとあるが、疑問は自ら「戲場作者並木吾市、改二代目五瓶と成」と記してゐる事である。

尤も吾市の名は弟子に傳統して並木語市なる落語家となつてゐるのを見れば、或時期語佛自身の名であつたらしくもある。

う事も推測に難くないのであるが、五瓶二世を嗣いだ者は族本の出身で本名を野々山正二郎といつた篠田金次であつて、この篠田金次が語佛と同一人でない事は文政二年七月七日五十二歳を以て歿してゐる一事でも明瞭な筈である。

そこで最も普通に想像される事は、何等かの事情で二世五瓶が二人存在したか、或は五瓶二世とあるが三世の誤記ではないかといふ事である。

事實名家の何代目かゞ二人存在したといふ事は其例に乏しくないことで、さういふ點に第一の想像の可能性があるのであるが、たゞ此場合それはどこまでも單に可能なる想像といふに止まるのみであつて、これを積極的に肯定せしむるに足る客觀的資料は現在のところ一つも發見されてゐない。

第二の場合、自分に關する事實を自分で誤記する筈がないと考へられないでもないが、寫本「奇奴部類」の中にはこの他にも、弘化五年の干支を壬申に誤記したり、甚しきは語佛を談佛と誤記したりしてゐるばかりでなく、弘化五年卽ち嘉永元年の序を附した同書に嘉永三年以後四年及五年の十月に至る年次を明記せる記事の少からず散見する等、相當執筆當初の體樣との間に逕庭あるを疑はしむるに足るものがあるのである。この想像が必ずしも無稽の說でない事を證すべき根據がないではないのである。

因みに、語佛を談佛に誤つた個所には誤字に×印を附して傍に語字を添へてあるのであるが、×印が明瞭でないので燕石本が談語佛となつてゐるのを其儘に踏襲されたりしてゐる。ついでながら寫本「奇奴部類」は關根翁の舊藏書とみえて只誠藏の印があり、同翁の筆と覺しき朱書の手澤があるが、燕石本はそれらの書入をも卷末に綴加へられてある一枚摺の圓生「東都噺家師弟系圖」と共に、一見「奇奴部類」の本文と差別無き體裁に於て複刻されて居る事を附言しておかう。

圖書刊行會本の底本となつた帝國圖書館本は萬延二年の奥書ある寫本であつて、原本を覩る事なし得ぬからはその誤記の由來する所が果して著者自身に歸すべきものであるか否かはわからない。

しかも、そればかりではなく三代目五瓶二代目扇橋を二代目五瓶三代目扇橋と錯雜する事はわれ〳〵も不用意の裡に屢々犯した誤で心理的に惹起し易い錯誤であつて、自分に關する事實を自分で知らない事はあり得ないとするも、自分に關する事を自分で誤記する事はあり得ないとする事はこの想像を抹殺するに十分有力な理由ではないであらうとも思はれる。

又、語佛が三世五瓶である事を斷定し難い他の一つの理由として、「奇奴部類」に篠田金次の名が算へられてゐない事も考へなければならないではあらう。が、それも別な考をすれば、落語家の系譜に狂言作者の事を詳說するのを避けたと解すれば解せられないでもない。

たゞ語佛を三世五瓶と斷定し難い最も重大な理由は、從來の文獻を信用する限り兩者の年齡が符合しないといふ點にあるといへよう。卽ち嘉永元年に六十三であつた者が安政二年に六十七であつたり、安政三年に七十六であつたりする筈はないのであるが、それとて最も根本的な資料に據つてゐるらしく見える魯文の「名聞面赤本」の記述はもとより、その根本の資料である正覺院の過去帳の記載さへ疑へば疑へないではない。

正覺院が三世五瓶の眞の菩提所でない事は初代二代三代と連る戒名の表でも察しられるが、鈴木氏の別稿報告によれば二世五瓶の墳墓戒名も別に發見されたやうである。因みに正覺院は震災を蒙つて墓石は勿論過去帳をも灰燼に歸したとの事である。

即ち、前述の如く「奇奴部類」の記事にも絶對的な信賴はおけないとすれば、扇橋が六十三であつたのが弘化五年である事も眞に確實とは認められないと同時に、五瓶が歿年も確認し難いのであつて、兩者の年齡の不一致といふ事も實は甚だ曖昧な前提の上に立つものであるといふ事になるのである。即ちわれ〳〵は二世扇橋と三世五瓶とを別人であると考へる事もできれば、兩者を同一人であるとも考へる事ができるのである。二世扇橋事三世五瓶は嘉永五年に六十三で安政三年七月十四日に六十七で死んでゐるかも知れないのである。さすれば墓所は麻布の某山某寺あたりであらうなど〻想像されないでもないではないか。

以上、語佛に關して現在語り得るわれ〳〵の知識はかくの程度に過ぎない。附錄として添へた年表其他を參照されて將來更に有力なる考證を加へらるゝ事があれば欣懷これに過ぐるものはない。

〔附記〕

語佛の著作は「奇奴部類」と本書あるを知るのみである。其他柳多留百二十二篇以下百六十五篇に亙つて凡百十四句の狂句の作があり、眞砂連の點者として活躍してゐる他、落語作者の自稱に不拘其方面の著作を發見し得ず、狂歌も三世五瓶の名は見えるが扇橋の名を見ず、わづかに「入船狂句選」なる書名を拾ひ得て扇橋の選抄に非ざるやを疑ふのみで眼目の機會を得ないでゐる。

諸書に散見せる

二代目船遊亭扇橋竝に三代目並木五瓶に關する傳記的記載

排列の順序は、扇橋と五瓶の同一人たる事を明記する唯一の根本的資料であるところの「落話家奇奴部類」を中にして、前半を扇橋關係のものを以てし、後半を五瓶關係のものを以て略々著作の年代に從ふ。即ち、「奇奴部類」を頂點として前後に開くに從つて年代が降るものである。

因みに印刷の體裁は原著に拘らず便宜を考慮し、すべて一樣に書下したもので、一二省略を加へたものもある事を附記しておく。

○平凡社　大百科辭典

船遊亭扇橋（二世）、本名未詳、天明六年（一七八六）生。藪下茶漬（ヤブシタチヤヅケ）茶屋の子、或は一世の弟とも云ふ。狂言作者で並木吾市といふ。一世扇橋の門に入り新橋、扇蝶、入船扇藏を經て二世扇橋を繼ぐ。後、陸奥に下り談語佛老人扇翁と號した。彼の著「落語家奇奴部類」（弘化五年）は、落語研究に價値ある書である。當時六十三歳と明記してあるので略々彼の生存時代が推定出來る。（山崎麓）

○鈴木行三　近世作家大觀（稿本）

二世扇遊亭船橋（並木五市、二世並木五瓶、扇蝶、扇遊亭新橋、入ふね扇藏、語佛老人、扇翁）天明六年出。二世船遊亭扇橋は初代扇橋の弟ともいひ、又藪下茶つみ茶屋の子なりともいふ。（講談落

語今昔譚其他〕

○關根默庵　講談落語今昔譚　一五四頁

二代目扇橋は初代の弟だともいひ、藪下茶つみ茶屋の伜だともいふ。初めの名を吾市次に新橋といひ後に入船扇藏と改め、更に二代目を相續した。

扇之助、扇風、萬藏、扇藏等の門人がある。

○關根默庵　江戸の落語　一五八頁

二代目扇橋、藪下茶積(ママ)茶屋の悴なりともいふ、始めの名吾市、又新橋ともいひ後入船扇藏と改め遂に二代目を相續せり、談佛老人と號す、其門下扇之助、扇風、萬藏、扇藏等尤も著はる。

○三遊亭圓生　東都噺者師弟系圖〔新燕石十種二〕　四四一頁

故船遊亭扇橋門人吾市改新橋、又改入船扇藏、又改二代目扇橋。

○船遊亭扇橋　落語家奇奴部類〔新燕石十種二〕　四〇九頁

おのれたま〳〵長生して、ことし六十三の春を向ふ、永日のつれ〴〵に、過越かたの思ひ出るまゝに書付て、噺家奇奴部類と名づくるになん、弘化(嘉永元戊申)五王申の孟春、東都落語の作者、二代目船遊亭扇橋、語佛老人扇翁撰。

○同　前　四二四頁

麻布住、扇遊亭新橋、戲場作者並木吾市、改二代目五瓶と成、又扇蝶、又入ふね扇藏、又々改二代目船遊亭扇橋、又々陸奥へ下り、談語佛老人扇翁と云。

○同　前　四二五頁

木挽町住、二代目船遊亭扇橋、始め並木五市、又並木五瓶、又改新橋、又々改扇蝶、又入船扇藏と成り、又々改二代目船遊亭扇橋、後年陸奥へ下り、語佛老人扇翁と云。

○關根默庵　名人忌辰錄

並木五瓶（三世）並木舍、二代目門人、始篠田總六、後文政七年金次と改む、天保十四年十一月河原崎座にて三代目相續、安政二卯年七月十四日歿す、歳六七十(ママ)、寺深川靈岸寺地中正覺院、法號得法直譽。

○經濟雜誌社　大日本人名辭書

並木五瓶（三代目）二代目の門人なり、初並木惣六又た篠田金次と曰ふ、江戸の人、通稱因幡屋小半次、後三代目五瓶を相續し、安政三年七月歿す。（作者小傳）

〔註〕新版大日本人名辭書に於ては、後揭「近世日本演劇史」の記述が襲用せられて居る。

○伊原敏郎　近世日本演劇史　六八二頁

三世並木五瓶（安政二）は二世五瓶の門人にして

奥のしをり　諸書に散見せる傳記

始め篠田惣六といひ、中ごろ師の舊名を襲ぎて篠田金次といひ、天保四年十一月、更に五瓶と改め、安政二年十月十四日沒しき。七世團十郎の始めて演ぜし「勸進帳」(天保)(嘉永十一年三月、河原崎座)は此の人の作なり。

○山崎麓　日本小說作家人名辭書〔近代日本文學大系廿五〕

三世並木五瓶、二世並木五瓶の門人、狂言作者。初名篠田總六、後師の名をつぎ篠田金次、天保四年三世五瓶と稱す。淺草庵並木、淺草堂、並木舍等の號がある。一說に安政二年十月十四日歿。「五十三驛梅東路」（嘉永元年刊）の作者。

○狩野快庵　狂歌人名辭書

並木五瓶（三世）、歿年七十六。

○鈴木行三　近世作家大觀〔稿本〕

三世並木五瓶（篠田金次、惣六、淺草庵並木、淺

草堂、並木舍）寛政元年生、安政二年歿。

〔狂言作者概略〕三代目並木五瓶、二代門人、始篠田全次、後金次と改ム、天保□年三代目相續、改名。安政二年七月十四日歿、年六十七。法名得法直覺信士。

〔名聞面赤本〕狂言作者篠田惣六後改めて金次、遂に師名を嗣ぎて三世並木五瓶といふ。今の篠田金次が父なり。安政三丙辰七月十四日沒年七十六、墓所深川靈岸寺中正覺院、法名得法直覺信士。

○新潮註　日本文學大辭典

並木五瓶（三代）脚本作者。別號並木舍。寛政二年江戸に生れ安政二年十月十四日同地に歿す。享年六十七。墓所深川靈岸寺中正覺院。二代並木五瓶の門人で、初め篠田惣六といひ、中頃師の舊名を襲ふて篠田金次となり天保四年十一月、三代並木五瓶となり、同時に立作者に昇進した。著作、（脚本）四天王戯場寄初、當平家世盛、御撰曳網坂、勸進帳、騎舫忠臣鞍、（草雙紙）五十三驛梅東路、尾上梅壽一代噺、伊呂波藏水滸傳、五十三驛錦繪雙紙。（溫泉清太郎）

○平凡社　大百科辭典

並木五瓶三代（1788―1855）二代の門下。初名篠田惣六。文政二年正月中村座の「曾我綉妹背組帶」に始めてその名を連ね、同七年十一月同座で二代篠田金次を襲ぎ、天保元年十一月二枚目作者格に昇進。ついで同四年十一月森田座で三代を襲名し立作者となる。安政二年七月十四日沒、年六十七。著作の中では「勸進帳」が名高い。（秋葉）

參考年表

西暦	年次	干支	摘要	備考
一七八一	天明元年	辛酉		
一七八二	二年	壬戌		
一七八三	三年	癸亥		
一七八四	四年	甲子		
一七八五	五年	乙丑		
一七八六	六年	丙寅		
一七八七	七年	丁卯		
一七八八	八年	戊辰		
一七八九	寛政元年	己巳	◎出生。*（作家大觀畧・大百科）	
一七九〇	二年	庚午	◎江戸に生る。（文學辭典）	
一七九一	三年	辛未		
一七九二	四年	壬申		
一七九三	五年	癸酉		
一七九四	六年	甲戌		
一七九五	七年	乙亥		
一七九六	八年	丙子		
一七九七	九年	丁丑		
一七九八	十年	戊寅		
一七九九	十一年	己卯		
一八〇〇	十二年	庚辰		
一八〇一	享和元年	辛酉	一九作「東海道膝栗毛」初編上梓さる。	扇橋ノ出生ヲ天明六年ト推定ス
一八〇二	二年	壬戌		
一八〇三	三年	癸亥		
一八〇四	文化元年	甲子		
一八〇五	二年	乙丑		
一八〇六	三年	丙寅		
一八〇七	四年	丁卯		
一八〇八	五年	戊辰		
一八〇九	六年	己巳	初代並木五瓶歿。 初代扇橋始めて寄席に出づ。（今昔譚） 三馬作「浮世風呂」初編成る。	
一八一〇	七年	庚午		
一八一一	八年	辛未	三馬作「浮世床」初編上梓さる。	
一八一二	九年	壬申		
一八一三	十年	癸酉	馬琴「八犬傳」初稿成る。	
一八一四	十一年	甲戌		
一八一五	十二年	乙亥	山東京傳歿す。	
一八一六	十三年	丙子		
一八一七	十四年	丁丑	二世並木五瓶襲名。（小圖錄・役）	
一八一八	文政元年	戊寅	○正月、中村座「會我綉錄曽繩帶」に始めて其名番田第六を連ぬ。（大百科）	
一八一九	二年	己卯	七月七日、二世五瓶歿、年五十二。（小圖年表）	
一八二〇	三年	庚辰		
一八二一	四年	辛巳		撫見世中村座興行ナシ（年代記）
一八二二	五年	壬午		
一八二三	六年	癸未	式亭三馬歿す。	
一八二四	七年	甲申	○十一月、中*村座にて金次襲名。（小圖錄・役）	
一八二五	八年	乙酉		
一八二六	九年	丙戌		
一八二七	十年	丁亥		
一八二八	十一年	戊子		
一八二九	十二年	己丑	四月十三日、初代扇橋歿。（谷觀音由來） 鶴屋南北歿す。	
一八三〇	天保元年	庚寅	○十一月、二枚目作者に昇進。（大百科）	
一八三一	二年	辛卯	春水作「梅暦」上梓	
一八三二	三年	壬辰	◎二月廿八日開、御獵場鳥請就業納句會に評者たり。（俳諧一五二）	
一八三三	四年	癸巳	○十一月、*森田座「四天王誠場容」にて三世五瓶襲名、立作者となる。（小圖年表・近代演劇史・大百科・文學辭典）	（已辰條）十四年十一月河原崎座ニ誤ル
一八三四	五年	甲午		
一八三五	六年	乙未	六月二日、初代扇橋追善會。（俳諧一五二）	
一八三六	七年	丙申	◎水滸傳會に三百九十餘を得、小結眞柴道に擬せらる。（〃）	
一八三七	八年	丁酉	○十一月、河原崎座「當平家世盛」上演。（文學辭典）	
一八三八	九年	戊戌	○十一月、河原崎座「御摂曳綱坂」上演。（文學辭典）	
一八三九	十年	己亥	○三月、河原崎座「勤追帳」上演。（年代記）	（演劇史）嘉永十一年ニ誤ル
一八四〇	十一年	庚子	○九月、三世關五郎と共に京阪に上る。（河竹氏説）	
一八四一	十二年	辛丑	○五月、「畸紡忠臣鞆」河原崎座上演。（文學辭典）	
一八四二	十三年	壬寅	◎十月、偶疾に罹到。同地にて遂年。 柳亭種彦、爲永春水、林家正藏歿す。 馬琴作「八犬傳」を脱稿す。	

一八一一	八年	辛未	三周作「浮世床」初編上梓さる。
一八一二	九年	壬申	
一八一三	十年	癸酉	馬琴「八犬傳」初稿成る。
一八一四	十一年	甲戌	
一八一五	十二年	乙亥	山東京傳歿す。
一八一六	十三年	丙子	
一八一七	十四年	丁丑	二世並木五瓶襲名。(小說年表)
一八一八	文政元年	戊寅	○正月、中村座「曾我綱繰曾根帶」に始めて尺名題田樂六
一八一九	二年	己卯	七を遣ふ。(大百科)
一八二〇	三年	庚辰	七月七日、二世五瓶歿、年五十二。(小說年表)
一八二一	四年	辛巳	
一八二二	五年	壬午	式亭三馬歿す。
一八二三	六年	癸未	
一八二四	七年	甲申	○十一月、中村座にて金次襲名。(小說年表・大百科)
一八二五	八年	乙酉	
一八二六	九年	丙戌	
一八二七	十年	丁亥	
一八二八	十一年	戊子	四月十三日、初代扇橋歿。(六樹園飯盛墓誌・大百科)
一八二九	十二年	己丑	鶴屋南北歿す。
一八三〇	天保元年	庚寅	○十一月、二枚目作者に昇進。(小說年表)
一八三一	二年	辛卯	
一八三二	三年	壬辰	春水作「梅暦」上梓
一八三三	四年	癸巳	◎二月廿八日開、御祖屋島諸社奉納句會に評者たり。(綱神一五二)
一八三四	五年	甲午	
一八三五	六年	乙未	○十一月、喜田座「四天王戯場寄」にて三世五瓶襲名、立作者となる。(小說年表・近世演劇史・大百科・文學辭典)
一八三六	七年	丙申	
一八三七	八年	丁酉	
一八三八	九年	戊戌	六月二日、初代扇橋追善會。(綱神一五二)
一八三九	十年	己亥	◎水滸傳會に三百九十餘名揃、小說黒幕總出に擬せらる。(?)
一八四〇	十一年	庚子	○十一月、河原崎座「當平家世盛」上演。(文學辭典)
一八四一	十二年	辛丑	○十一月、河原崎座「御摩曳綱坂」上演。(文學辭典)
一八四二	十三年	壬寅	○三月、河原崎座「勤追帳」上演。(年代記)
一八四三	十四年	癸卯	○九月、三世瀧五郎と共に京藏に上る。(河竹氏稿)
一八四四	弘化元年	甲辰	○五月、「騎紡忠臣鈸」河原崎座上演。(文學辭典)
一八四五	二年	乙巳	◎十月、仙臺に着到。同地にて翌年。
一八四六	三年	丙午	柳亭種彦、爲永春水、林家正藏歿す。
一八四七	四年	丁未	馬琴作「八犬傳」を脫稿す。
一八四八	嘉永元年	戊申	
一八四九	二年	己酉	○「尾上梅壽一代噺」市村座上演。(文學辭典・綱史)
一八五〇	三年	庚戌	◎「落語家奇緣雙紙」成る。當年六十三。(奇談部類)
一八五一	四年	辛亥	○「五十三驛梅東路」刊行さる。(小說年表・文學辭典)
一八五二	五年	壬子	曲亭馬琴歿す。
一八五三	六年	癸丑	○「伊呂波藏水許傳」刊行さる。(小說年表・文學辭典)
一八五六	三年	丙辰	◎享年七十に相當す。
一八五七	四年	丁巳	○七月十四日歿、年七十六。(小說年表・名聞面影本)
一八五八	五年	戊午	○「五十三次老東路」刊行さる。(小說年表)
一八五九	六年	己未	○「音聞百物語」刊行さる。(小說年表)
一八六〇	七年	庚申	山東京山歿す。
一八六一	文久元年	辛酉	
			○「櫻莊子後日談」上梓。(小說年表)
			○「勝角力花乃顯觸」刊行さる。(小說年表)
			○「相生源氏高砂松」刊行さる。(小說年表)
			○「復緑天橋立」刊行さる。(小說年表)
			○「太玆楫惠壺」刊行さる。(小說年表)
			○「龍三升高根雲霧」刊行さる。(小說年表)
			◎享年七十六に相當す。

	鎭見世中村座興行ナシ(年代記)
	〔己辰錄〕十四年十一月河原崎座ニ誤ル
	〔演劇史〕嘉永十一年ニ誤ル
	天明八年出生ニ當ル 干支ヲ壬申ニ誤ル
	〔今昔譚〕廿五日トナス
	〔年表一說〕〔演劇史〕 〔文學辭典〕十月十四日トナス
	寬政元年出生ニ相當ス 奇奴部類ニヨリ推算ス 天明元年出生ニ相當ス
	二編ハ六年刊 〔草雙紙書目〕文久二年トス
	〔草雙紙書目〕二年トス
	〔草雙紙書目〕五柳作トス 同右 奇奴部類ニヨリ推算ス

二代船遊亭扇橋と並木五瓶の稱號

鈴木行三

十二			
十一			
十			
九			
八	二代五瓶卽篠田金治作「花菖蒲佐野八橋」	四十四歲	
七	三囘忌追善興行中村座		
六			二代並木五瓶　野々山氏姑篠田金治　葛葉山人正二　割下水旗下次男也。坂東彦三郎の引立にて作者となる。二枚目、後立作者となる。　四十一歲
文化五	二月二日歿六十二歲		
	初代並木五瓶		

三			三代並木五瓶　二代目五瓶卽篠田金治の門人篠田勉六、後篠田金治、淺草庵並木、淺草堂、並木舍。　㊀二十歲　㊁(一說)二十九歲
二		廿三歲	自稱二代並木五瓶　二代目船遊亭扇橋　麻布藪下の人。或曰初代の弟、並木五市、並木五瓶　新橋、扇蝶、入船亭扇藏　二代目船遊亭扇橋、語佛老人、扇翁
文政元		二十六歲	

十四			
十三	二代五瓶		
文化十三			
十			
九			
八			
七		三十九歲	
六			
五			三代目五瓶
四			
三	自稱二代五瓶、扇橋		
二	七月歿年五十二　善岳淨功	卅四歲	扇橋
文政元	二代五瓶異名(中村座)		

篠田金治と改む。　㊀三十六歲　舊名勉六

㊀卅一歲　㊁四十歲

「みの吉殺し」を自作口演

參考

初代　船遊亭扇橋

赤坂住　奥平家の臣

十一	扇橋（自稱二代）四十三歳		
十二	四十四歳	三代五瓶	
天保元		㊀四十一歳㊁五十歳	
二			
三		㊀四十四歳	
四	四十八歳	十一月森田座再興作者並木五瓶、篠田錦三等の名あり。金治の名なし。此年改名か ㊁四十六歳	
五			
六			
七			
八			
九		（一）河原崎座作者並木五瓶の名あり。續歌舞伎年代記P433	
十			

註、（一）「歌舞伎年代記續篇」に天保九年並木五瓶の名あれば「名人忌辰錄」の天保十四年襲名は四年の誤なるべし。扇橋は自記によれば落語家になる前に狂言作者として五市又は五瓶と云へる如くなれば、落語家となる爲に初代扇橋の門人となりたるは、扇橋の殁したる文政十二年より前の事なるべし。さすれば天保九年の五瓶は篠田金治なるべし、假りにこれを扇橋なりとすれば三代目五瓶と云はざる可らず。然るに扇橋自ら二代目と稱するは葛葉山人の二代五瓶に對して明かに僭稱なり。又扇橋を三代五瓶ならんといふは否なり。自ら三代目を二代と誤記すべしとは思はれず、殊に三代目が初め篠田惣六といひ後文政七年師名を嗣ぎて金治となれるに、扇橋自身の記錄には惣六も金治も兩つ共洩らせり。篠田金治は三代並續き

（二）「名人忌辰錄」（自序による）

四月十三日初代扇橋歿

天保十一	扇橋	三代五瓶	脚本（並木五瓶の名）「尾上梅幸一代噺」の作あり並木五瓶の名にて本年より合卷草双紙の作あり
十二	「奥のしをり」五十六歳	三月河原崎座勘進帳上演 ㊀五十二歳 ㊁六十一歳	
十三			
十四	五十八歳	（二）三代目五瓶襲名（忌辰錄）㊀五十五 ㊁六十四	
弘化元			
二			
三			
四			
嘉永元	「奇奴部類」六十三歳（自序による）		
二			
三			
四			

並木五瓶	三代目並木五瓶の實子初め篠田全二（ゼンジ）後金治と改む
	「尾上梅幸一代噺」に篠田金治として名出づ

し作者名としては相當のものなるに五市などいふ。紛らはしき名をあげてこの金治を記さゞるは全く別人たるの證とすべし。又扇橋が二代五瓶と名告れる事は自記以外に見えず、或は一時初代五瓶の門人となり、初代殁後金治と仲惡しくでもありて二代五瓶と僭稱し間もなく初代扇橋の門に入りて新橋となりしなるべし。

五		
六		
安政元		
二	七十歳	三代五瓶歿㊀六十七 ㊁一說七十六 （得法直覺信士）
三		
四		
五		
六		
萬延元		
文久元	七十六歳	
二		
三		

五柳の名にて合卷の作あり
「相生源氏高砂松」外三種
「勸善懲惡覗機嚇」
初篇―三篇、十二

元治元		
慶應元		
二		
三		
明治元		

本年合卷草双紙二種

明治三十年七十一歳頃歿す

○二世船遊亭扇橋は、二代目並木五瓶と自稱すれども、野々山氏の篠田金治即ち本所割下水の旗下の次男なる二代目五瓶とは別人なり。

○扇橋は初代扇橋の弟なりとする說と、麻布藪下の人なりとする說とあり。初代扇橋は奥平家の臣にして赤坂に住すとあれば、何れにしても割下水の旗下の次男とは別なるが如し。これ別人とする所以なり。

○二世扇橋を三代目並木五瓶ならんといふは何等の據なし。たゞ年齡近きが故に或は然らんかといふに止るが如し。然れども三代目五瓶は始め篠田惣六といひ後に金治と云へること諸書一致せり。而して扇橋の自記には全く篠田の名を加へず。又慶應三年版の「くまなき影」には、並木五柳を、三代目並木五瓶の實子なりとし、初め篠田全二後父の前名を嗣ぎて金治と改むとあり。さすれば父なる三代目並木五瓶は前名篠田金治にして、篠田金治の名は二代目五瓶より起りたるものなれど相當に知られたるに、扇橋が自記せる數多き前名の中にこの名を逸したるは疑ふべし。作者としての五市、落語家としての新橋などいふ前座同樣の名迄も揭げながら、これを記さゞるは愈疑ふべきなり。殊に三代目五瓶は、「勸進帳」の作者として知られ、其の上演は扇橋が「奥のしをり」を草したりといふ天保十二年の前年なり。同書にこの事に言及せざるは兎も角弘化四年に悴篠田金治と「尾上梅幸一代噺」の幾場かを合作しながら、其翌年の「落語奇奴部類」に「始メ並木五市、又並木五瓶、又改新橋、又々改扇蝶……」と記して、さながら新橋となる前に五瓶たりしが如く記せるはいかに、これ三代目並木五瓶にもあらざるの證とすべし。

要之、二世船遊亭扇橋が、後二代目五瓶と成と記せるは事實ならば世に行はれざる內に新橋と改めて落語家として立つに至りたるなるべく、狂言作者としては二枚目程の位置にもあらざりしなるべし。それ故二代五瓶と云ひて見たれど金治などの初代門人より苦情出で、轉じて落語家となりたるもの歟。又晩年迄並木五瓶の名にて狂言の作ありとすれば、其水、魯文、治助等皆三代目五瓶と親交あれば、五瓶の傳中二代目扇橋又は語佛老人扇翁などと記すべき筈なるに、何人もこれに觸れず、たゞ前名篠田金治とのみ記せるは、三代目五瓶が扇橋にあらざることを證して餘りあるべし。

索引

地名

ア

合方……六四
青盛……六〇・六二
—町……六六
麻布十番……一四四
淺瀬石……五九
—川……四四・五八
阿仁……四五・七六・八四
—川……七六
茜谷……九・三九
有壁……九
石仏……四四
石の巻……六・一二
石の坊……五九
石手洗……一六
石鳥谷……一二
碇ケ關……四八
伊口内……七六
今泉……四六
今崎……一〇八
岩城川……五八・六八
岩城山……三二
岩坂……七六
岩館……九八
岩谷堂……一〇・一二
院内……八四
上野……五九
善知鳥の宮……六二
浦田村……七六
大澤……二〇・三〇・八五・八九・九〇
扇田……九一
大瀧……二〇・八五・八六
大館……二〇・二九・四六・七五・八八・九〇
大間越……三四四
—村……九八
大湯……一八
大野……七〇
大平良村……五六
男鹿……三五
—山……三五
神浦……五六
奥ノ上……八一
小澤……六八・八〇
織絹之橋……八
鬼柳……二
カ
角館……七五
加護山……二九・四五・八九・九〇・九四
柏毛川……九一
鹿角……一八
鹿渡……三五
門トの脇……六
金目……五六
金澤……九三
唐糸の池……六六
川原子の湯……七〇
川原町……二
菅草……九八
菅笠……八〇
神田……二〇
觀音林……一四
キ
吉三郎の墓……一〇
伽羅橋……四〇
切石……四五
—の渡……二〇・九六
金花山……五
—辨天……七
銀山町……八〇
ク
櫛引村……一六
久保田……三五・一四
藏館……八〇
黒石……四四
—川……九一
黒岐村……一〇〇
黒澤尻……一二
黒田……六八
ケ
けふの里……一八
毛布の里……四一
毛馬内……一八・四六
鎌吉村……一六
コ
小阿仁……七六
小入川……九八
香六峠……四〇
國上寺……四八
古四王大明神……五九
五十ノ目……七六
五丁ノ目……七六
小繁……一四四・二〇・四六・八五・九〇
駒田村……九六
衣川……一〇
サ
坂の上……一二
櫻川……九
鮭石……四八
塞澤……九二
佐女……一六
さや堂……一〇
猿賀山……九八
澤邊……九・五六
三ノ戸……一六
三百山……八六
—大明神……八六
三本木……七・一〇
三枚……七六・八〇
シ
鹽竈……五九
鹽釜六所大明神……六
釋迦内……四六・六八
—村……七五
十二所……二〇・五〇
悲人清水……六〇
白紙……六三
—ノ沙……六三
白川……五八
四里毛山……二〇
陣場……四六
ス
瑞岩寺……六
末の松山……一四四
セ
關……一八・四八
仙臺……五一
仙人澤……七
ソ
外ケ濱……六四
タ
太平山……五六
—の山姥傳說……五六
大名長根……一二
高岡……三三
高木……七
高清水……九
多賀城の碑……五
高館……九・六〇
鷹の巢……五五・六〇
瀧沼……六八
嶽ノ湯……五六
田子……一八
たつ子の渕……五六
建谷ケ岩谷……一〇
龍燈……六三
玉の小柳……八
太良……八一・八四・八九・九一・九三
—山……九二
チ
千賀の浦……六
中宮寺……九
長勝寺……六八
津輕……四四
築館……九
津子田……一二
土澤……一〇
つゞミの橋……六六
鶴子……二〇・八四
椿村……九六
燕澤……五
壺の石碑……五
壺村石ノ碑……五
鶴形……四五・九六
—村……二〇
テ
寺内……二五・五〇・五九
天下平……五六
天狗平……七六
ト
富ノ觀音……六
苫米村……一六
ナ
長崎……五九
中ノ沙……六二
長野町……七六・八〇
長走り……四六

夏坂……一八
七木田……七
七倉天神……九〇
七峠雨……四六
浅岡……三八
—御所……三八
七日市村……七五
南郷……八九
南部よし原……一二

ニ

荷揚場……二〇・九六
—村……四五
貳汐内……三八
鍋木堰……一八・四一
—ノ由来……四一
鍋淵……六八
日郷石……四〇
二ノ又……七八・八〇
入内……六八

ヌ

沼久内……一三

ネ

根勝大名神……一八

ノ

野内……六六
能代……二〇・二九・九六
法峠……五九

ハ

配當屋……二六・二七
果願寺……六八
はせを堰……七六
はせをの碑……九〇・一〇
はた町……八〇
八幡宮……一三
八森……八二・九六
—村……九六
八盛……八四
—縦山……九八
八ノ戸……一四・八九
八郎か潟……二三・三五
—の傳説……三五
花巻……一一
花輪……一八
積田……九六
原ノ町……三
判官館……九

ヒ

尤り堂……九
一ト市……三五
雛根……九九
—村……二〇・四五
檜淵……四一
百澤……三三
百澤寺……三三
弘前……四八

フ

深浦……三四・九八
福岡……一四
福民村……五八
藤琴……九四
—村……九一
藤崎……五八
藤先寺……六八
古川……七・九

ヘ

平内……六八
別所村……八八

ホ

法輪寺……五九
坊澤……二〇

マ

眞木……八〇・八四
眞木澤……七六・八〇
松神……一〇〇
松島……三六
松前……一四
前澤……九
前田村……七六
萬日寺……一〇

ミ

水澤……九・一〇
湊……六・一六・二三
水無町……七六・八〇

ム

向ひ能代……九六

モ

濱浦……九六
盛岡……九六
森山……一〇〇
森吉山……七六

ヤ

藥王院……三〇

鐵山……九八
矢立峠……四六
矢立の湯……四六
矢はせ……三二
—村……四一
矢櫃……九二
山鳥の渡シ……六
山ノ目……九
山屋舗……三二

ユ

湯段……三六

ヨ

横町……七六
吉岡……七
義經大明神……九
米内澤……七二・八四
米代川……八三

ラ

雷峠……一八

ワ

脇神村……七三
和田ノ羽……六
和德……三九

人名

ア

秋田の三吉……三八
悪戸御前……六三
淺井新吾……二六
吾妻路富士太夫……三三
嵐橋太郎……一二

イ

市川男女藏……七三
市川團次……三三
市川團之助……一三
市川白十郎……二九
市川門藏……一三
一條……四・四
一朝……四
岩城川與助……六三

ウ

采女都……一三
鵜樂……六

エ

永樂……二七
英蝶……二八

オ

小佐川常世……二三・三二
小佐川美よし……二九
お七……一〇
香羽屋吉……一三・三四
鬼孫七……一二

カ

歌山……三
鎌倉天左衛門……一三
龜之丞……一三
茅の屋の雁根……二七
唐糸御前……七三
雁口……七三

キ

鬼人おまつ……六〇
悲齋……三七

ケ

月好……七三

コ

虎橋……一三
古久升……四
五調……四

サ

西國傳十郎……一三
才蝶……四三
佐川東帝……一一
三界庵如來……五四
三笑堂句佛……五〇
三吉怪賣譚……六八
淺紳庵……五〇
三哲……八六
—千葉上總之助……八六

シ

治調……四
樹堂……四
菖浦都……一三
正法院……三七

セ

誓守……七三
扇歌……一・一四・一六・二八
扇橋……一
扇蔵……一・二八
扇蝶……三・一四・二〇・二三

ソ

外ケ濱風……三四
宗山……九六

タ

高尾……六
濁酒庵……七五
竹田花太郎……一四
谷風梶之助と怪童三吉……六六
玉屋いろは……三三
玉屋御夢……三三

チ

蝶太郎……四五

ツ

鶴ケ峰……一三
津賀多……三三

ト

東野……九六
富本山雲……二八

ナ

永瀬越後……一三
中村余次郎……一三
中村駒次郎……三九
中村金柳……三九
中村次郎三……一三
南子……一四

ニ

尼橋……一
日持上人……三九
——之書跡……三九
如松……七六

ノ

野澤雷八……三五

ハ

梅橋……四四
馬琴……九六
馬吟……九六
柏庵……四四
馬好……三四・四一
花咲雄……四四
林屋一蝶……四四
萬龜庵……四四
坂東又太郎……三三
坂東龜介……二九

フ

文臭……四

マ

馬久二……三五

メ

名所都……三

モ

文字八尾……三三

ヤ

山打三九郎……三三
山本浪次……四〇
やん十郎……四四

リ

柳橋……一

一般語集

ア

赤鬼……六六
赤襟集……三〇
秋田正金銭……三三
淺黄銭……二
あなご……三五
鮎……六一
アラダイ……六一

イ

いか……三三
石給……一〇
いわしあミ……一六

ウ

植附……六一
蒼知島……六四
蒼知島の宮の祭禮……六二
御どセう……三三
賣物興行……三五
うるい……一八

オ

奥州上るり……三
大田植……四四
大道一里……一四
御國上るり……三一
おしきふり子……三五・三四
尾花ばうし……三五・三四
倉頭……三三

カ

かいしき……三四
貝鏑風日……四〇
かくれ道……六六
笠……七一
かじかおし……一六
鎌倉祭り……六八
かまとかへし……一六
がまはじき……三四
上方ちんと役者……六九
歌舞妓……三
かれい……三三
かわ……七一
縞……三三・三四
かんしき……三三
神主……一三
寒參り……六九

キ

魚納御役所……一六
きりうり……六六
金銀……四五
金銀札……一一
金札……三三
銀札……三三
銀目……四四

ク

ぐつ……一四
ぐづ……三三
九戸の落人……六八

ケ

競場……五六
景物會……四四
景物茶番……四四
けふの細布……四一
檢校……三

コ

口見……八八
こうろぎ……四〇
こセうさま〳〵……五九
瓦百疊かん……四〇
小道一里……一四
米……四四
御免茶屋……一三
こも……六六
ごり……二三・五六
こんふ……三三

サ

さきおり……四一
酒……四四
さしこ……四一
差引役……三三
札……一
實方朝臣——の書跡……六八
さひ鮎……六一
三顧主……三

シ

しうり貝……六
醫師……六
醫燒藤太……六八
廊……三三
仕切り出し……四四
紫根染……三〇
芝居……一三・三三・三九・四三・八八
——三太夫……三
春慶塗り……三三
正金銀……三三
上るり……一三
浮瑠璃……三
白子……三一
白魚……三三
しろ魚……三三
新錢……一三
新内ふし……三
水晶……七
——之大石……七
角力……一三

セ

せゝろ……三五
說經……三三
錢……一
——相場……四四
——札……三三
仙臺通寶……一一
川柳……六六

ソ

そは切とふふ……三
雪車……三三

タ

大磯万作……三三
田植おどり……四四
たこ……三三
七夕祭り……三三
白魚……三三
しろ魚……三三
新錢……一三
新内ふし……三
大磯万作……三三
田植おどり……四四
たこ……三三
七夕祭り……三三
鯛をおろす……四一
玉ぶり子……三一

チ
ちか……三六
ツ
津輕地方の魚……四四
津輕の方言、言葉……四四
づくせん……一二
つまうけ……三三
つまかけ……三四
テ
天社日……九六
ト
銅……四三
銅山越へ……二〇
唐扇興……一〇
十ふのすがこも……一八
土弓場……一三
土俵……一二
ナ
長唄……一二
中事……三
苗とりおつこ……三四
なで……三三
鳴物停止……三・三六
南部姥……四二
南部餅……四二
—の由來……四二
ニ
荷雪車……三三
似たり……六
入内雀……六八
人形操……三
ネ
根花……一四
ねむたなかし……二三
ノ
軒下……一八
ハ
箱雪車……三二・三三
はセを翁百五十年忌……三二・三九
鰰……三〇
はた〳〵雷……三〇
八人藝……三・一三
噺始メ……四
花鳥……六四
はねこ田植……四
はも……六
半切レ……一一
ヒ
一ト切……一一
一ト塚……一四
ひないとり……三二
フ
ふき……三四
船橋……一一
ぶり子……三一
風呂敷……七一
豐後……三・一三
ヘ
蛇艸……一八
へら(貨幣)……二三
マ
前句附……六六
萬歳……四
ミ
道ふミ……三四
ミつ……一八
水事師……一三
ム
武者袋……八八
モ
持寄……六〇
ヤ
家舗守……四
安方……六四
山鬼神大明神……三六
—の傳說……三六
山瀬……二二
やまべ……四四
矢武佐馬……一三
ユ
雪合羽……三四
雪ぐつ……三三・三四
雪ふミ……三三
雪ほり……三三
ゆとふふ……三
ヨ
楊弓場……一三
寄坐舗……四

よな鳥……六四
リ
龍燈……六〇
ワ
わらぐつ……三四

昭和十三年[illegible]月[illegible]日印刷
昭和十三年[illegible]月[illegible]五日發行

複刻 奥のしをり
定價 壹圓九拾錢

編輯者 アチツク ミユーゼアム
東京市芝區三田綱町十番地
發行者 高木一夫
東京市京橋區銀座西八丁目五番地
印刷者 甘利武雄
東京市京橋區銀座西八丁目五番地
印刷所 民友社印刷所
東京市芝區三田綱町一〇
發行所 アチツク ミユーゼアム
振替東京七八四七〇番

發賣所 東京芝區三田二ノ一
丸善株式會社三田出張所
電話三田(45)一一九二六
一一九二七
振替東京一一八五二

版權所有

アチック ミューゼアム 刊行書目

○アチック ミューゼアム彙報

〔第一〕

早川孝太郎校註
愛知縣北設業郡下津眞村

村松家作物覺帳

〔内容〕本文菊判一六八頁・圖版及圖表一七圖・地圖・索引

定價 金壹圓五拾錢 送料拾四錢

〔第二〕

竹內利美編
小學生の調べたる

上伊那川島村鄉土誌

〔内容〕本文菊判一〇〇頁 圖版七三圖・地圖・索引

定價 金壹圓八拾錢 送料拾四錢

〔第三〕

武藤鐵城著
羽後角館地方に於ける

鳥蟲草木の民俗學的資料

〔内容〕本文菊判三七〇頁 圖版二圖・地圖・索引

定價 金壹圓八拾錢 送料拾四錢

〔第四〕

吉田三郎著

男鹿寒風山麓農民手記

〔内容〕本文菊判一八二頁 圖版二四圖・地圖・索引

定價 金壹圓五拾錢 送料拾四錢

〔第五〕 高橋文太郎著
武藏保谷村鄉土資料
〔内容 本文菊判二〇二頁 圖版四七圖・地圖・索引〕 定價 金貳圓五拾錢 送料 拾四錢

〔第六〕 内田武志著
靜岡縣方言誌
分布調査 第一輯 動植物篇
〔内容 本文菊判二七〇頁 方言分布地圖・五葉 〔動物六二項目・植物二八項目〕〕 定價 金參圓八拾錢 送料 拾四錢

〔第七〕 竹内利美編
小學生の調べたる
上伊那川島村鄉土誌續編
〔内容 本文菊判二二五頁 圖版二三圖・地圖・索引〕 定價 金貳圓八拾錢 送料 拾四錢

〔第八〕 知里眞志保著
アイヌ民俗研究資料 一
〔說話第一〕
〔内容 本文菊判 原文一三頁 譯文二七頁〕 定價 七拾錢 送料 三錢

〔第九〕 アチック ミューゼアム編
所謂足半(あしなか)に就いて
（近刊）

〔第一〇〕 稻塚和右衞門著
復刻
木實方祕傳書
雲藩櫨樹植林製蠟手記
〔内容 本文菊判一五四頁 圖版一七面・地圖・語彙〕 定價 壹圓七拾錢 送料 拾四錢

〔第一一〕 宮本常一著
周防大島を中心としたる
海の生活誌
〔内容 本文菊判三〇六頁、圖版四一圖。寫眞三葉。地圖。索引〕 定價 貳圓八拾錢 送料 拾四錢

〔第一二〕 山口和雄著
九十九里舊地曳網漁業
〔内容 本文菊判三三五頁・圖版十七圖・地圖・索引別表・菊判全紙大一半截大二〕 定價 參圓 送料 廿二錢

〔第一三〕 進藤松司著
安藝三津漁民手記
〔内容 本文菊判三三八頁・圖版寫眞二二圖・凸版三〇圖 索引・別刷地圖四葉〕 定價 參圓 送料 廿二錢

〔第一四〕 内田武志著
靜岡縣方言誌
分布調査 第二輯 童幼語篇 （童話篇一八。幼語篇一〇七。童戲篇六。）
〔内容 本文菊判一九六頁 方言分布地圖二葉〕 定價 貳圓參拾錢 送料 拾貳錢

〔第一五〕 アチック ミューゼアム篇
刻復 **狩獵古記錄二篇** （近刊）

〔第一六〕 吉田三郎著
男鹿寒風山麓農民日錄
〔本文菊判四七〇頁 寫眞五〇圖附錄〕 定價 參圓六拾錢 送料拾四錢

〔第一七〕 知里眞志保著
アイヌ民俗研究資料 二 謎・口遊び・唄
〔本文菊判一三五頁 謎以下十八項目〕 定價 九拾錢 送料拾錢

〔第一八〕 祝宮靜考註
江州野洲川簗漁業史資料
〔本文菊判二三八頁・圖版一三圖 地圖 語彙〕 定價 貳圓五拾錢 送料拾四錢

〔第一九〕 佐藤三次郎著
北海道幌別漁村生活誌 （近刊）

〔第二〇〕 澁澤敬三編著
豆州內浦漁民史料 上卷
〔本文菊判五六四頁 圖版二四頁〕 定價 八圓 送料貳拾錢

〔第二一〕 船遊亭扇橋著
刻復 **奥のしをり**
〔本文菊判一〇二頁附錄四〇頁圖版・地圖〕 定價 壹圓九拾錢 送料拾四錢

〔第二二〕 丹田二郎著
越後三面村布部鄉土誌 （近刊）

〔第二三〕 宮本常一著
河內國瀧畑左近熊太翁舊事談
〔本文菊判三〇六頁 圖版二二圖〕 定價 貳圓六拾錢 送料十四錢

〔第二四〕 澁澤敬三編著
豆州內浦漁民史料 中卷之上
〔本文菊判 圖版〕 定價

○アチック ミューゼアム ノート

〔第一〕 アチック ミューゼアム編
民具問答集
〔内容〕本文菊判三一九頁 各項毎ニ寫眞 項目一二〇。ヲ附ス。地圖・索引 附錄民具蒐集調査要目
頒布價 貳圓五拾錢 送料拾四錢

〔第二〕 山口和雄著
明治前期を中心とせる
内房北部の漁業と漁村經濟
〔内容〕上 本文菊判六二頁・地圖 下 本文菊判五〇頁・寫眞 二頁・索引
頒布價 各 金五拾錢 送料各六錢

〔第三〕 櫻田勝德・山口和雄著 (隱岐調査報告一)
隱岐島前漁村採訪記
〔内容〕本文菊版一八三頁 寫眞二圖・地圖・索引
頒布價 金壹圓五拾錢 送料拾錢

〔第四〕 櫻田勝德著 (隱岐調査報告二)
糸滿漁夫の聞書
〔内容〕本文菊版三十二頁 寫眞一頁・糸滿語彙
頒布價 金三拾錢 送料三錢

〔第五〕 櫻田勝德・山口和雄著
美保關・境島三津・伊豫大三島
漁村採訪記
〔内容〕本文菊判二二頁 地圖
頒布價 金三拾錢 送料三錢

〔第六〕 岩倉市郎著
喜界島調査要目
〔内容〕本文菊判一二頁
(非賣品)

〔第七〕 アチック ミューゼアム編
民具蒐集調査要目
〔内容〕本文菊判一六頁 圖版四面
(非賣品)

〔第八〕 櫻田勝德著 (土佐漁村採訪旅行報告 一)
伊豫日振島に於ける舊漁業聞書
〔内容〕本文菊判六四頁 地圖
頒布價 金五拾錢 送料六錢

〔第九〕 櫻田勝德著 (土佐漁村採訪旅行報告 二)
土佐
四万十川の漁業と川舟
土佐漁村民俗雜記
〔内容〕本文菊判五五頁 地圖・寫眞
頒布價 金五拾錢 送料三錢

〔第一〇〕 伊豆川淺吉著 (土佐漁村採訪旅行報告 三)
土佐鰹漁業聞書
〔内容〕本文菊判五三頁 地圖
頒布價 金五拾錢 送料三錢

トエ7五-81

〔第一一輯〕

藤木喜久麿著

新島採訪錄

〔内容 本文菊判五〇頁 寫眞二十四面・地圖〕

頒布價 金八拾錢 送料 三錢

〔第一二輯〕

高橋文太郎著

秋田マタギ資料

〔内容 本文菊判九〇頁 寫眞二三面・地圖・索引〕

頒布價 金壹圓參拾錢 送料 六錢

〔第一三輯〕

金子總平編

南會津・北魚沼地方に於ける

熊狩雜記

〔内容 本文菊判七六頁 寫眞一二面・地圖・索引〕

頒布價 金壹圓 送料 六錢

〔第一四輯〕

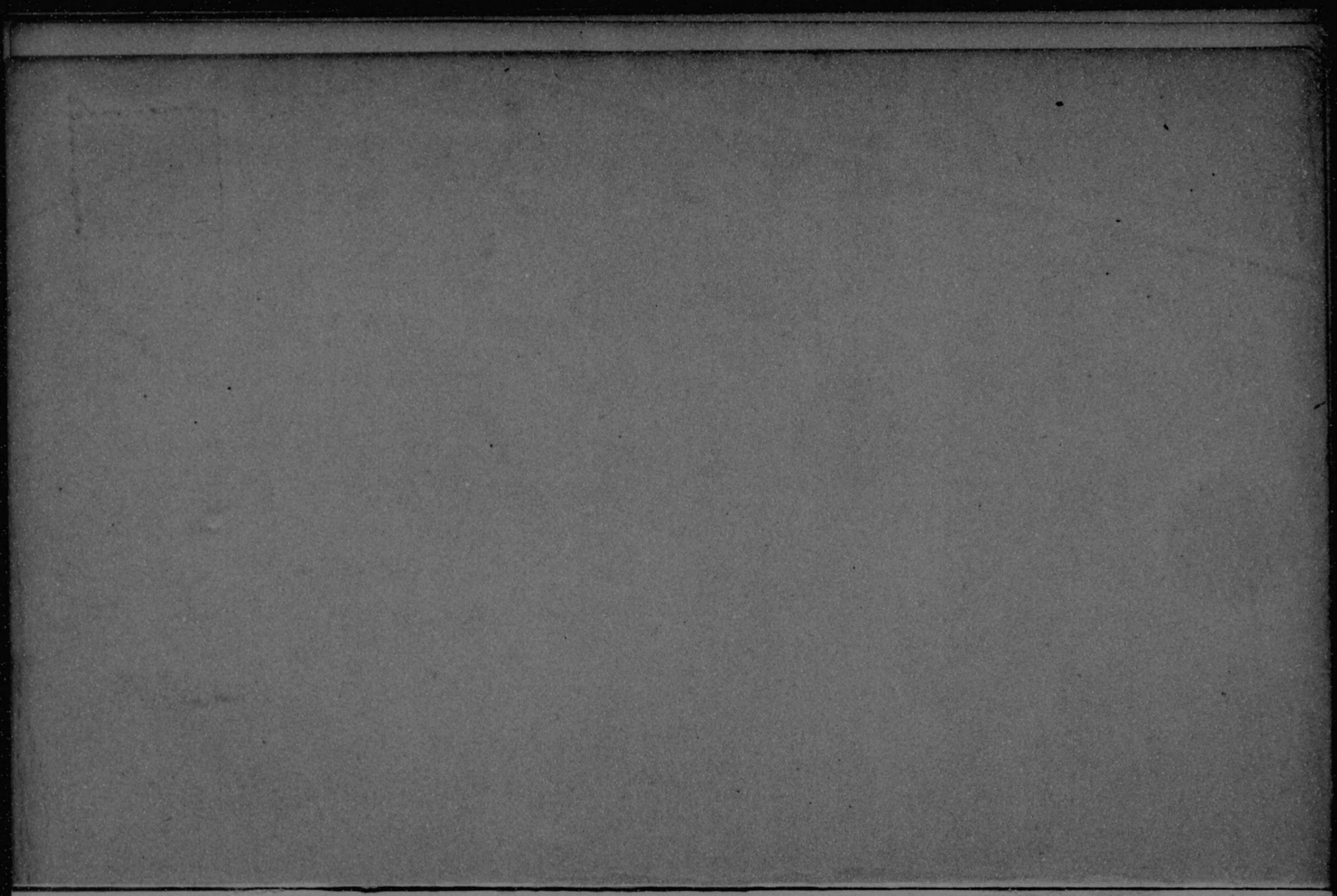
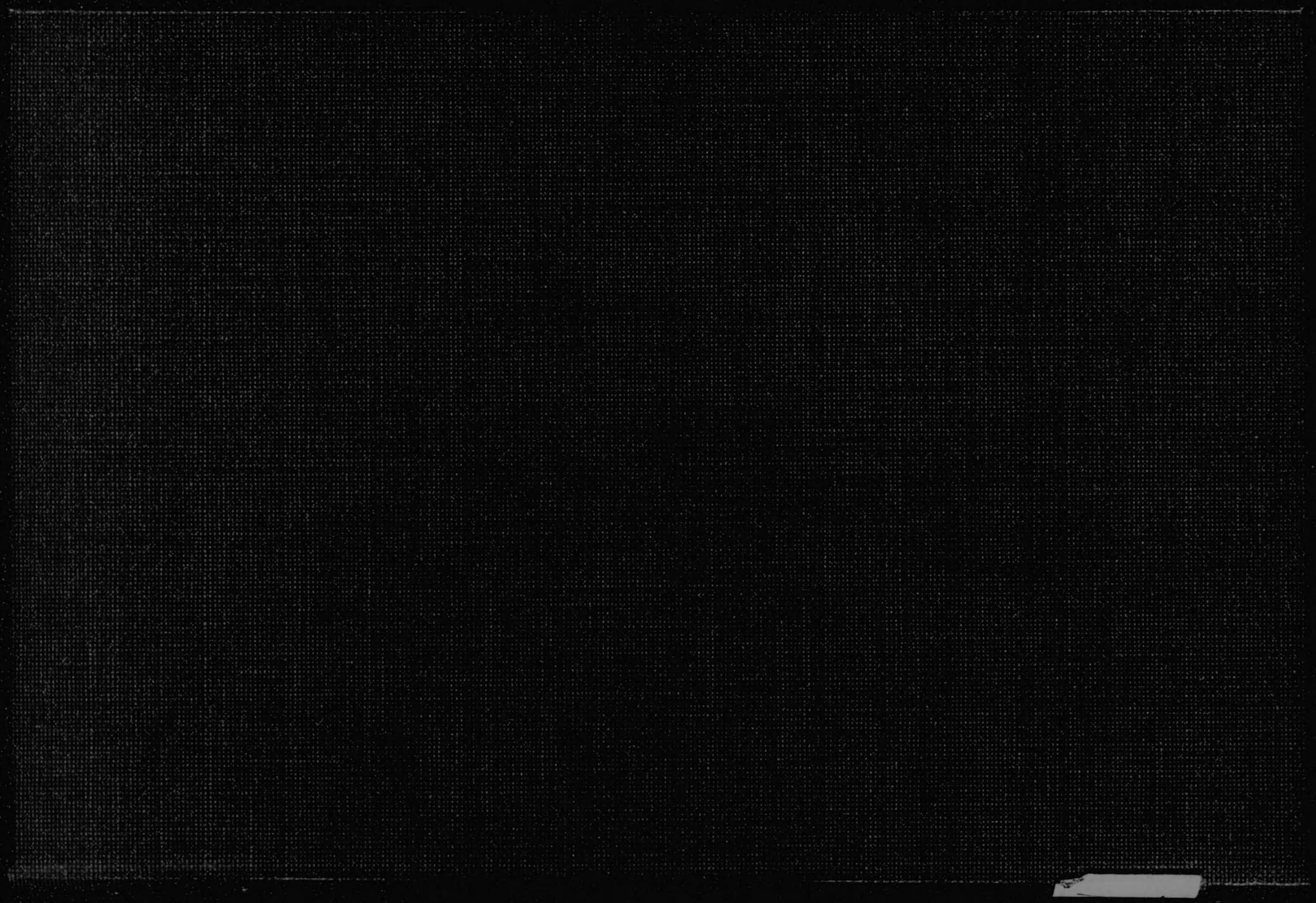
アチック ミューゼアム編

北部多島海巡航備忘錄

（近刊）

〔第一五輯〕

アチック ミューゼアム編

蔚山邑達里農村見聞錄雜纂

（近刊）